

鹿児島高専だより

第75号

令和3年3月

〈特集〉「鹿児島高専アクションプロジェクトチーム」



独立行政法人 国立高等専門学校機構
鹿児島工業高等専門学校

目 次

校長室から

難しい専門科目への挑戦から ……1

特 集

鹿児島高専アクションプロジェクトチーム ……2

教務だより

コロナ禍における鹿児島高専 ……7

キャリア教育とFD研修会について ……12

学生だより

カウントを続けて ……13

2020年度体育祭 ……14

高専祭（体育祭） ……14

コロナ禍での文化祭 ……15

皆さんの「愛車」について ……15

初めての学生主事補 ……16

大会等入賞一覧 ……17

学生表彰者リスト ……18

志学寮だより

コロナ禍の寮務主事 ……19

周りに支え続けられた1年間 ……21

小さな部屋でも森にいるような、未来の志学寮 ……21

寮生専用の美味しい水あります ……22

就任のご挨拶 ……22

新着任のあいさつ ……23

専攻科だより

専攻科について ……24

奈良先端科学技術大学院大学における

インターンシップ報告 ……25

インターンシップを通して ……26

地域共同テクノセンターだより

地域共同テクノセンターの活動について ……27

学生何でも相談室だより

心理学の世界 ……29

教職員研究活動

表現主義研究 ……30

研究紹介 ……31

鹿児島の農業文化の継承のために ……32

研究について ……32

卒 業

卒業を迎える皆さんへ ……34

卒業を迎えて ……35

高専生活を振り返って ……35

卒業にあたって ……36

自由 ……36

ターニングポイント ……37

7年間の高専生活を経て ……37

7年間を経て ……38

7年間の高専生活 ……38

卒業生の就職・進学先一覧及び

修了生の就職・進学先一覧 ……39

教職員の動向

高専教育は如何にあるべきか

—38年の教育活動を振り返って— ……42

定年退職にあたり思うこと ……43

定年退職を迎えて ……43

出会い巡りあい ……44

国際交流だより

Withコロナ時代の国際交流 ……45

Our Future in Globalized Society ……46

TOEIC講座「だから」の先を変えていく ……47

Global Clubのミッション ……48

同窓生だより

私の同期はCOVID-19 ……49

高専を卒業・修了して思うこと ……49

宝 ……50

多くの人に支えられて ……50

大学院へ進学して ……51

やりたいことを、探しに行こう ……51

在校生の皆様へ ……52

広報委員会だより

コロナ禍における学校PR ……53

後援会だより

後援会卒業にあたり ……54

ありがとう ……55

「あっ」という間の5年間 ……55

有意義な高専生活をありがとう ……56

5年間を振り返って ……57

未来へ続く扉を開けながら ……57

大きく翼広げ 翔け上がれ!! ……58

行事予定

2021年度 行事予定表（暫定版） ……59

【表紙の説明】

写真上左：令和2年度 第1回 学生表彰

写真上右：第3回 リカジョ賞奨励賞受賞

写真下左：令和2年度 第2回 学生表彰文化賞

写真下右：令和2年度 第2回 学生表彰スポーツ賞





難しい専門科目への挑戦から

校長 氷室 昭三

2020年9月の日曜日、4週連続で朝のFMラジオ番組“サンデープレゼントーおはよう昭和音楽館ー”に出演させていただきました。そこで話した内容の一部を紹介したいと思います。私が大学生になったときの話です。当時、私は大学の授業にたいへんショックを受けました。授業に行ったらすごいことを先生から学べるとばかり思っていました。これが大きな期待外れでした。

私は、“化学”を専門とする学科に入ったのですが、1年の教養の“化学”が全く理解できませんでした。内容は化学平衡の講義でした。われわれは高校で学んだ速度論から導かれる化学平衡しか理解していないにもかかわらず、先生は熱力学的化学平衡論を講義していたのです。3年になり、熱力学を学んで熱力学的な化学平衡というものがあることをはじめて知りました。

この熱力学は、“物理化学”という科目に出てくるのですが、エンタルピーやエントロピーといった抽象的な概念で仕事や熱量を説明しています。教科書は英語で書かれていましたし、授業を聞いただけで、先生の講義についていくことは私には無理でした。教養の“化学”の単位は、教科書に出てきている式を公式として暗記し、それを試験に反映することで取得できました。しかし、“物理化学”では、理解できないのが悔しかったので、そこに出てくる式を一つひとつ、その成り立ちから調べました。時間は少々かかりましたが、意外とよく理解でき、教科書を見ないで他人に説明できるようになったのです。

“物理化学”はこのやり方で何とかあったのですが、“量子化学”は最初から難しい数式がいっぱい出てきてわかりませんでした。これは教科書だけではとても理解できないと判断し、図書館に通い、さまざまな量子に関する本を読んで、当時の人の気持ちになって紐解いていくこ

とにしました。光の強度と振動数の関係に悩んだと思われるプランク、“閃き”あるいは“イマジネーション”で現象を解いたアインシュタイン、簡単でしかも鋭い仮定を示したボーア、ヘルゴラント島で療養中に新しい展開をしたハイゼンベルグ、など種々の考え方について、その過程を想いながら彼らが示している式を紐解きました。

調べている中で長岡半太郎という日本人が出てきて驚きました。当時トムソンの原子モデルに注目が集まっていたのですが、長岡半太郎は土星型の原子モデルを提唱しています。しかし、長岡半太郎のモデルは、電子が光を放ってエネルギーを消費すると電子は原子核に引きつけられてしまうという理由で注目されていません。その後、トムソンの弟子であるラザフォードが、金箔にアルファ粒子を照射する実験から長岡半太郎と似たようなモデルを提唱するのです。ちなみに長岡半太郎は湯川秀樹をノーベル賞に推薦した人でもあります。

このように調べていく中で、長岡半太郎からいろんな人のつながりが、頭の中で形成されました。もちろん、プランク、アインシュタイン、リドベリー、ボーア、ハイゼンベルグ、シュレディンガーとつながっていきますが、一方で、寺田寅彦、夏目漱石、小泉八雲など、量子論から離れたつながりを形成できました。

この中の寺田寅彦は熊本の第五高等学校に入学していますが、そこで出会った英語の先生が夏目漱石です。彼は夏目漱石にたいへん影響を与えたようで、“吾輩は猫である”とか“三四郎”の登場人物にもなっています。彼は、明治32年に東京帝国大学へ行き、長岡半太郎の教えを受けているのです。

寺田寅彦の“天災は忘れられたる頃来る”という言葉が有名ですが、伊集院静の“ミチクサ先生”の中で夏目漱石が寺田寅彦に論じます。彼がこれまでの自分の人生を振り返っての言葉です。「いろんな道の端で、半ベそを掻いたり、冷や汗をかいたりしていたんだ。“我楽多”とか“用無し”と呼ばれたこともあった。その時は少し切なかったし、淋しい気持ちになったが、そんな私をちゃんと見守ってくれたり、手を差し伸べてくれる人がいてね。その人の温もりで寝た夜もあったよ。わかりきったことをして何になる？あちこちぶつかりながら進む方がきっと道が拓ける。」

目標に向かって真っすぐ進むのではなく、いろんな進み方を体験しなさいと夏目漱石は言っています。そういう生き方が人生を愉しくするというのを、難解な専門科目を紐解くことから学びました。



アクションプロジェクトチームメンバー（左から、町先生、白石先生、逆瀬川先生）

特集 鹿児島高専アクションプロジェクトチーム



鹿児島高専アクションプロジェクトチームに参加している先生方に、アクションプロジェクトチームの活動について、インタビュー形式で質問を行い、その回答をまとめた記事を作成しました。

鹿児島高専アクションプロジェクトチームの責任者をしている電子制御工学科 岸田先生に鹿児島高専アクションプロジェクトチームについてお聞きしました。

Q 1 鹿児島高専アクションプロジェクトチームの目的はなんですか。

（岸田先生） 鹿児島高専アクションプロジェクトチームの活動の目的は、3つあります。1つ目は、「鹿児島高専の将来ビジョンの立案」、2つ目は「自己点検評価の見直し、数値目標等の提案」、3つ目は「教員による自己点検評価の改善」となります。鹿児島高専が、学生、教職員、保護者、その他の関係する方々にとって魅力ある学校になるための活動を行っています。

Q 2 鹿児島高専アクションプロジェクトチームはどなたが参加されていますか。

（岸田先生） 鹿児島高専アクションプロジェクトチームは、常設の委員会とは異なりプロジェクトチームとして

の活動となります。参加されている先生方は、通常の業務に加えてプロジェクトチームの活動に参加していただき、大変感謝しています。チームメンバーは、一般教育科から町先生、機械工学科から白石先生、電気電子工学科から逆瀬川先生、電子制御工学科から私、情報工学科から古川先生、都市環境デザイン工学科から川添先生となっています。オブザーバとして、氷室校長、松田教務主事にも参加いただいています。チームのメンバーの先生方には、鹿児島高専の将来について真剣に議論いただいております、現在（12月2日）までに13回の会議を開催しています。

Q 3 現在取り組まれている課題について教えてください。

（岸田先生） これまでに、教員の自己点検評価票（案）の作成、本校の自己点検評価表見直しのための活動、FD活動（研修会、セミナー）、公開授業（教員相互による授業参観）、新しい教育組織（案）の作成、共通教育実施立案等に取り組んできており、現在も継続して取り組んでいます。

Q 4 鹿児島高専アクションプロジェクトチーム活動は今年度限りですか。

（岸田先生） 鹿児島高専アクションプロジェクトチームはプロジェクトとしての活動ですので、今年度限りとなりますが、来年度からは総務企画委員会が新たに設置されますので、これまでの活動は総務企画委員会に引き継がれることになります。



アクションプロジェクトチームメンバー（左から、岸田先生、川添先生、古川先生）

都市環境デザイン工学科の川添先生に現在検討している1年生混合クラスについてお聞きしました。

Q 5 1年生混合クラスとは何でしょうか。

（川添先生） 5学科の1年生を文字通り「混合」し、5クラスに再編成した1年生限定のクラスです。令和4年度からは、通常は混合クラスで授業を受け、週に3～4コマは専門の学科のクラスで授業を受けることになります。

Q 6 1年生混合クラスの目的は何でしょうか。

（川添先生） 混合クラスを設けることにより、いろいろなメリットが有ると思います。主なものを挙げますと、①一般科目の共通教育の実施、②PBL科目の導入、③共通実験の導入、④所属学科以外の学生との交流、⑤転学科が容易なる、等があります。

Q 7 混合クラスの導入時期はいつを検討していますか。

（川添先生） 令和4年度からの導入を予定して検討を進めています。

Q 8 一般科目の共通教育に期待することは何でしょうか。

（川添先生） 高専の学生が卒業後、大学の工学系学科に編入学する場合でも、いわゆる「受験勉強」をする必要

はありません。従って、一般科目の授業では、技術者に必要な知識の習得を念頭に置いた教育が可能です。共通教育の導入により、各科目内の教員が連携し創意工夫することにより、工学を志す学生にとって「興味関心を促す有意義な授業」の実現が期待できます。

Q 9 1年生の専門科目で検討している共通教育は何がありますか。

（川添先生） 先ほども話題に出っていますが、PBL科目、共通実験、リテラシー科目についての共通教育があります。

Q10 PBLとは何でしょうか。

（川添先生） PBLとは、Project-based learningの略で問題解決型学習とも呼ばれています。高い教育効果が認められており、工学系教育では広く採用されています。高専らしい教育の一つと言えます。

電気電子工学科の逆瀬川先生に鹿児島高専における外部評価についてお聞きしました。

Q11 外部評価とはなんですか。

（逆瀬川先生） 大学等の高等教育機関が教育研究活動等について自己点検した評価に対し、外部機関あるいは外部組織から評価を受けることです。

Q12 外部評価の種類について教えてください。

(逆瀬川先生) 外部評価は大きく分けて、機関別認証評価(7年以内)、監事監査(原則5年以内)、特例適用専攻科教育状況審査(5年以内)、外部評価委員による評価(毎年)、高専機構年度計画(毎年)、九州沖縄ブロック産学連携会議(毎年)があります。機関別認証評価は大学改革支援・学位授与機構(以下、学位授与機構)が実施し、監事監査は高専機構が実施するものです。特例適用専攻科教育状況審査は学位授与機構が実施するもので、専攻科の教育研究内容および教員の科目担当資格について審査が行われます。外部評価委員による評価は、主に本校独自の計画や目標に対する教育研究活動等について行われます。

Q13 なぜ外部評価を受審しなといけないのでしょうか。

(逆瀬川先生) 学校教育法施行令第40条において、外部評価を受けることが義務付けられていることが大きな理由です。高専は高等教育機関ですので教育研究活動等が学校教育法、高等専門学校設置基準の関係法令に適合している必要があります。その意味で、最も重要な外部評価と位置付けられているのが、機関別認証評価です。機関別認証評価では、教育研究活動等の改善を主体的・継続的に行う仕組み(内部質保証システム)を学校独自に確立することが求められています。そのため、本校が独自に行った自己点検・評価が客観的に妥当であるかの検証を行うために、各種の外部評価を受ける必要があります。

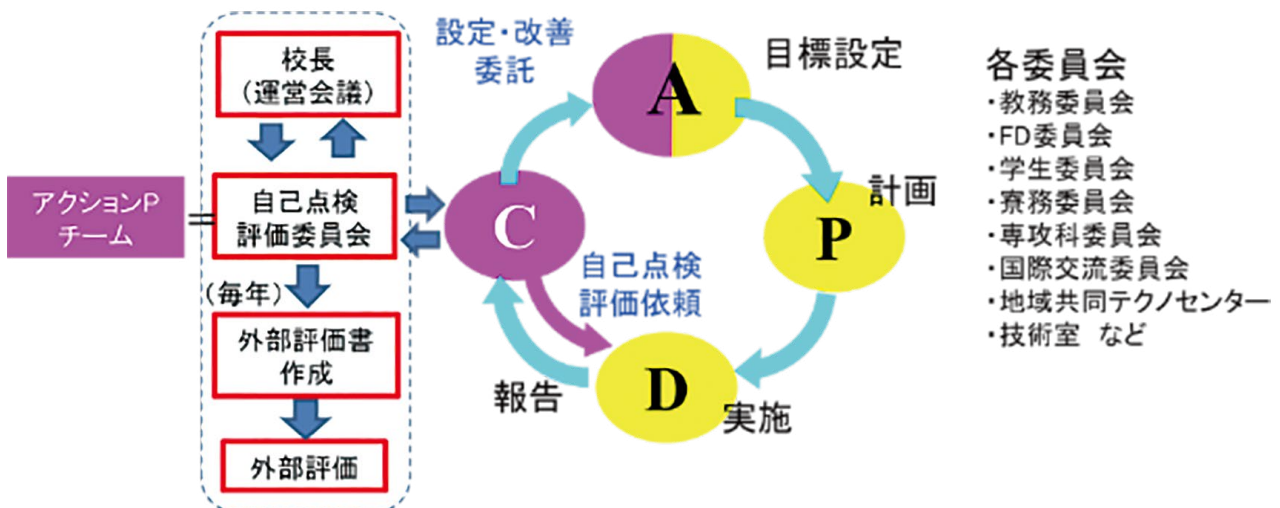
Q14 鹿児島高専の外部評価の対応状況はどうでしょうか。

(逆瀬川先生) 本校は平成30年に特例適用専攻科教育状況審査、令和元年に機関別認証評価と監事監査を立て続けに受審しました。また、外部評価委員による評価も毎年受けています。機関別認証評価では、成績資料の保管状況、成績評価方法の妥当性、試験問題レベルのチェック体制など教育の根本に関わる項目で指摘を受けましたので、改善に向けて着実に取り組んでいく必要があります。外部評価委員による評価では、様々な教育研究活動に対する数値目標の設定の必要性について指摘されました。また、PDCAサイクルの再構築の必要性についても指摘を受けました。これらの指摘により、本校はPDCAサイクルの再構築が急務であると言えます。

Q15 外部評価に対応するためにどのような計画で進めているか教えてください。

(逆瀬川先生) 今年度、アクションプロジェクトチームが発足し、現在、2週間に1回程度の割合で継続的に各指摘事項に対する検討を行っています。図1に現在のPDCAサイクルイメージを示します。図1に示すように、アクションプロジェクトチームはPDCAサイクルのうち、CとAの一部に関する役割を担っており、アクションプロジェクトチームと関係部署が協力しながら、指摘事項への対応について検討を行っています。これによって、PDCAサイクルのシステムが機能し始めていると考えています。今後の外部評価への対応方法としましては、5年毎、7年毎に対応するのではなく、内部質保証システムを確立し、年度毎に外部評価委員による評価を受審することによって、主要な外部評価にも対応できる体制を構築していく方針です。

FD活動の一つである公開授業について一般科目教育科の町先生、情報工学科の古川先生にお聞きしました。



Q16 公開授業とは何でしょうか。

(町先生) 教員がお互いに授業を参観しあい、お互いの良いところを学ぶ機会と考えています。

(古川先生) 高専の教員は授業スキルを身に着ける機会が少ないので、他の先生がどのように授業を展開しているかを学ぶ機会と考えています。

Q17 公開授業において、授業を実施している教員はどのように感じますか。

(町先生) いつもの授業と違って、同僚の教員に見られているという緊張感がありました。普段、無意識に行っていたこと、例えば、時間の配分や説明の仕方、導入やまとめは適切か等に意識を向け、見直す良い機会となりました。

(古川先生) いつどの先生が来られるかもしれないという緊張感をもって授業が出来たと思います。授業に取り組む前に、授業資料の確認などをする時間をとるようにしました。

Q18 公開授業の参加率はどのようになっていますか。

(町先生・古川先生) 82%の参加となりました。教員の先生方は、いろいろと忙しくされていますので、公開授業の期間に参観できなかった先生方もおられると思います。来年度は、全員参加していただくように、案内を早くするなどしたいと考えています。

Q19 公開授業にどのような成果を期待していますか。

(町先生) 教員全体の授業力の向上を期待しています。こうした活動を通じて、授業について教員同士がコミュニケーションをとる機会を増やすことが、その第一歩になると考えています。

(古川先生) 授業スキルの向上を期待しています。専門科目を教えていますので、専門科目の内容の理解に必要な数学を、低学年時にどのように教えているのかを学ぶ良い機会となりました。

Q20 公開授業は毎年実施される予定ですか。

(町先生・古川先生) 今年度は鹿児島高専アクションプロジェクトチームの活動として後期に実施しました。来年度は新設される総務企画委員会の活動として前期に実

施する予定でいます。

機械工学科の白石先生にこれからの高専教育に必要なことについてお聞きしました。

Q21 高専は高等教育機関に属していますけど、高等教育機関とはどういったものでしょうか。

(白石先生) 中学高校が中等教育機関、高専大学が高等教育機関であることを考えると「自ら考えて自ら行動できる者が学ぶ教育機関」だと思っています。高等教育のトピックからは少しずれてしまっていますが、学生が「何のために、そして誰のために学ぶのか？」という学びの目的を意識したときに、その学びの要求に応えられるだけの環境が整備されているのが高等教育機関だと思っています。

Q22 高専は求人倍率も高く、社会から期待も大きいと考えられますが、その理由は为什么呢。

(白石先生) 社会や企業の求めるエンジニア（の卵やひな鳥）を育て続けているからだと思っています。

まずは人材としての観点から見ると、しっかりとした工学的な基礎学力があることと、実験を通した工学的感性が養われている点が評価されています。それに加えて、真面目さと若さゆえの柔軟性（物事を受け入れる力）があり入社後の成長性を買われている面があります。

もう1つは、職種ニーズとのマッチングです。製品ができるまでには、研究・開発・設計・生産技術・製造・保全・品質管理など多くの職種が関連します。現在、就職戦線にいる工学系学生の大部分は大学院生です（感覚的には大学院卒7割、学部卒2割、高専卒1割くらいでしょうか）。それでは、働くときに必要とされる知識レベルが大学院卒程度なければならないかと言えば、多くの場合はそうではないでしょう。研究以外の分野については、高専で学ぶ内容がしっかり身につけていれば十分であると多くの採用担当者からの声を聞きます。高専の学生は、高専教育を受けてのものづくりそのものに慣れ親しんでいる学生が多く、企業が求めている様々な職種に対応できる素養が備わっているため、企業の求める人材として人気があるのだと思います。

Q23 高専教育の特徴は何でしょうか。

(白石先生) 教育面では、5年一貫で実践的・創造的な技術者を養成する体験重視型の教育内容が準備されており、その学習機会を中学校卒業直後の向学心あふれる若者に提供しているところが大きな特徴だと思います。さ

らに高校と異なる点としては、学習指導要領の範囲にとられない教育を実施できるため、必要に応じて柔軟かつ迅速に授業内容をアップデートできます。

環境面では、専門的な実験設備や装置が充実しており、さらに技術職員の手厚いサポートが受けられる所が学生の力を伸ばす要因になっています。ものづくりに強みを持つ高専生はこのようは地盤の上に成り立っていると言えます。ロボコンやエコランなど、ものづくりやデザイン性に特化した活動に学生が参加できるのも特徴のひとつと言えるかもしれません。

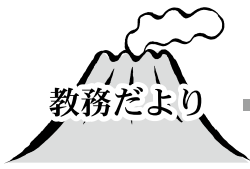
生活面では、学生の自由度が高いというところでしょう。自分の行動や勉強した結果には責任を持たなければならないですが、言い方を変えれば、自分のやりたいことに十分に時間を確保できる環境があります。

Q24 これからの高専教育に必要なことは何でしょうか。

(白石先生) これまで高専といえば、企業に就職してゆくゆくは製造現場のリーダーになるというモデルが皆さんのイメージとしてあると思います。そのストーリーの前提には、メンバーシップ型雇用があり、高専で学んだ技術をさらに企業で使えるように適材適所で再教育していくという現実がありました。そういった背景から、これまでの高専教育では企業で働くときに困らないように教育していた面がありました。そして、それはある程度成功していると言えます。しかし、今、ジョブ型雇用の波が押し寄せてきています。また、withコロナ時代に突入し、場所を選ばなくても仕事が回せることに世間も気づきました。場所を選ばないとなると、海外の優秀な学生達とも競わなければならなくなります。これまで以上に個の力が問われる時代が到来しています。この流れの先には、自分で開発した技術・システム・製品を自分で売り込むエンジニアが求められるのだと思います。これからの高専教育には、本校の理念にもある「開発型技術者」に今一度フォーカスして、学生が真の開発力を身につけ、それを世界に発信できるようになるための教育が必要になってくると考えています。

今回の鹿児島高専アクションプロジェクトチームのインタビュー記事は以上となります。鹿児島高専では、より良い技術者教育の実践に向けて、日頃から様々な委員会やプロジェクトチームにおいて議論をしていますが、これからも議論を続け、その成果を実現していきたいと考えています。





コロナ禍における鹿児島高専

教務主事 松田信彦

はじめに

今年のご存じのとおり、新型コロナウイルスの影響で、高専の教育現場にも大きな混乱をもたらしました。ここでは、学生、保護者、および本校関係者の皆様への報告と、将来、2020年を振り返った時の記録として、今年の出来事を書き留めておきたいと思います。

1) 昨年度末

まず、本来ならば、昨年度のことには書かないのが普通ですが、昨年度の高専だよりの原稿を書いたあとの出来事でもあるので、2020年2月頃から振り返ることになります。ご存じの通り、2月中旬頃から、全国的にも新型コロナウイルスの感染が広がりを見せはじめ、当時の安倍首相が3月2日から全国の小中高校に臨時休業要請を出したのは、皆様もご記憶のことでしょう。2月下旬に高専は入試も終えており、学生も春休みにちょうど入ったばかりで、鹿児島高専への直接の影響は少なかったものの、3月になると、アジアからヨーロッパに飛び火し、ヨーロッパで急速に蔓延していきました。ちょうどその時期、本校からは専攻科生が2名、フランスとドイツの大学にアカデミックインターンシップに参加していました。また、本校の主催事業ではないですが、九州地区の大学・高専の学生のためのドイツ研修が計画されており、いくつかの大学・高専が直前に参加を取りやめる中、本校の5年生がドイツへと旅立っていきました。いずれも、学生にとっては何にも代えがたい貴重な体験であるため、応援したい気持ちと、大丈夫であろうかという不安とが交錯する1ヵ月でしたが、いずれも、予定の期間を少し短縮した上で、3月中旬から下旬には無事帰鹿しました。

一方で、3月といえば、卒業のシーズンですが、本校も、時代の流れには逆らえず、やむなく卒業式は中止とし、当日、学科ごとの時間差で、卒業証書渡すという方法に切り替えました。またそれより先の3月上旬に行われた、入学試験の合格内定者登校日、いわゆる合格者説明会も、1か所に集めるのは良くないということで、各教室に分かれての校内放送の形式を取りました。すべてが初めてのことであり、我々教職員も、連日の会議で様々な行事への対応を検討していました。

2) 新年度

さて、春休みも終わり、新年度を迎えて最初の問題は入学式です。全国の高専の多くが、入学式を取りやめ、しかも授業も開始できない状況でしたが、そういう中で、

本校は、まだ鹿児島ではそれほど感染が拡大していないという状況も手伝い、他の高校などと同様に、新入生と教職員だけの入学式を挙行し、翌日の始業式は校内放送の形をとり、以後は、通常の授業を実施しました。

一方、全国の高専では、入学式を延期して当面は休校措置を取った学校、あるいは入学式だけは挙行了したもの、その後は休校に入った学校も多くあり、通常どおりの授業を行っている高専はほとんどありませんでした。また、折しも県内でも感染が出始め、県内の高校生、専修学校生などの感染も続き、学校教育現場にも緊張が走りました。本校にも、様々な方面から、いつまで学校（授業）を続けるのかという声も届くようになり、本校でも熟議の末、2週目以降も対面授業は継続するものの、電車内の蜜を避けるため、授業開始を30分遅くし、また寮内での感染予防のため、昼休みを30分延長し、寮食堂内の3密を避けることとしました。あわせて、その分1時間ほど授業終了が遅くなるため、80分授業で実施することとしました。

しかし同時に、この時には、休校および遠隔授業の実施に向けた話し合いが並行して行われていました。4月7日には東京他、6つの主要都市に緊急事態宣言が出され、全国的にも先行きの見通せない状況があることも踏まえ、それが全国に広がるかもしれないとの懸念もあり、このまま授業を続けるのは厳しい状況にあるとの判断から、4月15日に、17日（金）の授業を最後に、当面休校措置をとることとし、2週間ほどの準備期間を設けて、5月（GWを含む）から遠隔授業に入ることを学生に周知しました。

ちょうどその直後のタイミングで、政府は16日から緊急事態宣言の地域を、当初の7都府県から全国に広げるとを発表しました。

休校中は、教員もテレワークが可能な者は在宅勤務としましたが、遠隔授業の準備をするために、3度ほど遠隔授業（の教材作成）のための勉強会も開き、手探りの状況ではありますが、教員の方も5月からの遠隔授業に備えました。

本校は、遠隔授業とは関係なく、しばらく前から、moodle という eラーニングの実施に必要な学習管理システムを導入しており、一部の教員が授業で補助的に使用はしていたので、新たに、遠隔授業のシステムを導入する必要はありませんでしたが、この moodle というシステムは一癖あり、初めて使うには、ややハードルが高いところがありました。（これは学生も同様です）

そこで、教員にも、その使い方も含めて、遠隔授業の教材作成に必要な事項などを、勉強会をとおして確認していましたが、他にも問題がありました。本校の moodle は、システムの構築上、今回のような遠隔授業は、元々想定されていないので、同時に接続できる人数が、

およそ 200 人までで、それ以上になると、いつシステムがダウンするか分からない状況でした。実際のところは、やってみないと、どの程度の負荷がかかればダウンするのかも分からないので、学生たちには、できるだけ分散して接続できるように、そして、万が一、レスポンスが遅いような場合は無理に接続せず、少し待って、時間を空けてから接続するようにお願いをしました。

その甲斐あってか、遠隔授業期間中は、心配したシステムダウンは起こらなかったのは幸いでした。

本校は、当初から、リアルタイムでの遠隔授業は、原則として実施しないことを決定していました。ひとつは学生のインターネット環境が、必ずしも、高速かつ大容量の通信に対応できていないこと、そして教員の方もそういう機器の取り扱いに、十分に対応できるわけではないこと。そして、全国的にも大学等では遠隔授業を実施していることで、日本全体のインターネット回線が不安定になっていることなどが理由でした。実際、多くの大学で、双方向かつリアルタイムの遠隔授業を実施して、うまくつながらない学生がいる、あるいは、教員はつながっていると思って授業しているけれども、実際には、誰も接続していなかった、そして、遠隔授業を始めたたん、サーバーに負荷がかかりシステムダウンしたなど、失敗例が多数報告されていることから、その判断は間違いではなかったと考えています。

ちなみに、それからしばらく後にはなりますが、最近の報告でも、リアルタイムの遠隔授業は、実際にやってみたら、あまり授業効果がないとの報告もあります。パソコンの向こうで、学生はただ画面を開いているだけで、授業は聞いていないという結果が出ています。つまり教室内ならまだしも、90 分間、学生に画面に集中させるだけの授業をするのは、極めて難しいということです。あと、上述のとおり、学生によってはインターネット回線が高速・大容量に対応できない場合があること、そして本校の moodle のサーバーの性能の問題からも、動画での授業も原則不可としました。

そこで、本校では例えば音声付きのパワーポイントや、PDF + 音声ファイルというような形を基本形とした、オンデマンドの遠隔授業としました。オンデマンドであれば、一斉に接続しなくても、ある程度の幅で、学生の都合に合わせて接続すればいいので、サーバーにアクセスが集中することも避けられる上、ファイルサイズが、動画やリアル配信に比べ、圧倒的に小さくなるので、インターネットの環境に不安のある学生にも対応できます。また、一度ダウンロードしてしまえば、分からないところは何度でも繰り返し見て、復習することも可能です。

どの方法にも一長一短があるので、何が正解ということとは言えませんが、本校の環境と、学生の環境、遠隔授業を実施した期間を考えると、ベストとは言えないかも

しませんが、ベターな選択だったと考えています。

3) 対面授業再開

さて、当初 GW 中に、まず 1 週間分の遠隔授業を実施し、その後、GW 明けは、通常の授業時間割に準じる形で、遠隔授業を続けていきましたが、いつまで遠隔授業を継続するののかについては、簡単な判断ではありませんでした。県内の小中学校および高校は、GW すぐからの授業再開を、遅くても、週明けの 11 日から、やや限定的ではあるものの授業再開をする状況でしたが、高専はやはり県外に実家のある学生もいる上、上級生はいろいろな意味で移動エリアも広いので、感染リスクは中学生や高校生と比べても、やはり高いと考え、中学や高校が全面的な通常授業を再開するタイミング、つまり 5 月 25 日付けでの授業再開とし、それまでは遠隔授業を継続することとなりました。

結果、遠隔授業では GW もあわせると、ほぼ 1 ヶ月分の授業を行ったことになり、4 月 20 日からのやく 1 ヶ月余りにおよぶ、休校期間の授業の遅れは、1 週間程度ですみました。ただし、それはあくまで座学の問題です。高専はご存じのとおり、実験・実習に重きを置くのが特徴で、この実験・実習については、ほぼ 1 ヶ月分の遅れが生じたことになりました。

ところで、当初の予定では、中間試験が対面授業再開後間もない 6 月上旬に実施される予定でしたが、教員、学生双方に、十分に遠隔授業での教育・学習ができていない部分があること、そして、実験・実習科目の授業が大きく遅れていることから、中間試験は中止とし（たゞそ授業時に中間試験をすることは可）、その試験期間の 3 日間は特別時間割とし、遅れた実験・実習を集中的に組み、空いた時間は、遠隔授業を十分に行えなかった座学を中心に補講を組みました。また、7 月下旬にも、3 日間同様の特別時間割を組み、合わせて、期末試験の期間をお盆明けにずらし、答案返却を 9 月 4 日までに終わらせ、ここで前期のカリキュラムをすべて終了させることができました。よその高専は、遠隔授業の期間が長く、事実上、夏休みをとっていない学校や、とったとしても 1 週間程度という学校が多い中で、本校としてはほぼ 1 ヶ月の夏休み期間を確保できたのは、学生にとっても良かったのではないかと考えています。

4) 遠隔授業アンケート

遠隔授業が終了してしばらくして、学生に遠隔授業の授業ごとの評価と、学校の取り組みとしての遠隔授業全体のアンケートを実施しました。今後、もし同様のことがあったときに備え、一歩でも二歩でも前に進んだ授業を展開するための参考としたいからです。

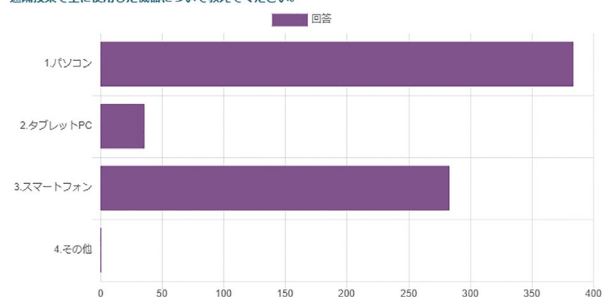
各々の授業については、各教員で自分の評価を確認し

て次の機会に活かしてくれると思っていますが、全体として、予想よりも、評価は低くはなかったようです。よくマスコミなどでも大学での遠隔授業に、非常に不満を持っている学生がいることが報道されている中、正直なところ厳しい意見が出るのは覚悟の上で、アンケートを実施しましたが、基本的に本校の学生は、比較的、好意的にまた良心的に教員を評価してくれたようです。

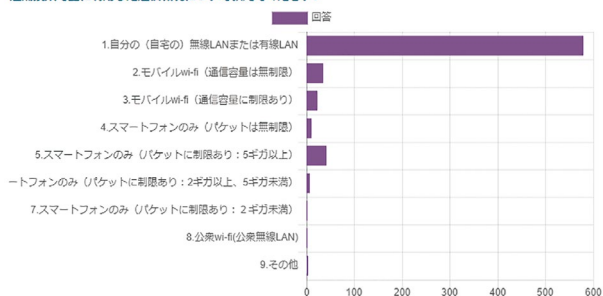
また、遠隔授業全体でのアンケートについても、各自、自分の受けた遠隔授業の中で、分かりやすかった（良かった）授業・教員を挙げてもらいました。その結果で、学生からの支持の高かった教員については、各学科の教員にその授業を遠隔で実際に受けてもらい、その良いところを吸収し、逆に気づいた改善点などを、当該教員に伝えるという取り組みも実施しました。

なお、学生からの、遠隔授業全般に対する回答は以下のとおりです。

遠隔授業で主に使用した機器について教えてください。



遠隔授業で主に利用した通信環境について教えてください。



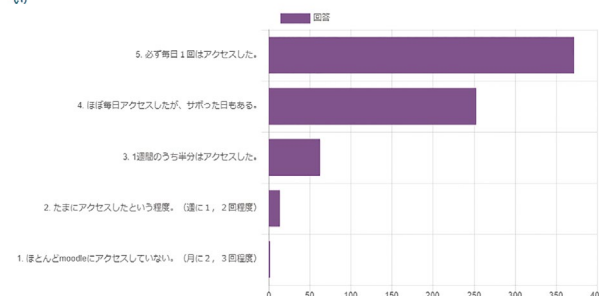
小さくなって、少し見にくいかもしれませんが、最初のグラフは、遠隔授業で使用した機器についての質問です。一番多いのは、パソコンですが、スマートフォンもそれに近い数でした。有効回答数が700余りの中で280程度がスマートフォンと回答しています。実に回答数の4割に上ることになります。この中にはパソコンも持っているが、スマートフォンの方が便利である、または楽であるということで、それを使用した学生もいるだろうとは思いますが、今後、遠隔授業をする際には、できるだけ画面の大きなパソコンを使ってもらえるよう、学校としても各家庭に促していく必要を感じています。また同時に、そういう環境が整っていない学生には、学校からノートパソコンを貸し出しできるように、100台以上

というレベルで、整備を進めています。

二つ目のグラフは、各学生の通信環境です。これを見ると、かなりの学生が、遠隔授業に対して十分な通信環境を備えていることは分かります。ただ、やはり1割程度の学生は、通信量（パケット量）に制限があるなど、必ずしも十分とは言えない状況でした。

パソコンなどの端末については、ある程度のサポートは可能なように整備しているところではありますが、通信環境については、今後、もし遠隔授業になるようなことがあれば、動画やリアルタイムの双方向授業などにも対応できるよう、できるだけ各家庭で整備していただければ有り難く存じます。

あなたの今回の遠隔授業での、moodleへのアクセス状況を教えてください。（合致するもの、または一番近いものを選んでください）

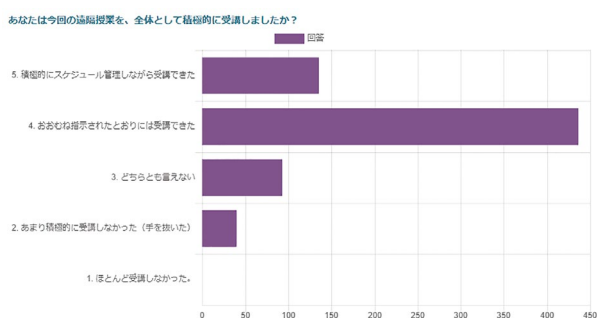


次のグラフは遠隔授業中の、moodleへのアクセス状況です。一番上は、「必ず毎日1回はアクセスした」ですが、全体の53%になります。2番目の「ほぼ毎日アクセスしたが、サボった日もある」の36%と合わせれば、学生のほぼ90%は、遠隔授業に比較的積極的に取り組んでいるように思われます。しかし、これには少し裏があります。先ほど、有効回答数が700余りと書きましており、きちんと回答してくれた学生が、全学生の7割程度しかおりません。このアンケートはmoodle上で実施しているので、遠隔授業が終わったあとも、moodleにアクセスしているような学生ばかりの回答で、そもそも、普段から（遠隔授業中）も、あまりmoodleにはアクセスしていない、あるいは、ほとんどアクセスしていないという学生は、このアンケートに回答していない可能性があります。つまり、今回のアンケートは、遠隔授業に対し、比較的まじめに取り組んでいた上位7割程度の学生によるものだと考えています。

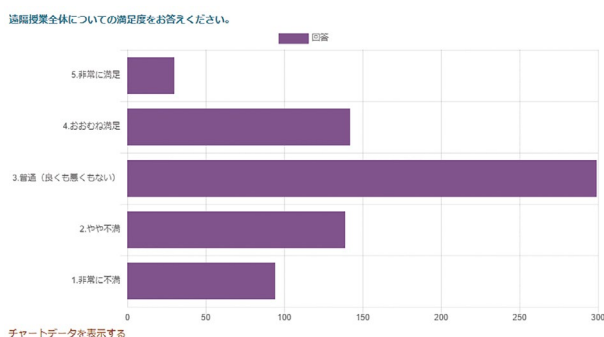
それでも、全体の7割の学生のさらに90%ですので、少なくとも、全体の60%以上の学生が、比較的まじめに取り組んでくれたことになります。

遠隔授業の問題はここにあって、そもそも、アクセスしてもらわなければ、受講してもらえないところにあります。対面授業であれば、サボって学校を欠席するという学生はほとんどいませんし、いたとしても、その日のうちに電話やメールで、なぜ休んでいるのか？あるいは

翌日に担任からどうして休んだのか？などと問い詰められるでしょうが、遠隔授業はその辺のハードルが、学生から見ればずいぶん下がってくるのではないかと思います。特に、リアルタイムではなく、オンデマンドであればなおさらです。オンデマンドは、学生の都合に合わせて、時間的な制約が少ないことと、いつでも何度でも教材を見直せるという利点がありますが、それは、一生懸命に取り組む学生にとっての利点です。元々、学習に対して消極的であったり、意欲の低い学生には、学校としてもしっかり対応しなければ、授業についていけなくなる学生が増えることとなりますので、この点が今後の大きな課題ということになります。



このグラフは「今回の遠隔授業を積極的に受講したか」という質問です。すでに述べたとおり、このアンケートに回答したのは、そもそも比較的まじめに取り組んだ学生の答えですので、80%以上の学生が、積極的に受講できた、または、おおむね指示されたとおりに受講できたと回答してくれています。逆に、手を抜いたという学生は5%強の40名にとどまりますが、その裏に、およそ300人の未回答の学生がいるので、その辺も含めての「手を抜いた」学生は最大で全体の35%程度の数を見込む必要があるかもしれません。



最後に、遠隔授業全体に対する満足度ですが、これは正直なところ、本校の遠隔授業に対する評価は、全体として厳しいと受け止めています。3の普通と答えた学生が4割以上になりますが、これは、確かに、教員も学生も初めての経験で、しかも1ヶ月しかやっていないので、

正直なところ、良いのか悪いのか、判断がつかないということはあろうかと思えます。これまで自分が受けた授業と比較することもできませんので、ありのままを受け止めて、それを普通だと感じるしかなかったのかもしれない。そして、非常に満足、おおむね満足と答えた学生が、25%程度。逆にやや不満、非常に不満と答えた学生が33%程度と、否定的な意見の方が多いというのは、本校としても重く受け止める必要があるかと思えます。しかも、これはやる気のない学生というよりは、比較的熱心に遠隔授業に取り組んでくれた学生の声だということも忘れてはなりません。

ただ、不満の理由については、いろいろとあるので一概に言えないのですが、学校や教員の説明不足や、教材がわかりにくいというような、学校や教員側への不満も少なからずありました。これは、学校としても今後に向けて改善を検討していかなければなりません。一方で、「一人で勉強するのは、時間管理・スケジュール管理がしにくい」という理由を挙げてくれた学生も、少なからずいます。この辺は、本校の問題というよりも、日本全国の大学でも同様の問題が起きていますし、特に大学1年生などは、遠隔授業で一度も学校に行けず、かといってコロナのために、遊びに出かけることもできず、友達もできないまま、大学を辞めてしまう学生も少なからずいるというニュースを耳にすると、一人で画面に向かって勉強することの難しさというものも、これは日本全体の学校関係者で考えていかなければならない問題だと感じております。

5) 中止になった様々な取り組み

さて、話題は少し変わりますが、今年は、新型コロナウイルスの影響で、教務関係の様々な取り組みが中止になりました。

まず、毎年1年生に対して行われる、自学自習導入教育です。これは例年4月から5月にかけて8回ほど、授業の空き時間を利用して、クラス全員で教室で自習をし、自分で勉強する習慣をつけてもらう取り組みです。しかし、すでに書いたとおり、ちょうどその時期に合わせたかのようなタイミングで、休校・遠隔授業となったため、その取り組みができなくなりました。授業再開後も、実験・実習の特別時間割を組んだり、補講をしたり、期末試験の時期をずらしたり、少なからず時間割等にも変更があったため、教務としてもかなり慌ただしい時期でありました。そのため、結局、自学自習の取り組みができないまま前期が終わってしまいました。

また、例年、前期中間試験のあとに、特に1,2年生の数学の成績不振の学生に対し、数学の補講を実施していましたが、今年は前期中間試験自体がなくなってしまったため、これも行うことができませんでした。

この二つの取り組みが中止になったことで、1年生を中心とした低学年の学習支援に、大きな影響が出たと考えております。この分をどのようにサポートしていくのか、学校としても十分に検討していく必要があるかと思っておりますが、これは本校だけの問題でなく、全国の高専、そして大学や高校でも、同様の問題が起こっていると思われまますので、他の学校の状況や、取り組みなどの情報も収集し、それらも参考にしながら、学生たちへの学習支援を行っていきたいと思っております。

また、例年、4年生の夏休みには、インターンシップがあります。しかし、今年は新型コロナウイルスの関係で、参加した学生の数はずいぶん少なくなりました。一部の企業は、遠隔でのインターンシップなども企画していただき、それに参加した学生もおりますが、こういったところにも、大きな影響が出てきております。

学科		R2年度		R1
		参加人数	うちオンライン	参加人数
本科 4年	機械工学科	8	0	29
	電気電子工学科	0	0	26
	電子制御工学科	1	0	46
	情報工学科	10	7	32
	都市環境デザイン工学科	21	0	32
	(その他学年)	1	0	1
本科計		41	7	166
専攻科 1年	機械・電子システム工学専攻	1	0	7
	電気情報システム工学専攻	2	2	7
	建設工学専攻	0	0	0
	(その他学年)			1
	専攻科計	3	2	15
合計		44	9	181

具体的には、昨年度の参加者が、本科・専攻科合わせて181名であったのに対し、本年度は、わずかに44名でした。実に4分の1に減ったということになります。44名のうち9名はオンラインでのインターンシップということですが、やはり情報系の企業ではそういうことが実施しやすいのだらうと思っております。

インターンシップについては、一部の学生が、9月の台風の影響で、参加するのが1日遅くなってしまい、その分の、いわば補講を、後日わざわざオンラインでやっていただいたという企業もありました。非常にありがたいことだと思っております。

また、学生への教育とは少し離れますが、教務関係の行事でいえば、今年は5月の保護者懇談会、そして11月の授業参観が中止となってしまいました。

そして、本校の行事としては、一番大事なものの一つでもある、一日体験入学も、当初8月2日に実施する予

定でしたが、ちょうどその1ヶ月前頃から、ご存じの通り鹿児島市内でもクラスターが発生し、それが県内各地に飛び火するなど、県内でも急速に感染者の数が増えていきました。従来とは異なり、午前の部と午後の部に分けるなど、感染予防をした上で、ギリギリまで実施を検討してきましたが、最終的には中止という決断をいたしました。

その代わりとしまして、少し時期はずれますが、10月の学校説明会は開催し、そこで一日体験入学に代わるような企画も考えて、少しでも中学生のみなさまに、本校のこと、各学科のことを知ってもらうようにしました。またその後、学校説明会に参加できなかった中学生のために、本校HP上で、ヴァーチャルオープンキャンパスを開き、WEBで体験してもらえよう工夫もいたしました。これは来年以降も、続けていきたいと考えております。

6) 後期に入ってからと、今後に向けて

さて、10月から無事に後期を迎えましたが、高専によっては、まだ遠隔授業と対面授業を並行して行うなどの措置をとっている学校もありました。

本校としては、前期と同様に、始業を30分遅らせ、昼休みを30分長くし、80分授業とすることで、対面授業を行いました。また、10分短くなった分の学習時間については、moodleなど遠隔授業の活用や、冬休みの課題などで、本来の学習時間の確保に努めました。

今後は、必ずしも新型コロナウイルス対策としてではなく、様々な場面で遠隔授業も併用できるように整備していきたいと思っております。例えば、大雨や台風で休校になることもしばしばあります。コロナが終わっても、インフルエンザで学級閉鎖になることもあり得ます。学生が怪我や病気で登校できないとき、逆に教員が出張や病気で登校できないときにも、すぐに遠隔授業を取り入れていけるように、対面授業をしながらも、遠隔授業の手法を補助的に使っていくなど、教員側も、そのスキルを高めていく必要があります。

また、同時に、学校の設備も強化も必要です。再び一斉に遠隔授業をしなければならない事態になった時に備え、本校のmoodleのサーバーの入れ替え(増強)を行い、同時に全学生が接続しても、十分に耐えうるだけの整備を行いました。

この先、どのような状況になっても、十分に対応できるようハード面、そしてソフト面の強化をしているところです。

今は、ただただ早く終息することを祈りながら、それでも今回のことを、新たな教育システムの導入と位置づけ、今まで以上の教育を学生に提供できるよう、学校としても努力していくつもりです。

キャリア教育とFD研修会について

教務主事補 鎌田 清孝

本校は、鹿児島県技術士会との連携による共同教育を実施しています。今年度の技術士会との連携教育の一貫である2年生対象のキャリア教育は以下のとおりである。

○機械工学科2年

日時：11月4日（水）15時10分～

講演者：鹿児島県始良伊佐地域振興局建設部
宮内 新一 氏

演題：「技術者のあるべき姿」

○電気電子工学科2年

日時：11月4日（水）15時10分～

講演者：平石電技コンサルタント
平石 育典 氏

演題：「若手技術者に伝えたいこと!!」

○電子制御工学科2年

日時：11月4日（水）15時10分～

講演者：中央テクノ株式会社
井内 祥人 氏

演題：「エンジニアとしての在り方」

○情報工学科2年

日時：11月4日（水）15時10分～

講演者：(株)建設技術コンサルタンツ
中村 大輔 氏

演題：「技術者の楽しい未来」

○都市環境デザイン工学科2年

日時：11月4日（水）15時10分～

講演者：(株)建設技術研究所九州支社鹿児島事務所
宮園 譲二 氏

演題：「技術者の楽しみ」～例えば、まちをつくる、道をつくる～



2年生対象のキャリア教育（電子制御工学科2年）

4年生対象の共同教育の講演は以下の予定である。

○機械工学科4年

日時：令和3年2月1日（月）13時40分～

講演者：株式会社タナカサトル技術支援
田中 覚 氏

○電気電子工学科4年

日時：令和3年1月28日（木）13時40分～

講演者：平石電技コンサルタント
平石 育典 氏

○電子制御工学科4年

日時：令和3年2月16日（火）13時40分～

講演者：鹿児島県大隅地域振興局農村整備課
吉留 秋実 氏

○情報工学科4年

日時：令和2年12月23日（水）14時40分～

講演者：鹿児島県土木部道路建設課
森脇 寛透 氏

○都市環境デザイン工学科4年

日時：令和3年2月17日（水）10:50～12:10

講演者：(公財)鹿児島まちづくり土地地区画整理協会
上小鶴 博 氏



4年生対象の共同教育（情報工学科4年）

また、逆に本校からは、鹿児島県技術士会主催の「鹿児島高専連携教育講演会」の講師の派遣を行っている。12月12日開催の下記講演はあいにく、コロナ感染拡大のため4月に延期となっている。

講演者：機械工学科

小田原 悟 先生

演題：「機械技術の発展の歴史と現状」

会場：鹿児島市よかセンター7F 第一会議室

鹿児島市中央町10番地（イオン内）

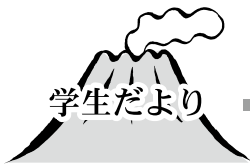
さらに、今年度の教務委員会主催のFD（FDとはFaculty Developmentの略で、「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」）研修会を開き、教育能力を高めるための実践的方法）研修会は以下のとおりである。

日時：12月4日（金）16時～

講演者：株式会社タナカサトル技術支援

田中 覚 氏

演題：「モチベーションについて」



カウントを続けて

学生主事 ・ 一般教育科 野澤 宏大

昨年も同じようなことを書きましたが、私は毎朝、登校する学生の数を数えております。そんなことをしていたので、新型コロナウイルスの影響により登校時間を30分遅らせる際にも、何か特別なことをする必要はありませんでした。ただただ、皆さんの登校状況を調べるだけです。第一週の4月8日(水)には、8時からの50分間で464名が登校しました。始業時間を30分遅らせた4月15日(水)には、8時からの50分間に148名、8時50分から9時20分までに345名が登校していました。という具合に、分散登校の様子も図1、図2のようにグラフにすればすぐにわかります。

8時以降の学生の登校状況 2020年4月8日 (計464名)

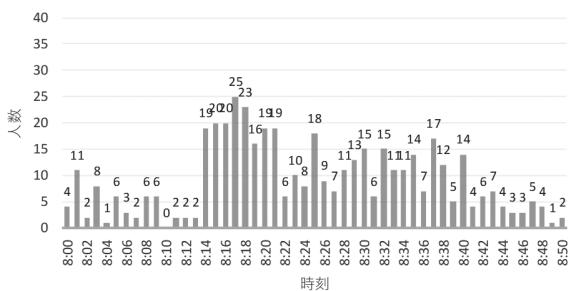
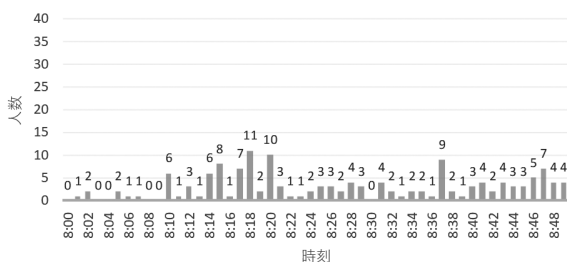


図1 4月8日(水)の登校状況

2020年4月15日
8時以降の学生の登校状況 (計148名)



8時50分以降の学生の登校状況 (計345名)

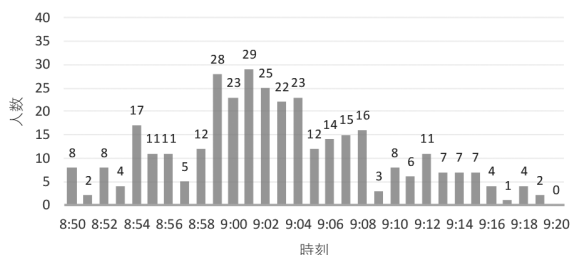


図2 4月15日(水)の登校状況

そんなカウント生活も、4月20日には一旦中断せざるを得なくなりました。そう、新型コロナウイルス対策に伴う休校です。そしてほぼ同じタイミングで、我が国自体も緊急事態宣言を発することになりました。休校は5月25日(月)に解除となりましたが、新型コロナウイルス対策として、その後も特殊な対応をせざるを得なくなり、それは現在(執筆時:12月現在)も続いています。部活動紹介が放送になった、学生総会がTeamsによる開催となった、高専体育大会が中止となった(一部例外あり)、高専祭が無観客開催となった、などなど。数え上げたらきりがありません。そんな中、登校者カウントは変わらず続き、いつの間にか図3のような記念撮影も始まりました。もっとも、このデータの旬はずでに4月の図1、図2で終わっているとは思いますが。

毎朝正門前にいると、時折危険な状況に遭遇します。例えば、本校学生と中学生の自転車同士の衝突、ウインカーを出さずに正門に入ってくる車(学生ではありません)などがありました。前者は遅刻ギリギリの中学生が、自転車で無謀な左折をして本校学生の自転車に衝突したもので、後者は…、多くを語らないでおきます。その代わりに、「ウインカーを出すのが遅い(意思表示が遅い)のも周囲に大きな迷惑をかける」、とだけ言うておきます。

昨年度は、私の元に近隣の苦情がやってくる、という話を書きましたが、今年度はそういうことはありませんでした。と書いた途端に、12月の頭に近隣の方から、

「自転車の無灯火運転が多すぎる」

という苦情をいただきました。自動車教習所に通うとわかることですが、自転車のライトは運転手が周囲を見るためにあるものではありません。周囲に自転車の存在を知らせるためにあるのです。ライトのついていない(つかない)夜道の自転車は、単なる走る凶器です。最悪スマホのライトでも構いませんので、必ず自分の存在を相手に知らせたうえで運転しましょう。

いささか仕切れトンボ感が過ぎますが、これで終わります。ありがとうございました。



図3 6月17日(水)の朝の風景

2020年度 体育祭

学生主事補・電気電子工学科 奥 高洋

昨年度に引き続き体育祭を担当しました 奥 と申します。拙い文章で恐縮ですが、暫しお付き合い下さい。

本年度はコロナ禍の影響で、学校行事も大幅な変更を余儀なくされ、本校の体育祭も開催が危ぶまれていましたが、6月末になって正式開催が決定されました。ただし、「無観客開催」の条件付きでしたから、この旨体育祭実行委員長の日原一樹君へ伝達するのは、非常に心苦しい思いでした。しかし、多分に不本意な条件にも拘らず、「学生への感染リスク回避のため」として、潔く承諾してくれたことには救われました。さらに、「開催する以上は本校が感染源とならないことが大事」と、より高く意識を持って以降の準備に取り組んでくれたのは立派でした。応援団練習や繪巻制作時の3密回避対策や、ソーシャルディスタンス確保のための競技見直し、「無観客開催」でやる気を失っていた実行委員・応援団長・繪巻隊長らを根気よく説得する等、実行委員長の役割と責任を十分に果たしてくれたと思います。

一方、「体育祭での晴れ姿を、保護者や多くの方々に見てもらいたい」との想いを具現化するため、実行委員長の日原君と学生会長の永田哲平君が協力して奔走してくれました。(没にはなりましたが)各種感染対策を施しての保護者観覧に向けた数々の案策定、関係主事との折衝を経て、最終的には『南九州ケーブルテレビネット株式会社』によるLive中継と放映およびDVD化という形で実現してくれています。外注経費も支出の見直しと無駄の削減により当初予算でほぼ賄えましたから、彼らの行動力・交渉力、そして粘り強さには唯々驚かされるばかりです。(DVD購入に関して、後援会からのご援助・ご協力を戴きましたこと、お礼申し上げます。)

様々な困難があり紆余曲折もしましたが、当日は晴天にも恵まれ、無観客ながらも盛り上がった体育祭だったと思います。実行委員や応援団長が消毒液を片手に感染対策を施す姿は微笑ましくもあり、何より生き活きていました。映像にもしっかり記録されているでしょうが、それ以上に学生の皆さんには印象深い体育祭として記憶されたでしょう。コロナ禍で制限・制約が多い体育祭でしたが、学生の皆さんの創意工夫と努力で無事終えることができ、本稿執筆時点(体育祭から1ヶ月経過)で未だ本校からコロナ感染者は出ていません。今回の問題解決能力を体育祭以外の場面でも発揮してくれることを期待しています。

最後に、本年度体育祭実行委員長の日原一樹君も寄稿したい旨申し出がありましたので、右頁に掲載します。本稿と併せてご一読下されれば幸いです。

高専祭 (体育祭)

体育祭実行委員長・電子制御工学科4年 日原 一樹

鹿児島工業高等専門学校で令和2年10月25日に開催された高専祭について紹介します。自分は今回体育祭の実行委員長を務めさせてもらいました。高専祭とは今年で第58回になる鹿児島高専の伝統行事です。二日間に渡って開催されて一日目は文化祭、二日目には体育祭が行われます。毎年、学外からもたくさんの人達が鹿児島高専を訪れます。ですが、今年のご存知のとおり現在、世界的に猛威を振るう新型コロナウイルスの影響で無観客での開催となりました。また、文化祭でも飲食の禁止、体育祭の大幅の競技変更など、今までどおりにできないことや制限がたくさんありました。新型コロナウイルスの影響で、今まで当たり前のようにできていたことができなくて、実行委員の皆もとても悩み、落ち込んだりしました。ですがその中でもたくさん話し合いや準備を行い、最高の二日間にする事が出来ました。

高専祭は学生だけで行います。実行委員会を中心に高専祭の準備や、会計、広報など様々なことをしなければなりません。実行委員のメンバーは本気で皆を楽しませるにはどうすればいいか考えます。だからとても楽しい鹿児島高専の行事になっています。中でも高専祭の醍醐味である応援団について紹介したいと思います。鹿児島高専には5学科あり、それぞれの学科で10分間の演舞を行います。体育祭の最後に行われる演舞では5学科で優勝を競います。応援団長を中心に各学科1年間、型を作るところから初めます。毎年、高専中を感動の渦に巻き込んでくれます。感動を生むため10分間にかかる1年間にはたくさんの物語があり、今回は無観客でもあったにもかかわらず全力で応援団に取り組む姿を見てると感動します。無観客だったので今回はyoutubeで生配信したり、テレビ会社にDVDの作成もしてもらいました。もし、このコロナウイルスのワクチンができ、世界の安全が戻ったら、ぜひ高専祭に遊びに来てほしいです。



体育祭 (5学科での全体演舞) の様子

コロナ禍での文化祭

電子制御工学科 島名 賢児

昨年度に引き続き、今年度も学生主事補として文化祭を担当しました。今年度は6月の時点で、文化祭は無観客、露店での飲食禁止の2点が決定し、例年から実施内容の大幅な変更が求められ、実行委員の学生たちもコロナ対策を意識したイベントの企画立案に頭をひねっていました。

当日は、ステージは換気対策を施さずに済む屋外に設置され、観客席の間隔も十分な距離がとられ、企画の間の観客席の椅子の消毒や、抽選会で景品を渡す際の手指の消毒など、コロナ対策が徹底されていました。

また、露店での飲食が禁止され、物販の露店が出店されていましたが、各露店で飛沫感染予防用のビニールシートやアクリルパーテーション、手指消毒用のアルコールの設置など、実行委員および関係者のコロナに対する意識の高さを感じました。

過去に例のないコロナ禍での文化祭で、実行委員が早くから計画的にコロナ対策を考えて準備してくれたおかげで、大きなトラブルもなく、無事に終えることができました。



[以下、文化祭実行委員 小林 紗恵 さんの感想]

文化祭実行委員展示局長を務めました小林紗恵です。今年の高専祭はコロナ禍での開催となり、様々な制約がありました。多くの方々のご協力の下、無事終了することができました。私が担当した展示では、想定していたよりもたくさんの人に見て回っていただき、写真コンテストも盛況で嬉しい限りでした。高専祭の準備期間中、実行委員は4年生を中心に忙しく活動してきました。本番が近づくとつれピリピリしていく雰囲気、汚れていく学生会室、綻びを見せる人間関係・・・文化祭が終わってみれば、どれも忘れられない思い出です。

次の高専祭は、コロナの影響を受けずに自由な形で開催できることを願っています。

皆さんの「愛車」について

学生主事補・一般教育科 堂園 一

今年度、学生主事補として主に交通担当をしている一般教育科の堂園です。今年度はコロナウイルス感染の影響で交通関係の行事もこれまでとは異なる形で実施されており、昨年度に増して感染防止対策や関係各所との調整が必要となりましたが、学生会や学生諸君、教職員の皆様のご協力のおかげ順調に各種行事が遂行されたことにつきまして、深く感謝いたします。ありがとうございます。今年度も残りわずかですが、引き続き、交通関係につきましてもご協力をお願いします。

さて、今年度、交通関係の行事を行う中で、沢山の自動車、バイク、自転車を見てきました。大人が羨むような自動車や何年もの！？と問いたくなるような年季の入った自動車やバイク、自転車も同じようにそれぞれの学生の好みや用途に応じた車両をたくさん見ることができました。そこで気になったことは「車両の点検」についてです。

2020年11月11日の時点で寮を除き、寮外生が通学のために申請されている車両（自動車・バイク・自転車）は366台になります。それぞれの車両は運転者を乗せ快適な移動を実現すると同時に、利用する学生の思いや思い出を乗せた「愛車」だと思います。

その「愛車」は指定の駐車場に停められており、交通担当として不定期ですが巡回のたびに皆さんの「愛車」を見えています。当然ながら未登録車や学生便覧の基準外の車両の確認や駐車状況の確認を行っています。そこで目につくのが、明らかに整備不良の車両の多さです。私が自動車業界で働き、整備業務を行っていた癖かもしれませんが、ついついブレーキやタイヤなどの日々の走行に必要な部分に目が行ってしまいます。バイクや自転車については学内で車両検査が行われ点検を行っています。日々の利用でタイヤの磨り減りやブレーキパットの摩耗、バイクはミラー破損などが見受けられます。

先程述べたとおり、車両は学生皆さんの思いや思い出を乗せた「愛車」であります。ついては、その「愛」の詰まった「車（車両）」をもっと大事にしてもらいたいと思います。具体的には年に一回の学内の車両検査の点検だけでなく日常でも可能な限りで良いので点検を行ってください。自動車、バイクであれば近隣のカーショップ、サービスステーション、自転車はサイクルショップで空気圧の点検やブレーキの確認などは可能です。その点検が車両に対する「愛」になるとと思います。また、その「愛」は事故防止にも繋がります。事故を起こすと多くの方が悲しみます。事故防止の観点からも、各人においてもそれぞれの車両にあった「愛車点検」を実施することをおすすめします。

初めての学生主事補

一般教育科 熊 華磊

初めまして、今年4月に採用された一般教育科の熊華磊（ゆう からい）と申します。3年の政治経済や、4,5年の政治学、社会概説などの授業を担当しております。また、校務として、まだ何もかもわからない状態でいきなり学生主事補となりました。本音を言うと、「学生主事補・補」を付けてほしいところでした（汗）。学生主事である野澤先生をはじめ、主事補の奥先生、島名先生、堂園先生が負担の重い文化祭、体育祭、交通関係の仕事を担ってください、私は比較的負担の少ない寮での合宿調整を担当することとなりました。ところが、この比較的負担の少ない合宿調整の業務も、今年度は今のところ（12月2日現在）ほとんど仕事になりませんでした。

前年度担当者の古川先生が書いた原稿によると、夏休み中の合宿調整は教員や学生、寮関係者など多くの方の日程を確認し、お盆休みや教員の休日を考慮しなければならないため、一番大変だったとのこと。ところが、今年度は前期期間中の一時遠隔授業の影響を受け、例年なら8月8日あたりからスタートした夏休みが9月7日からと大幅に短縮されました。そこから9月30日までの間に、2週間をかけて寮の清掃作業が入り、合宿として利用できる日が1週間不足という状況です。その上、8月から全国的に新型コロナ第2波が発生したと言われ、とても寮で「三密」合宿を実施する場ではなく、残念ながら断念することとなりました。そして、冬休み中の寮での合宿も同様な状況と判断され、実施しないこととなりました。

部活メンバー同士での寮合宿における普段とは違う触れ合い方を楽しみにしていた学生（特に早く溶け込みたい一年生）も少なくない中、学生委員会としても苦渋の判断でした。ここで、学生の皆さんには一つ助言をしたいと思います。合宿自体は元々部活メンバー同士が親睦を図る「手段」であり、「目的」ではありません。しかし、年々繰り返し実施されることによって、「手段」だったものがだんだん「目的」と化し、むしろ本来の目的を失ってただ慣習的に実施されているところもあるのではないのでしょうか。コロナ禍で合宿という「手段」が取れない場合、ただ落ち込みながら、流れに任せるのではなく、親睦を図るといふ「目的」を達成するために、他にどのような「手段」が可能なのか、自分たちで考え、学生同士で話し合うべきでしょう。こうした「立ち止まり」や「再創造」はむしろ今だからこそできることなのではないのでしょうか。

最後となりますが、これからも日々の経験を大事にしながら、鹿児島高専に貢献できるよう、精進してまいりたいと思います。今後とも、よろしくお願いいたします。



大会等入賞一覧

◎九州沖縄地区国立高等専門学校体育大会（代替大会）

開催日：令和2年11月8日～12月20日

(1) 陸上

男子 1500m 1位 大重拓海
3位 西村郁哉
男子 5000m 1位 大重拓海
男子やり投げ 3位 今別府優樹
女子 3000m 2位 永田侑希

(2) バドミントン

男子団体 優勝
男子シングルス 優勝 谷山 嘉隆

(3) バスケットボール

男子 3位

(4) バレーボール

男子 準優勝

◎全国都道府県対抗eスポーツ選手権

2020KAGOSHIMA グランツーリスモ SPORT 部門

成績：

オンライン予選 少年の部 1位
九州・沖縄ブロック代表決定戦 少年の部 2位
有川 恒平

◎第53回全国高等専門学校サッカー選手権大会

開催日：令和2年12月18日～21日

会場：時之栖スポーツセンター

成績：優勝

◎全国高等専門学校ロボットコンテスト 2019

九州沖縄地区大会

開催日：令和2年11月1日

会場：オンライン

成績：特別賞（田中貴金属） 華美

◎国税庁主催令和2年「税に関する高校生の作文」 コンクール

成績：加治木税務署長賞 藤原 嶺哉

◎公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会主催 第40回全国高校生読書体験記コンクール

成績：入選 森山 混平

◎鹿児島県漁業協同組合連合会主催

高校生シェフグランプリ決定戦

成績：グランプリ 水口 ひまり



学生表彰者リスト

◎スポーツ賞

○団体の部

サッカー部	第53回全国高等専門学校サッカー選手権大会	優勝
バドミントン部	令和2年度九州沖縄地区高等専門学校体育大会 バドミントン競技代替大会	優勝

○個人の部

陸上部			
機械工学科 5年 オシゲ タクミ 大重 拓海	第67回鹿児島県下一周市郡対抗駅伝競走大会	3回出走	いずれも区間賞うち 2回区間新記録
	令和2年度九州沖縄地区高専体育大会陸上競技 (代替大会)	男子1500m及び5000m	優勝
	2020年度第25回西日本地区高等専門学校駅伝競 走大会	第1区 (10km)	区間賞

◎文化賞

○団体の部

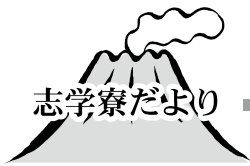
都市環境デザイン工学科	第17回全国高等専門学校デザインコンペティション 2020 in 名取 構造デザイン部門	審査員特別賞
-------------	---	--------

○個人の部

情報工学科 3年 ミズグチ ひまり	高校生シェフ グランプリ決定戦	グランプリ
都市環境デザイン工学科 2年 フジワラ レイ 藤原 績哉	令和2年度税に関する高校生の作文コンクール	加治木税務署長賞
情報工学科 2年 モリヤマ コウヘイ 森山 滉平	第40回全国高校生読書体験記コンクール	入選

◎特別賞

機械工学科 3年 アrikawa コウヘイ 有川 恒平	全国都道府県対抗eスポーツ選手権 2020KAGOSHIMA グランツーリスモSPORT部門 オンライン予選 少年の部	1位
	全国都道府県対抗eスポーツ選手権 2020KAGOSHIMA グランツーリスモSPORT部門 九州・沖縄ブロック代表決定戦 少年の部	2位



コロナ禍の寮務主事

寮務主事 梶根健史

東京オリンピックが開催される年の寮務主事となるはずでしたが、一転して、新型コロナウイルスに世界中が苦しめられることになった年の寮務主事となりました。この高専だよりの原稿を書いている時でさえ、寮内で体調不良者が出はしないかと、気をぬくことができない状況です。本来ならば、この高専だよりにおいて学寮の現状等について報告すべきと思いますが、今回は、コロナ禍における寮務主事としての私の心情について語らせていただきます。その方がペンが進みますので。私の愚痴を聞いているつもりで読んでいただくと幸いです。

忘れもしない、昨年度2月の卒研発表会の日から、私の苦悩の日々が始まりました。それから程なく、県内の新型コロナウイルス感染者が出て、また県内の小中学校が臨時休校になりました。幸いにして本校は既に春休みに入っていました。卒業式が中止になるなど、その影響が本校にも及び始めました。

新型コロナウイルスという未知の恐怖に世界中が戸惑い、怯えていました。その恐怖から、感染者への批判や差別的な言動が強まり、感染者が出た会社や学校でさえも、非難的とされました。「500人もの寮生を抱える本校の学寮で、もし感染者が出たら」と考えると、私自身、夜も眠れませんでした。

4月になり、他県の高専や県内の大学のほとんどが入学式を延期し、遠隔授業の準備を進める中、本校は通常通りの対面授業で始業しました。世の中では、新型コロナウイルスで著名人が亡くなるなど、悲しいニュースが飛び交い、国全体が先の見えない日常に怯えていたその時です。本校が通常通り始業することを決めた3月末から、学寮では新年度の寮生を受け入れる準備を始めました。コロナ禍における学寮の運営と感染予防対策について、その当時に明確なガイドラインなどあろうはずもなく、また、参考事例もほとんどなかったため、その全てにおいて、私一人で考え準備しなければなりません。他室訪問禁止、検温点呼、食堂・風呂の時間割り振り、体調不良者対応フローの作成、当直教職員への感染予防対策、寮生への啓発文書、等々。自分でも何をしたら思い出せないほど、その時思いついたことをすべて準備し、正解のない答えを自問自答する日々が続きました。寮務係の前には、その名残として、その当時言われ始めた「ソーシャルディスタンス」という言葉を日本語訳した「社会的距離を考えて」の掲示が、今でも残っています。

入学式から、全国的な緊急事態宣言が出されるまでの約2週間は、今思い出すだけでも手が震えるほど緊迫し

た日々でした。寮内で感染者が出れば、たちまちクラスターとなります。感染者に対する世間の目も厳しく、また、我が子を寮に預けた保護者の不安も計り知れないほどと察していました。世の中はまだ、PCR検査の体制も十分に整っておらず、また、病院等での感染者への対応も定まっていないため、場当たりの行動せざるを得ない状況でもありました。ひとたび、寮生が体調不良を訴えれば、たとえそれが軽微なものであっても、全て私に連絡が入り、私はその状況を判断し、その後の行動を指示、あるいは私自身が対応しなければなりません。普段なら現場で対応できることも、「見えない敵」の前では成す術もなく、私にとっては常に緊張状態で、一瞬たりとも気の休まる時はありませんでした。

この2週間は、私にとっては苦しいものでしたが、学校運営においては、貴重な時間となりました。特に新入生にとっては、担任やクラスメイト、授業担当者等と会う機会が得られ、学校の雰囲気を知り、また、この後の遠隔授業をスムーズに行うための貴重な時間を得ることができたと思います。私にとってはつらい日々でしたが、感染者が出ず無事に過ごせたことは大変良かったと思っています。

その後、緊急事態宣言が発出され、遠隔授業が始まりました。離島と県外出身の寮生以外の多くの寮生が帰省し、自宅待機を余儀なくされました。私にとっては緊張した状態が一時緩和され、慣れない遠隔授業の準備や、寮に残された寮生の面倒をみることに専念しました。広い寮内に残された寮生と留学生は、家族にも会えず、寂しい時間だったと思います。私は夕方に勤務が終わると、残った寮生に声を掛け、一緒にグラウンドを走ったり、運動をしたりしました。また、一度は、寮内に残った寮生とバーベキューをして親睦を深めました。自分にとってこの時間はとても良い思い出です。

一か月以上続いた遠隔授業の末、対面授業が再開し、再び学生が学寮に戻ってきました。遠隔授業から解放され、また、親しい友人との再会できたからか、寮内が一気に活気づきました。そんな私も、対面授業に戻れたことがうれしく、授業中に何度も「対面授業はやっぱりいいね!」と言い、一人ウキウキしながら授業をしていました。授業を受けた学生の目は冷やかかでしたが。

対面授業が再開しても、新型コロナウイルスの脅威は衰えず、寮内は緊張状態が続きました。感染への不安と、夏の暑さから体調を崩す寮生が続出し、その度に私も呼び出されて対応しました。日中深夜問わず、いつ来るかわからない呼び出しを待つ緊張感と、ウイルス感染者がではないかとの不安から、私自身も疲れ果て、もう一度遠隔授業に戻してほしいと思うこともありました。さらに、これに追い打ちをかけるかのように、前学期が9月上旬まで延期することが決まりました。このことは、

この寮内の緊張状態が更に続くことを意味します。「何のための遠隔授業だったのか」と学生なら誰もがそう思ったでしょう。9月まで前学期が延長したのは、対面授業を15週分確保するためです。でもそれは、暗に遠隔授業がうまくいかなかったことを意味します。遠隔授業がうまくいかなかった理由として、学生の取り組み状況（通信状況を含む）が良くなかったこともありますが、学校側、教員側にも問題はあったと思います。寮務主事としての私が、このような言うべきことではないですが、学校全体として、もっと遠隔授業に真摯に取り組む必要があったと思います。このあたりが、今の鹿児島高専の抱える大きな問題かもしれません。とにかく、夏の猛暑が襲う最中に、学内で新型コロナウイルスの感染者がでなかったことは、本当に良かったと思っています。

後学期になっても、なお緊張の日々は続いていますが、この原稿を書いている12月上旬までは、幸いにも寮内で新型コロナウイルスの感染者は出ていません。これもすべて寮長を中心とした寮生会役員の協力と、寮生全員の理解があったからこそと思っています。寮生には、私からの朝のうるさい放送で起こされ、「マスクあるか」が朝の挨拶となり、目障りな啓発用の掲示物を見せられるなど、色々と面倒をかけていますが、それらを我慢して受入れ、対面授業が続けられるように各自ができる努力をしてくれています。500人を超す寮生が、これまで無事に寮生活が続けられているのは奇跡としか言いようがありません。コロナ禍の寮務主事となったことは、自分にとって不運だと思っています。しかし、この不運と一緒に立ち向かってくれたのが、今いる寮生の皆さんであったことは幸運だと思っています。寮生全員に対して、この場をかりて感謝申し上げます。

技術の進歩は、人々の生活を便利に、効率的にしていきますが、その分、他人への思いやりや自然への感謝の気持ちを失っていくものだと私は思っています。鹿児島工業高等専門学校学寮規則第2条には「学寮は、本校の教育施設であって、学生の相互敬愛により学校生活の向上を図るとともに、規律ある共同生活を通して人間形成を助長し、本校の教育目的の達成に資することを目的とする。」とあります。このコロナ禍で、寮生の相互敬愛の心が少しでも芽生えてくれたのなら、私自身、寮務主事としての職務を果たせたと思っています。



周りに支え続けられた1年間

寮生会長 下井倉 諄施

寮長に選出された1年前、寮の規則を含めた様々な課題の改善や寮をより意義のある場所にしようと、様々なプランを考えて一部は実行したものもありました。しかし、今年度は言うまでもなくコロナとの壮大な戦いが最重要事項でした。これまでの生活スタイルまでも変えてしまったものなので、当然ではあるんですが、クラスターのリスクでしかない500人の寮をまとめることは大変でした。でも、僕の中で気づいたことがたくさんありました。まず、たくさんの人に支えられていることです。すぐく当たり前のことですが、寮長になってからの1年間、ずっと身に染みて感じていました。日常の寮運営やイベントからコロナ対策まで、僕ひとりでは何もできなかったです。寮務主事の檜根先生をはじめとする寮務委員会の先生方や寮務係長の脇園さんをはじめとする寮務係の方々、寮生会、班長、寮生のみんな、、、挙げるとキリがないくらいたくさんの人に支えてもらいました。ランド点呼や風呂の更衣室の換気・食堂でのマスク着用など、ただでさえ集団生活でストレスがたまりやすい場所なのに、多くの寮生が感染症予防に協力してくれて、お陰様でこの記事を書いている時点では鹿児島高専からのコロナ感染者は0です。ただ、感染者が出たとしても胸をはってベストを尽くしたと言えるぐらい、協力をしてもらっています。また、檜根先生や寮務係の方々には食堂や風呂の人数設定やコロナのガイドラインを作ったり、体調のことやテストのことを気にかけてくれたり、僕たちのことを考えて、僕たちが気づかないところにまで気を配ってくださっています。寮生のみんなにはこのことに気づいてとは言わないので、せめて寮務の方に何かしてもらったらちゃんとお礼を言うとか頭の片隅に置いてふとした時に気にかけてくれると嬉しいです。話は少し変わりますが、僕は4年生ということもあって、進路をどうするか絶賛迷っています。しかし、将来自分がどうありたいのかは寮長になって気づくことができました。それは、どんな進路や仕事を選んでも、その進路・仕事に誇りをもってその先にいる誰かのために常に自分のベストを尽くせる人であることです。

このような状況の中で寮長ができたことが本当に幸せで僕にとってかけがえのない1年になりました。幸福度200%でした。寮に関わってくれた全ての方に心から感謝します。本当にありがとうございました。

小さな部屋でも森にいるような、 未来の志学寮

寮務主事補 高安 重一

寮務主事補として、朝の巡回を行っていますが、その時に部屋の窓が開いているかどうかも確認しています。雨が降りそうだと思えば閉めておきますし、1階であれば防犯面で鍵も閉めます。

ところで、この「窓が開いているか、閉まっているか」について、カーテンが閉まっていると分からないのでは？と思うかも知れませんが、実は部屋に入った瞬間に分かります。耳からの情報です。耳で空間の広がりを感じれば開いているし、そうでなければ閉まっています。そしてこれは目を閉じた方がハッキリと違いが分かります。

たとえばトイレで目を閉じてみて下さい。たぶん皆さん「ここは体育館くらい広い」とは思わないでしょう。私達は周囲にある壁に音が反射して跳ね返ってくる音を聞くこととなりますが、これで空間の広さが分かります。ということで寮の部屋の窓が開いていると、反射する壁面が無くなったことになり、広さを感じるのです。

さて、次に良い音の空間の例として、森の中を挙げる人がいます。ここで楽器を弾くと低音の抜けが良く高音もクリアで良い音に聞こえると言われています。

私は建築の設計をしています。最近は部屋の中の音の状態（音場）を森の中のようにしようとしています。しかも音楽ホールではない普通の会議室や住宅、居酒屋などの部屋で音を整えようと思っています。これができると音楽を聴くのにはもちろん最適ですが、ほかに我々の感じ方に変化が現れます。居酒屋でも騒がしくもなく、人の話もきちんと聞けます。閉じ込められたようなストレスが少なくなり、目を瞑ると実際よりも広さを感じることができます。さらに暑いときにも体感温度が少し涼しく感じられます。これは森の中にいるときの感覚と近づくのです。

ただしこれを実現するにはもう少し時間がかかりそうです。森をそのまま持ってこられれば良いですが、小さな部屋に大きな森を持つてくるわけにも行きません。音の反射が森の木々の配列に近づくように、たくさんシミュレーションを行わなくてははいけないからです。

しかし、いつか実現して寮の部屋に入った時に、森に入ったような感覚になったら、とても快適だろうな？と想像しながら、巡回をしています。

寮生専用の美味しい水あります

寮務主事補 曾山 夏菜

今夏、学寮の入口に標記ポスターが掲げられた。昭和の町角に見られた「パンク修理いたし匠」的なノスタルジィを誘う文言の横に、この「水」のPRタレントを務めていると思しきさかなクンの笑みが眩しい。このポスターを脇目に共用棟に足を踏み入れると、近年日本の各所に広がりを見せているウォーターサーバーが（美味しい水ってコレのことですから）と言わんばかりの顔でドヤっている。即ちあれは渴きを感じた寮生諸氏が自由に使えるサーバーが設置されたことを仮面ライダーウォズよろしく「祝え！」と宣言し、皆に「寮生でよかった…」とQuality of Lifeの高まりを感じさせるための掲示物だったのだ（というのは全くの私見）。

かく言う私も7年来のサーバーユーザーで、A社とC社の業務提携の歴史等を語れるほどには詳しい。ここまでサーバーが普及している理由は、単純に手軽であるということ以外に大きく2つあると思われる。

① 水が美味しい。

社により天然水を使用しているものとRO水を使用しているものに分かれるが、美味しさの決め手は「温度」にある。生活の中で冷たい水を飲みたいシチュエーションは多い。実は冷蔵庫で冷やした水は「冷たすぎる」ことが分かっている。サーバーの水は「人間が一番美味しく感じる温度」に設定されており、一度慣れると冷蔵の水には戻れない。

② 災害時にリアルに役立つ。

私は2016年の熊本地震を現地で体験した。震源から少し距離があったため震度6弱で済み、さしたる被害もなく、停電もほどなく解消したが、古びた水道管が激しく揺さぶられたために水道水に錆が混入し、赤茶色に濁って使えなくなった。水が透明になるまでの数日間、給水車が各地に出ていたが、ただでさえストレスフルな被災後に給水ポイントまで出向き列に並ぶ手間が省けたのは、ウォーターサーバーのおかげだった。

以上①②とも、寮生専用の美味しい水を常設するに相応しい理由となるろう。今後も有効利用されることを願う。

就任のご挨拶

学生寮指導員 福永 幸春

令和2年4月1日から高専寮の学生寮指導員（舎監）として働いております福永幸春（ふくながゆきはる）と申します。どうぞよろしくお願い致します。

出身は薩摩川内市で高校卒業後は鹿児島県警察官を拝命しました。

在職中は、県内の警察署を10署程異動し、その間令和元年に霧島市国分広瀬に自宅を購入しました。

警察退職後は霧島警察署国分中央交番の交番相談員として6年間勤務しました。

今回、縁あって高専寮の舎監として勤務することになり、初めての経験であり多少の不安はあります。

しかし、与えられた責務の中で、青春を謳歌する学生諸君の寮における集団生活で何が大事なのか、規則とは何か、寮生活が将来においてどのように役立つのかを少しでも理解してもらおう手助けができればと考えております。

新着任のあいさつ

学生寮指導員 平瀬 紳也

令和2年8月より学生寮指導員として勤務しております

平瀬です。

私は霧島市隼人町に実家があり高校まで実家から通学しました。卒業後は関東の大学で電子工学を学びました。そして電機業界（ソニー（株））に入社し新製品の商品企画、開発・設計を担当する電子回路設計者として仕事を始めました。製品化・品質技術、量産化技術の業務も行い市場に新製品を導入して参りました。またエンジニアの技術教育、管理の業務にも携わりました。

昨年、電子回路技術者一筋で定年を迎えました。

定年を機に心機一転、教育に携わる仕事を希望していました所、学生寮指導員の仕事を授かりました。

私の工学部での学生時代、また企業で培った経験を活用して未来ある学生寮の皆さんの人格形成、成長、技術者としての将来に少しでも寄与できるように貢献したいと考えております。私自身もこの環境で学び精進し、さらにお役に立ちたいと考えております。

高専寮生の皆さんに、助言させていただきます。

技術系の学生が企業に入社する場合、企業は学生にまず学生時代に何をしてきたか？何に打ち込んで来たか？を問います。そして、自ら考え行動する力、表現する力、創造する力を持っているか確認します。

技術者は、企業に入社すると組織の一員として分担を与えられて仕事をする事がほとんどです。企業の組織に対しては忠実義務があり、企業はその存続と発展のために利益を追求しなければならない立場にあります。

みなさんが学んだ専門分野での知識や情報を活用して企業で製品を生み出す時、製品規格や安全性に関し、コスト、納期、美観、利便性、スピードなどのほか顧客の要求仕様や、自社内における様々な価値観と利害が相反するケースが出て困難にぶつかるのが日常になります。

また、技術者は政治、経済、法律、文化・芸術状況を把握すると共に常に専門の技術進歩を追随するように市場動向、新技術の知識を収集し取得する事を要求されます。

学生時代と同様に常に学び、習得し思考する事を強いられます。

皆さんが高専で習得している全ての基礎知識は、進級するに従い専門知識を理解する上で重要なファクタにな

ります。すべての教科に意味がありおろそかにしてはならないと思います。受け身の知識習得から、自ら進んで考え実行する習慣、どんな事でも楽しく学び、好きになるように努力する習慣を身につける事が必要だと思います。これらの習慣・経験は、社会に出た時、どのような困難な環境、立場に置かれても必ず問題解決のカギを見出すきっかけを与えてくれます。

私は学生時代、会社入社後ともに寮生活を経験しています。寮生活は、新しい知識、倫理を吸収するのに最高の環境でした。

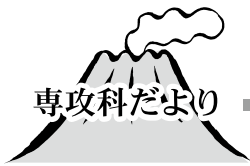
寮生活で新しい知識を貪欲に楽しみながら吸収した事を覚えています。研究室に泊まり込みで実験を行ない、論文や特許を読み公式文章の書き方、データ処理方法、思考方法を学びました。この環境により自分で考え行動する力、表現する力、創造する力を自然に習得できたのだと思います。

また寮で同僚、先輩と、人として如何にあるべきか？技術者、研究者はどうあるべきか？技術者の誇りとは何か？技術者の謙虚さとは何か？社会人として、技術者・研究者としての倫理を論議しました。

この経験は技術者としての思考の基礎を、社会人としての基礎を作ったと思います。

コロナ過ではありますが、感染しないように工夫して、勉学は勿論、技術者としての倫理についても同級生、先輩と会話したら、さらに充実した寮生活を送れると思います。

皆さんの将来に幸ありますようにお手伝いして参ります。



専攻科について

専攻科長・研究主事 山内正仁

本校の専攻科は、本科5年間の教育課程終了後、大学3、4年に相当する課程として、平成12年4月に設置されました。専攻科修了者には『学士』の称号が与えられ、大卒と同等の資格を有することになります。現在、機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻、建設工学専攻の3専攻があり、定員はそれぞれ各学科定員の1割程度となっております。今年度は、56名が在籍しております。

専攻科では、技術者の基盤となる専門能力をさらに高め、その知識を他分野の知識と融合させて、研究を通じて、多角的な問題解決能力を高めるための学習が行われております。専攻科で最も重要となる「学士」を得るための「特別研究」の指導は大学改革支援・学位授与機構の資格審査に合格した教員が行います。しかしながら、本校では特別研究を指導可能な教員数は全国平均（全国8割程度、本校：4～5割程度）を大きく下回り、研究分野によっては学生が進学できない状況を創り出しています。高等教育機関としてあってはならないことと思えます。このような状況を打開するために、学外研究者（国内外の大学教員（科研費の基盤研究（S）（A）（B）、NEDO事業など大型補助金獲得実績を持つ教員）を招聘し、研究力向上を目指した研究発表会を開催したり、研究促進のための校務負担軽減教員制度を設けたり、さらに大学教員の協力のもとで研究活動に従事させる取り組みを実施してきました。しかし残念なことに、本取り組みで効果が上がった教員は中堅・若手教員の一握りでありました。

本校は「創造力豊かな開発型技術者の育成」という学習教育到達目標を掲げています。また、高専機構のホームページには、「研究活動の推進などにより、地域と世界が抱える諸課題に果敢に立ち向かう、深い科学的思想に根差した実践的人材を養成」が謳われています。ここで謳われている「研究」とは、新しいこと、まだ明らかになっていないことに取り組み、課題・問題解決を図ることです。1～4年生の座学、実験・実習などは知識・技能を修得させるものであり、これを実践するのが5年次の卒業研究や専攻科の特別研究です。研究は創造力豊かな開発型技術者、実践的技術者を養成するために必要不可欠なものです。加えて、イノベーションを創出できる人材を育成するためには非常に重要と考えています。これに対し現状では、本校には未だ高専は「教育」が主で、「研究」はやってもやらなくても問題ないという考えを持つ教員が多い状況です。このため、卒業研究、特

別研究で実施した内容が論文化され、社会に発信されることは少なく、現在の専攻科を創り出しています。教員が今一度、「教育」と「研究」は表裏一体であるという理解のもと、「意識改革」を図らなければ、今後、専攻科の存続も困難になっていくのではないかと危惧しています。なお、現在の教員の研究力はa) リサーチマップ (<https://researchmap.jp/researchers>)、b) 日本の研究 (<https://research-er.jp/search/researchers>)、c) KAKEN（科研） (<https://nrid.nii.ac.jp/ja/index/>) で、判断できます。是非、Webサイトで身近な先生からご確認頂ければと思います。

常に専攻科生（卒研究生）が研究に打ち込める環境作りを第一に考え、専攻科自体も大学・大学院に負けない強い教育・研究組織となることを切に願っております。

つぎに今年度の専攻科での取り組みについて簡単に紹介します。専攻科では、特別研究の内容の一部を学外で研究発表（学会発表）することが、特別研究の単位取得要件の一つとなっております。しかしながら、新型コロナウイルスが猛威を振るっている昨今、各種学会が中止され、学外での学会発表が困難な学生も見られました。このため、今年度は、学内の研究進捗状況発表会に大学教員7名を招聘し、学生との討議に参加頂き、この発表会を学外発表として認めることとしました。発表会終了後は、教員、学生の投票により、優秀ポスター発表賞を3名選び、表彰致しました。その他、専攻科1年生のPBL科目の充実を図るために、「環境創造工学プロジェクト」での成果を単年度で終わらせるのではなく、テーマによっては次年度に継続し、最終的にパイロットスケールの試作品まで繋げる取り組みを進めています。特に2017年1月に本校と包括連携協定を締結した鹿児島県長島町の地域課題を題材に教育研究活動を行い、創造的資質を持った技術者の育成を行っています。このことは地域に根ざした次世代を担う技術者、研究者を育てる動機付けとなると思います。

このような逆境下での取り組みを踏まえ、次年度以降は、実践活動と研究業績を積み上げたうえで、学生の手本となるような教員を増やし、真の「創造力豊かな開発型技術者」を育成できるような機関となれるよう、教員が研鑽を続けてほしいと願っています。

奈良先端科学技術大学院大学におけるインターンシップ報告

機械・電子システム工学専攻 1年3番 下久保 巧

実習場所：奈良先端科学技術大学院大学

実習期間：令和2年9月1日～令和2年9月25日

1. 動機

私は鹿児島高専で工学系の中でも機械系を専門に学んできました。また、趣味で心理学を勉強しています。どちらも魅力があるのですが、自分で心理学の研究を試みたいと思うようになりました。奈良先端大学院大学には幅広く学生を受け入れ、且つ心理実験を行っている研究室があった為、行こうと思いました。

2. 内容

自分の意見や要望がミーティングを重ねるうちにまとまり、今回は人間の直観に関する実験を行いました。VR(バーチャルリアリティ)を使用し仮想世界での心理実験をすることが出来ました。実験する為の設定や準備、被験者等も大学院生の力を借りながら行い、最後の実験データ整理までするという目標を達成できました。実際は動画で実験を行いました、今回はその一部の画像を図1に示します。

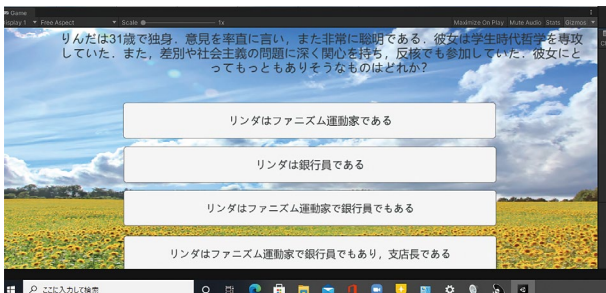


図1 Selection Problem

3. メリット

今回大学院に体験に行っていたいい体験しか出来なかったとしか思えなかった為、その一部を紹介します。

・モチベーションの向上

→皆楽しく研究を行っている

・幅広い知識の必要性(多様性)

→色々な角度から物事を捉えられている

・英語の重要性

→コミュニケーションを取る際に必要不可欠

・工学系での強み

→思ったものを形に出来る強さ

・外国人とのコミュニケーション

→留学したくなる楽しさ

・情報共有

→研究はミーティングやディスカッションで進む

4. 感想

今回のインターンシップで、高専以外の学校に行けばもっと沢山のことが学べる事が分かりました。勿論、楽しいことだけではありません。私は今回、プログラミングに泣くほど苦戦しました。習っていないから分からないでは通用しない。習っていなければ自分で勉強すればいい。そうすれば形にでき、新しい面で物事を捉えることが出来るようになります。達成感は何論、コミュニケーションスキルの向上、更には英語まで習得出来る素晴らしい環境があり、自分がそこに行けるチャンスがあるならば是非挑戦したいと強く感じる事が出来る一か月でした。

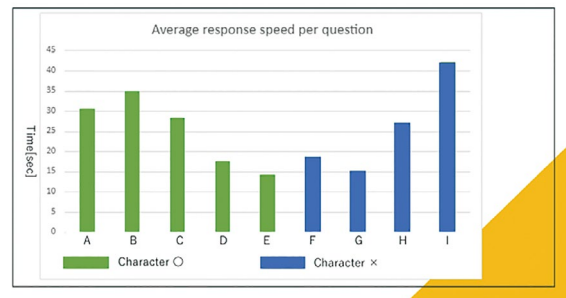


図2 一問にかかる1人あたりの平均解答速度

インターンシップを通して

電気情報システム工学専攻 1年 中原 護

【はじめに】

今年の夏、株式会社 OEC の 2 週間オンラインインターンシップに参加させて頂きました。インターンシップの内容や感じたことを記します。

【株式会社 OEC について】

OEC は金融システム開発、アプリケーション開発、組込みシステムの開発を行っており、主要な取引先としてオリンパス株式会社、みずほ情報総研株式会社、コニカミノルタ株式会社があります。

【インターンの動機】

OEC をインターンシップ先に選んだ理由は新型コロナウイルスの流行によりインターンシップの数が減っていた中、オンラインでの開催を募集しており、これから主流の働き方になっていくと考えられるリモートワークを経験することができると思ったからです。

【インターンシップ中のスケジュール】

勤務時間は 9 時から 18 時までで 1 日に 3 回 Slack によるビデオ会議を行い、進捗の報告やわからない部分の質問などを行いました。1~9 日目までは開発を行い、10 日目は社員の方に向けてパワーポイントでの成果発表を行いました。

09:00~09:15 ビデオ会議①

09:15~12:00 作業

12:00~13:00 休憩

13:00~13:15 ビデオ会議②

13:15~17:00 作業

17:00~17:15 ビデオ会議③

17:15~18:00 作業

【インターンシップ内容】

今回のインターンシップのテーマは「Raspberry Pi を用いた IoT 開発入門」で Web ページやスマートスピーカーから複数の場所にある LED やセンサを制御するプログラムを開発するというものでした。開発には主に Node-RED と JavaScript を用いて開発を行いました。

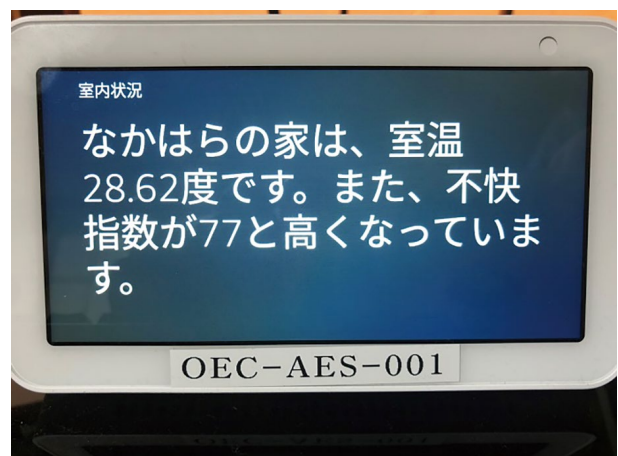
Node-RED は機能が定義されたブロックを組み合わせてコーディング不要でアプリケーションを作成することができるツールです。JavaScript は Web アプリケーション開発によく用いられるプログラミング言語でスマートスピーカーを制御するプログラムの作成に使

用しました。

Web ページでは 3 つのデバイスの気温、湿度、照度、気圧などの情報をリアルタイムで表示する機能、LED をトグルスイッチで制御する機能を実装しました。スマートスピーカーでは音声で気温や湿度などの情報をしゃべらせたり、音声で LED のオン/オフを制御したりすることができるようになりました。

室内状況(device1)		室内状況(device2)		室内状況(device3)	
温度(°C)	29.33	温度(°C)	28.3	温度(°C)	28.65
湿度(%)	37.96	湿度(%)	49.98	湿度(%)	64.44
照度(lux)	171.51	照度(lux)	70.04	照度(lux)	54.68
気圧(hPa)	1009.59	気圧(hPa)	1010.26	気圧(hPa)	1003.67
LED1	<input type="checkbox"/>	LED2	<input type="checkbox"/>	LED3	<input type="checkbox"/>

開発した Web ページ



スマートスピーカーでの実行結果

【オンラインインターンシップについて】

会社からパソコン、スマートスピーカー、Raspberry Pi など開発に必要な機材を郵送でお借りすることができたため、自分で機材を用意しなくてもインターンシップに参加することができました。

リモートワークでの開催ということで不安もあったのですが、わからない部分はビデオ通話ですぐに質問することができたため、リモートワークのデメリットをあまり感じる事がなく作業を進めることができました。

【おわりに】

今回のインターンシップで普段の学生生活では触れることのない技術を身に着けながら自分で問題を解決する力を培うことができました。夏休み期間中の 2 週間という貴重な時間ですが、みなさんも自分のスキルアップのためにインターンシップに参加してみたいかでしょうか？

地域共同テクノセンター の活動について

地域共同テクノセンター長 吉満 真一

地域共同テクノセンターは、本校における地域企業との連携、共同研究の推進、知的財産に関するマネジメント等を行っている部門で、センター長の吉満、副センター長の武田、コーディネーターの宮田、各科から選出されたテクノセンター委員、総務課企画係で運営しています。平成27年度から昨年度までの5年間は特に、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択された「食と観光で世界を魅了する『かごしま』の地元定着促進プログラム」に関して、鹿児島大学を中心として県内8大学・高専、地方公共団体、企業等と連携し、様々な取り組みを行うと共に、鹿児島高専テクノクラブ（KTC）の活動を中心に各種の企画・運営にあたってきました。

また、地方創生推進事業は県全体で取り組んだ事業に加え、鹿児島高専、霧島市及び日置市、両市商工団体、KTC会員企業等とで構成した「COC+高専 地方創生推進会議」を設立し、合同企業説明会、地方創生特別講義、地域企業見学等の事業を計画立案し推進してきました。なお、この「COC+高専 地方創生推進会議」は、令和2年3月をもって5年間のプロジェクトのとりまとめを行い、以降の企画や活動は地域共同テクノセンターおよびKTCの活動に組み込む形とすることになりました。5年間の活動内容は「鹿児島高専COC+事業報告書」にまとめていますので、ご参照ください。

この地方創生の課題は、日本全体が抱えるテーマであり、プロジェクト期間終了後も継続的に取り組む必要があることから、県全体の事業として、令和2年度より鹿児島大学を中心とした「大学地域コンソーシアム鹿児島 地域連携・就業部会」として活動を開始しました。本センターも「COC+高専」の目的に沿って活動を継続すべく、令和2年度の計画を立て準備を進めておりましたが、年明けより問題となっております、新型コロナウイルスに係る感染拡大防止の観点から、取り組みの中止や実施方法の見直しを余儀なくされました。

このような状況の下、「できることを工夫しながら、積極的な姿勢で取り組んでいこう」と、スタッフおよびKTC役員とで検討を重ねながら活動している状況です。

本稿では、主に「学生向けの地方創生推進に係る取り組み」と「鹿児島高専テクノクラブの活動と情報発信力強化の取り組み」について報告致します。

1. 地方創生推進に係る取り組み

鹿児島県における課題の一つとして、大学・高専、専

門学校、高校等卒業生の県内就職率の向上が挙げられます。特に工学系においては県外流出の傾向が高く、本校においても、就職希望者の多くが県外企業へ就職する傾向が多くあります。まずは学生に対して「地域企業を知る機会をつくる、増やす」ことを中心として、これまでに、1) 地域企業インターンシップの推進、2) 学生および保護者にむけた地域企業研究会の推進、3) 地域志向教育特別講義の推進、等について取り組んできました。

今年度は前期期間中に4年生を対象とした地域企業特別講義、保護者懇談会に合わせた学生・保護者向けの地域企業研究会を企画、準備しておりましたが、前述のコロナウィルスの問題に伴う本校の休講措置や保護者懇談会中止により、やむなく実施を見送ることとなりました。

後期においては、当初1年生は地域企業による特別講義、2年生は行政担当者による特別講義、3年生は地域企業見学、4年生は地域企業研究会を計画していました。しかし、従来のような教室や体育館における多人数での対面形式での講義や面談およびバス移動による見学会は見直さなければならなくなったため、3年生の見学は地域企業特別講義へ変更し、また4年生の企業研究会はオンライン形式での開催方法へ変更する事としました。

地域企業特別講義は、これまでは各学科の専門に近い業態の企業技術者の方による講演をクラス個別に行っていましたが、近年は専門の垣根を超えた技術者が求められる状況があることや、学生には広い視野を持ってより学習意欲を高めて欲しいとの思いから、1年生、3年生ともにそれぞれ1学年5学科合同での開催とし、業態の異なる3社の方に講師としてお出でいただき、それぞれのお立場から広い視点でお話しをいただくこととしました。密を避けるために、大講義室にて5学科の代表学生十数名の前でお話しいただき、他学生は各教室にてネット配信による講義の聴講という形式を採用しました。

また、2年生については、前述と同様の実施方式にて、行政の立場から地方の抱えている問題や取り組みについての紹介、さらに専門性を生かした市役所での業務内容ややりがい等についてお話しいただきました。

各学年の講義ともに本校OBの方も講師としておられ、学生はより関心を持って聴講している様子でした。



地方創生特別講義の様子

地方創生特別講義アンケートの例

- ・地元企業のメリットを知れ、OBの話聞いた。今まで興味のなかった分野にも興味を持った。
- ・数学などの基礎学力がしっかり身につけていないといけないと知ったのでより一層勉強に励んでいきたいと思いました。
- ・OBの方々の話、また、それぞれの企業での“やりがい”を感じる部分が聞けてためになった。更に入ると、大人になっても勉強する力、要するに継続する力が大切だと感じた。
- ・高専を卒業したあとの進路の幅広さを知った。
- ・市民の声を聞き、地域がよりよくなるまでまちづくりに取り組んでいることがよくわかった。人口減少に関しては、これほど人口減少が進んでいることにおどろきだった。

1、3年生では5学科合同で、機械設計・製造系、電気・電子情報系、建設・建築系の業態の方の話を書くという初めての試みとなりました。業態に拘らずに企業の取り組みを知ると同時に、学習している内容が、これまで考えていなかった業種でも必要とされていることを知る機会にもなったようです。質疑応答も活発に行われ、意欲的な姿勢が伺えました。また、2年生では行政の立場からのお話を聞くことで、地方の現状や抱える課題を知り、故郷である鹿児島や日本のこれからについて改めて考える機会となったようです。本特別講義が今後の進路や人生を考えていく際の参考になれば幸いです。

また、4年生に向けた1月中旬のKTC会員企業を中心とした地域企業研究会は、体育館を会場として企業毎のブースを設置しての対面形式で行っていましたが、今年度は感染拡大防止の観点から見送ることとしました。但し、学生に地域企業を知る機会を提供するために、会員企業各社のPR動画等をオンラインで学生が視聴できる機会を設けることとしました。賛同いただいた会員企業44社より動画等の資料を準備いただき、地域企業研究の場を提供することができました。

2. 鹿児島高専テクノクラブ (KTC) の活動

本校の産学官連携組織であるKTCでは、例年、総会および年3回の役員会と技術研修会を実施しており、今年度は、6月初旬に総会および第1回の技術研修会と役員会を企画していました。しかし、コロナウィルス感染拡大防止の観点から、多くの方が一堂に会して行う形式はとれないため、総会および役員会を書面会議で行うこととし、技術研修会は中止せざるをえませんでした。

また、新卒予定者の採用活動も始まっている時期でしたが、このコロナ禍においてはインターネットを活用し

た「オンライン試験」、「オンライン面接」という言葉が多く聞かれるようになっていました。そこで、KTC総会の書面会議に合わせ、このような動きについて、会員企業の状況を把握するために、会員各社にPRや採用活動のWeb化対応に関するアンケート調査も実施しました。「既に説明会や面接に導入している」、「今後導入を予定」、「Webを活用した採用活動の効果的なPR方法が知りたい」といった様々な意見が寄せられました。

その後、技術研修会等の開催について、KTC会長および副会長とテクノセンタースタッフ間で状況をみながら協議を行ってききましたが、対面集合形式での開催は当面困難との判断に至り、10月に第1回の技術研修会をオンラインセミナー形式で開催することを決定しました。研修会のテーマは先のアンケート結果も踏まえ、「採用活動や企業PRのWeb化の推進や動向」にスポットをあてた内容でマイナビの方を講師に迎え、ネット配信形式で実施しました。この研修会には33社、61名の方に参加いただき、講演会後にも多くのご意見を頂戴しました。



令和2年度 第1回KTC技術研修会(オンラインセミナー)

また、今年度取り組むべきテーマとして、KTCの情報発信力強化についても掲げ、その一つとしてホームページのリニューアルを実施しています。内容を再考し、今年度は、1) 会員企業の魅力発信の入口となるHP、2) 在学生・卒業生にとって魅力あるHP、3) 会員相互の交流の場としてのHP、の3点を重視してリニューアルを進めています。会員各社には画像や動画も利用してPRに活用していただき、学生や卒業生には検索機能等も利用し企業研究に活用していただければと思います。KTCの魅力アップの一助となるよう、継続的な改良を行って参りますので、是非アクセスしていただければ幸いです。

今年度は私達が初めて直面する状況の中で、模索しながらの活動でした。各取り組みが途絶えることなく、継続されていくとともに、新たなチャレンジも行いながら、地域企業と鹿児島高専がより強固に結びつき、地域の活性化につながっていくことを期待しています。

鹿児島高専テクノクラブ新ホームページ
URL : <https://kk-techno.org>



心理学の世界

公認心理師 臨床心理士 中園博文

私が心理学に興味を持ったのは、大学の教職課程の「教育心理学」です。高校生までは「心理学」という学問に触れたことが無かったので、大学の心理学の話は、とても興味深く感じました。心理学は元々、目には見えない“こころ”というものの仕組みや働きを科学的に研究する学問です。教育心理学は、教育に関する「記憶」「学習」「動機付け」「知能」「人間関係」などを科学的に研究する分野になります。大学生の頃の授業で印象に残っている話は、「エビングハウスの忘却曲線」です。エビングハウスの実験では、無意味な13個の単語を全て記憶するように指示され、1つ残らず記憶したことを確認した後、20分～31日間における時間をおき、再学習して完全に記憶するまでどのくらいの時間を要したかを調べるものでした。記憶の忘却を科学的に検証すると、完全に覚えてから1時間の間に急激に進んでいくことが明らかにされました。私は、この講義を聞いてから、自宅での復習が必要なことの根拠を知ることになりました。私はこの出来事が、「心理学の世界」に飛び込むきっかけになりました。「こころ」という目に見えない働きを科学的にアプローチすることが当時はとても新鮮でした。

心理学は、大きくわけて「基礎心理学（学習心理学、人格心理学、発達心理学など）」と「応用心理学（教育心理学、臨床心理学、災害心理学など）」に分けられ、扱う分野は多岐にわたります。このことから心理学は日常生活において役立つ学問であるといえるのではないのでしょうか。皆さんも知らないうちに心理学から得られた知見を日常的な会話で利用していることがあると思います。例えば「無意識」という言葉は精神科医のフロイトが発見したことで知られていますが、周りの人たちの会話を聞いていると「無意識に〇〇していた」という会話を耳にしたこともあるのではないのでしょうか。現在では「医療」「福祉」「教育」などの分野での研究がすすみ、広がりをみせています。

私は「臨床心理学」を専門にしています。臨床心理学は、こころの問題に対して問題解決や対人援助の方法を用いて、心理的援助を行う分野です。主な療法として「精神分析療法」「認知行動療法」「家族療法」「芸術療法」などがあげられます。

皆さんも是非、身近にある「心理学の世界」に興味をもっていただけると嬉しいです。



表現主義研究

一般教育科 保坂直之

今から百年と少し前、19 世紀から 20 世紀に世紀が切り替わる時期に、わたしたちが生きているこの「産業社会」の基礎は形作られました。鉄、セメント、港湾、煙突、トラム、群衆、工場、集合住宅、電化…などはこの時期のテキストにしばしば現れるキーワードの一部です。地下鉄や自動車を使い街灯が照らす目抜き通りで夜遊び、の現代都市の生活もこの時代に始まりました。

世紀の切れ目をまたぐこの数十年の文化様式は「モダニズム」と呼ばれることがあります。汚い大都市や工場労働はロマン派の昔から見ればおぞましいものですが、その醜さを「美」として受け入れる試みがモダニズム文化です。痛みを快樂と感じるのと同じで醜を美と見るのは倒錯であり幻覚ですが、文化というささやかな幻覚の力を借りて初めてわたしたちは自分がドブで蠢くネズミの群れの一匹ではなく一人の人間なのだ、と気づくのです。

「表現主義」はモダニズム様式の一つの現れですが、夢と現（うつ）の境界を徹底的に壊す激しさが特徴です。表現主義の時代は第一次世界大戦の前と後ですから、古い世界が壊れて戦争の臭いのする社会不安が幻覚指向の激しい表現を生んだのだらうと、普通は理解されます。私の場合はドイツ語圏（欧州中央部）のポエジーが観察の中心なので言葉によるイメージを探るのですが、表現主義のイメージは音楽やドラマ、美術、建築などあらゆる領域に現れます。建物であれば美術館に行ったり本を開いたりしなくても家を出れば私たちの街でも出くわします。モダニズムは西欧だけの運動ではなく世界共通の現象だからです。

（写真 1）の九段小学校外壁のパラボラ（放物線）アーチの連続は表現主義建築の特徴です。関東大震災の復興事業として建てられた小学校の校舎は、震災の大火災に次は打ち勝つぞ、の願いを込めての鉄筋コンクリート造りで、アーチは力学的な必要からではなく自由なデザインによるものです。「心の風景描写」も表現主義のキーワードの一つですが、これは心の目に映る幻視で世界を作り替えてしまう（妄想優先）、という強い意味です。（写真 2）の東京中央郵便局は窓の大きさを上部に行くほど小さくすることで、目に見えないパラボラアーチの連続を幻として感じさせます。いずれの構造物も角を削ぎ落とされて動物的な蠢きをはらんでいます。

人工構造物と生物・人間の区別を取り除く発想は表現主義のポエジーに多々見られます。現実のヒトと心に浮かんだヒト、違うのか、同じなのか、の問題もこの時代

からのものでした。「二次元の彼女」と「三次元の彼女」のどちらがいいか、と言い換えてもいいです。現代日本人の多くは「価値に違いはない、二次元は三次元とは別もの、三次元と平等に二次元は実在する」と答える気がします。その答えを聞くと、私の目には「よし、この若者はトラークルやホディアスの魂が宿る表現派だ」と見えるわけです。この答えの先には人工の知性と動物としてのヒト（human）が共存し、両者が感情的につながる世界が開かれます。

表現主義全体を説明するような文章を書きましたが、私自身はここ数年は特に「幻視イメージは非現実ではなく現実に実在する」という視点の詩を見つけて論文を書きながら、現代人の感覚の起点をモダニズムのイメージに探そうとしています。

写真 1：千代田区立九段小学校（1926）・東京市営繕部設計



写真 2：東京中央郵便局（1932）・吉田鉄朗設計



（＊筆者撮影）

研究紹介

電気電子工学科 栢 健一

高専の教員は、学生の皆さんに教育するだけでなく、研究も指導します。学生の皆さんが5年生に進級すると卒業研究に着手することになります。鹿児島高専で着手した研究を一生することになる学生もいれば、いろんな研究を着手する学生もいます。都城高専出身である私の場合は、後者でした。これまでの研究を簡単にご紹介します。

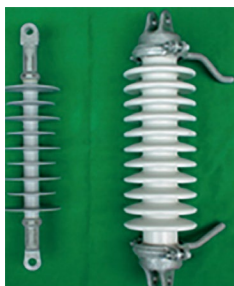
- 都城高専5年(学生) : 超電導ケーブル
- 宮崎大学4年(大学生) : 避雷器
- 宮崎大学院(院生) : 碍子
- 東京都立産業技術研究センター(就職) : 電磁波
- 鹿児島高専(転職) : 絶縁物、センサ

振り返ると、研究内容がいろいろと変化しました。主に電気の中でも強電のカテゴリに位置する内容をこれまで研究してきました。東京都立産業技術研究センターに就職したときには、学生時代に携わった電力や絶縁材料の研究とは全然違う電磁波の研究をするよう任命されました。もしかしたら、学生の皆さんも学生時代と違う研究をするよう就職先に命令されるかもしれません。しかし不安に思わないでください。就職先で良い人間関係を築けば、先輩がやさしく時には厳しく指導してくれます。自分からいろいろ知見を広げましょう。鹿児島高専へ転職したのは就職先が嫌いになった、研究が嫌だった、人間関係が嫌だったわけではありません。教員になることが子供の時からの夢でした。ある時、たまたま出身地近くの鹿児島高専の教員のポストが空いたので転職しました。

鹿児島高専で現在着手している研究を簡単にご紹介したいと思います。鹿児島には雄大な観光資源である桜島があります。しかし、時に桜島の噴火は降灰という形で私たちの生活に大きな影響を与えます。桜島の降灰をテーマにした研究を2つ簡単にご紹介します。

研究テーマ1. 絶縁材料の評価

私たちの生活で電力は欠かせません。発電所で発電した電力は、送電線を通じて各家庭に届けられます。送電線は鉄塔によって空中で支えられています。この送電線と鉄塔を直接接続してしまうと、電力が鉄塔へ流れてしまい送電損失が増えてしまいます。そこで、送電線と鉄塔の間に、右図のような碍子(がいし: 絶縁機器)を入れることで鉄塔へ電力が逃げてしまわないように送電損失を減らしています。



ポリマー碍子(左)
セラミック碍子(右)

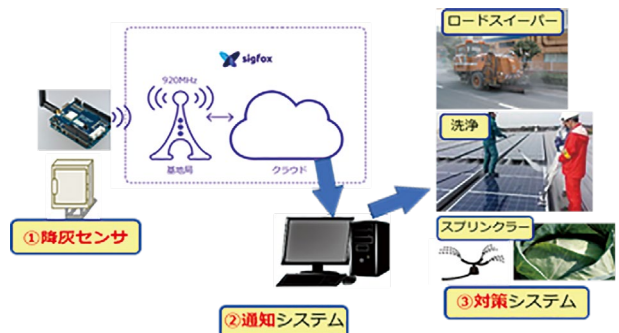
碍子は表面が雨でぬれたり、何かの汚れ(火山灰、鳥の糞、海からの潮風、工場からの塵など)が付着したりすると、碍子の絶縁能力が低下します。碍子の絶縁能力が低下すると、付着部分で放電が発生し、碍子が損傷し鉄塔へ電力が逃げやすくなります。

汚損の激しい地域とそうでない地域で碍子を使用すれば、当然、使用年耐数は異なってきます。実際のフィールドに碍子を設置して研究するには30年、40年と時間を要します。そこで、比較的短期間に碍子の絶縁材料を評価できるよう、模擬的に汚損して高電圧をかけることで碍子の絶縁材料の評価を実施しています。

研究テーマ2. 火山灰センサの開発

桜島は噴火して降灰すると一般家庭や地場産業に被害を及ぼします。視界の悪化、健康被害、洗濯物を汚したり、車体を傷つけたり、農産物の育成を阻害したり、ソーラーパネルの発電効率を低下させるといった問題です。

現時点で、リアルタイムに降灰を知らせる手段がありません。風向きによって桜島が噴火したら灰がどちらへ飛んでゆくかという予想はされていますが、リアルタイムではありません。また気象庁などの灰の計測方法はドラム缶のようなもので灰を収集し、水分(雨など)を蒸発させ、天秤で測定し、インターネット上で公表するためリアルタイムではありません。そこで、図に示すように、付着した灰を、赤外線LEDセンサで検知し、降灰情報(時間、場所など)を送信して、情報端末(PCやスマートフォンなど)でリアルタイムに降灰を知ることができるというシステムを開発中です。これによって、人手や時間をかけることなくリアルタイムに降灰を知ることができ、被害前に降灰対策を施すことができます。また鹿児島へ移住や、観光目的で来訪する、普段から降灰の生活に慣れていない人々への支援情報を発信できるようになります。将来的に桜島だけに限らず、世界中の火山に対する降灰計測装置、さらに灰だけに限らず、花粉やPM2.5などといったものも計測できるような装置にすることを夢としています。



降灰センサによる通知システム

鹿児島県の農業文化の継承のために

電子制御工学科 瀬戸山 康之

私たちの暮らしている鹿児島県は、東西約270km、南北約600kmに広がり、総面積は9,187km²あります。この広大な土地を利用した農業は、鹿児島県の地域経済を支える基幹産業であり、平成30年における農業産出額は北海道に続く全国第2位の4,863億円となっています(鹿児島の農業2020、令和2年3月、鹿児島県農政部発行)。鹿児島は、さつまいも、そらまめ、さやえんどう、球根類、豚などの様々な品目で全国1位の生産量を誇る全国有数の農業県となっています。しかし、みなさんも知ってのとおり、生産者の減少と高齢化により、農業就業人口は年々減ってきています。そのため、労働力不足や農業後継者への技術を継承するといったような様々な課題を抱えているのが現状です。

さて、前置きが長くなりましたが、私の研究の話をしていきます。私は現在、ラッキョウの調整作業の自動化を目指して研究を行っています。なぜラッキョウ?と思われる人も多いと思いますが、鹿児島県はラッキョウの出荷量が2083トンと全国2位の生産量であり、鹿児島を代表する農作物の1つです(農林水産省「地域特産野菜生産状況調査(平成28年度)」)。ラッキョウは収穫してから出荷するまでに、根と茎を切断する調整作業が必要となりますが、ラッキョウは生産に係る労働時間が約250h/10aであり、そのうち収穫・調整作業が58%を占めています。この調整作業は、現在は作業者の手によって一つ一つ手作業で行われていますが、最初に述べたように、作業者の高齢化に伴い担い手が少なくなっています。また作業者への肉体的負担も大きく、新たな担い手も少ないため、生産性の向上および生産規模の拡大のためにも自動化を実現することが必須となります。

ラッキョウの調整作業を完全に自動化するには様々な技術を利用する必要があります。カメラを用いて対象物の大きさ判別するための画像処理技術、大きさを判別した対象物を記憶し学習する機械学習プログラムの開発、対象物を自動で運搬するロボットの制御技術、ラッキョウの性状に左右されない根茎機調整作業を実現するためのメカトロニクス技術など、ロボットやAI、ITといった技術を組み合わせなければなりません。まだ取り組み始めたばかりで大きな成果は出ていませんが、卒研生や地元農家の方々に手伝ってもらいながら少しずつ研究を進めています。長い歴史を通じて営まれてきた鹿児島の農業文化を継承していくための一助となればと考えています。

研究について

都市環境デザイン工学科 片平智仁

都市環境デザイン工学科の片平です。はじめましての方が多くなると思います。本題の前に簡単に自己紹介をさせていただきます。2019年10月から都市環境デザイン工学科に着任いたしました。1999年に本校に入学し、2006年に専攻科を卒業した卒業生となります。私の頃はまだ都市環境デザイン工学科が土木工学科の時代です。学科名や時代の流れに合わせて私の学生時代と変わった点もあれば、変わらないものもあって、懐かしい思い出を振り返りながら教員生活を送っております。

さて、「研究」についてですが、「研究」という言葉が高尚なイメージがしてしまいあまり使いたくないので、「私がやっていること」を書きたいと思います。簡単に言うとほぼ「農業」です。工業系の学校なので強みを活かし工業・工学的な観点も切り口にしながら進めております。

皆さんの生活から排出される生活排水は下水処理場(水再生センター)へ下水道管を通して運ばれ微生物の力や物理化学作用を用いて川や海へ影響の少ない状態にて放流されています。この時の副産物として増殖した微生物が大量に発生します。これを下水汚泥と呼びます。「下水」+「汚い」+「泥」なのでイメージは最悪です。現状として、この下水汚泥の大半が産業廃棄物として税金(=皆さんのお金)を使って処理されています。嫌われ者の下水汚泥ですが、微生物や細菌の宝庫です。タンパク質やアミノ酸も含まれています。下水汚泥の特性を活かして上手に使って社会の為になれば良いかなと思っています。そこで、この下水汚泥の特徴を活かして下水汚泥や竹チップや米ぬか、焼酎粕などを混ぜ合わせて肥料にして農作物に使ってみようと言う作戦です。今、狙っている作物は「お茶」です。鹿児島県は静岡県に次ぐ栽培面積があり、上手くすれば非常にたくさんの下水汚泥を地域循環することができる可能性があります。

具体的な活動としては、地域企業と密着し、実際に肥料製造をしている企業の敷地の一角を借りて、下水汚泥の肥料を自分たちで作って、実際の茶農家に茶畑を借りて自分たちで肥料をまき、成長過程を観察し、お茶の葉を収穫しています。今のところ順調にお茶栽培ができています。また、製造している肥料を広く色んな方々に使ってもらえるように、「肥料登録」を行う準備をしています。(実は学校機関として、肥料登録されているところは少し前までは1校ありましたが、現在どこもありません。上手く肥料登録できれば、高専初・全国で本校のみとなります。)都市環境デザイン工学科の山内先

生や山田先生のご協力をいただきながら、専攻科生や5年生の力を合わせて活動中です。

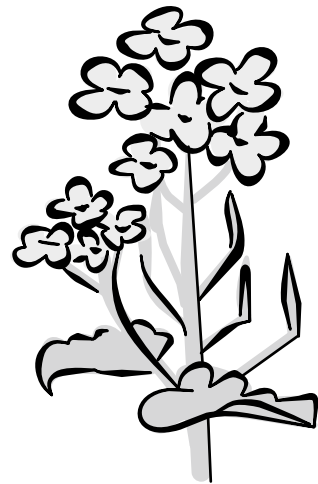
やはり何事も「行動」を起こさなければ「結果」はでてこないと思います。ここまで読んでいただいた皆さんも是非何か「行動」を起こしてもらえればと思います。



写真1 肥料製造状況



写真2 茶畑での作業状況





卒業を迎える皆さんへ

電気電子工学科 5年担任 前菌 正宜

卒業生の皆さんご卒業おめでとうございます。保護者の皆様におかれましてもご子息・ご息女が卒業という節目を無事迎えますことをお祝い申し上げます。また学生の勉学、寮生活、課外活動など多岐にわたるご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

5年生の皆さんが鹿児島高専に入学した日から5年という時間が経過しています。入学時に思い描いていた5年後の自分の姿と、現在の自分自身を比べ、次の5年後の姿を想像してみるのもおもしろいと思います。この5年間に世の中では様々なことがあり、予想通り、予定通りの5年間だったという人はほとんどいないのではないのでしょうか。大きな出来事としては元号が平成から令和に変わったこと、そして現在も進行中といえる新型コロナウイルス（COVID-19）の流行が挙げられます。

新型コロナウイルスに関しては、本校でも休校や各種学校行事やイベントが中止となるなど大きな影響を受けました。5年生の皆さんも部活動の最後の大会や最後の発表の機会が中止になって残念な思いをしたり、進学や就職でも日程の変更やオンラインを利用したりリモートの受験になるなど、事前に準備してきたものと異なって戸惑ったりする場面も多かったかと思います。

このような社会に大きな影響を与える病気の原因となりうるウイルスですが、なかには進化のスピードが速いものもあり（ここで言う進化とは世代を経ることによる遺伝的な性質の変化を指します）、人間が時間やお金をかけて特効薬を開発しても、数ヶ月で別の性質を持つようにウイルスが進化し、薬の効果がなくなってしまう事もあります。今後も未知の進化を遂げたウイルスが原因となる病気が大流行するという可能性は十分にあります。

このように進化を続けるウイルス等に対して、人間は進化無しで打ち勝たなければなりません。仮にウイルスに打ち勝つ性質を持つように進化を遂げた人間が新たに誕生したとしても、それより前の世代はウイルスにより淘汰されてしまうので、現在を生きる人にとって進化は直接の解決の手段にならないのです。このような事態に人間は科学技術や社会制度を発展させることにより、対抗していくことになります。人間の社会はこれまで様々な面で発展をしてきましたが、例えば西暦1年から2020年までの発展の要因が人間の進化だったことはほとんど無いはずで

人間という動物の特徴は高い知能を備えていることです。道具を使う、道具を開発する、他者とコミュニケー

ションを取る、といった動物は人間以外にもチンパンジーや一部の鳥類などが存在しますが、高度な道具を開発し、複雑な情報を記録・伝達できるのはおそらく人間だけです。人間は自身の経験から得る知識以外にも書物や他者から有用な知識を吸収することができ、その知識を元に高度な試行錯誤を行い、新たな知識を生み出すことができます。またその知識を他者に伝えるというサイクルを繰り返すことで、これまでの様々な発展を遂げてきました。現在も新型コロナウイルスに対抗するために世界中の国や機関、人がこのようなことを全力で取り組んでいることと思います。

卒業を迎える皆さんに伝えたいことは、皆さんも高度な試行錯誤を行い、知識を他者と共有してくださいということです。就職や進学でそれぞれの道に進むこととなりますが、その分野でより高度な試行錯誤を行うためには多くの専門的な知識が必要です。高専で学んだ基礎的な知識も土台としつつ、先輩や上司に積極的に教わりに行ったり、自分で調べたりする必要があります。知識を得たら試してみたいことも色々出てくるはずなので、積極的に取り組んでみてください。たとえ試行錯誤による成果が得られなかったとしても、それまでの知識は無駄にならないはずなので、それを他者、特に後輩に伝えてあげてください。

比較的単純な試行錯誤であればコンピューターの方が得意で、高速に、大量の処理を、疲れ知らずで続けることができます。AIの進歩によって職を奪われないためにも、新たなウイルスによる驚異などに打ち勝つためにも、「勉強」を続けていく必要があると思います。2020年は生活様式も大きく変わり、今後もどのように変化するかははっきりと分からない状態であり、進学・就職する皆さんにとっては不安も大きいことと思いますが、やるべき事はそう大きく変わっていないのではないかと思います。

最後になりますが、卒業生の皆さんの今後の活躍と健康を祈っています。

卒業を迎えて

機械工学科 5年 上原 明日斗

もうすぐ鹿児島高専に編入学してから2年が経とうとしています。ほとんどの学生が高専での5年間をあっという間だったと言いますが編入生の私にとってはあっという間もないという感じでした。私は他の学生に比べて在籍した時間が短いため執筆を任されたときは断ろうと思いましたが私にしか伝えられない鹿児島高専があると思ひ執筆を引き受けました。

高専に入学してからは本当に怒涛の2年間でした。これから少し私の高専での2年間を振り返りたいと思います。

まずは入学式、周りのほとんどが中学卒業したての中での入学式で違和感を感じました、3年間遅れて入るクラスになじめるかとても緊張したことをよく覚えています。

それからは工学実験のレポートに追われる日々が始まりました。そしてレポートの作成を助け合うことで友人との仲を深めることができたのかもしれない。高専祭は前に通っていた学校よりも生徒が主体になって作っている感じがしてすごいと思ったしみんなで一つのものを作り上げていく楽しさを知りました。そんなこんなで4年生が終わり就職活動が始まりました。コロナウイルスの影響で世間では就職難と言われていたが流石は高専という感じであっさり就職活動も終わりました。今はなかなか思うような結果の出てくれない卒業研究に悪戦苦闘する毎日です。

2年間の高専生活を振り返り、一番に思ったことは「一人じゃなくてよかった」ということです。周りのサポートがなければ今の私はいないと思います。今こうして文章を書いているのは友人や家族、先生のおかげです。人は一人では生きていけません。何かしらどこかで誰かの力を借りなければいけない場面があると思います。そんな時に助け合える友人ができたこと、これが高専に来て一番の収穫だったのかもしれない。来年度からは社会人です。努力した分だけ見返りが返ってくるほど世の中は甘くはないでしょう、それでも成功した人は努力を続けた人たちです。この学校で学んだことを糧に更なる努力を続けて社会に貢献できる人間を目指したいと思います。

最後になりましたが両親を始め、先生方、友人達、皆様のおかげで有意義な学生生活を送ることができました。この場をお借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

高専生活を振り返って

電気電子工学科 5年 福森 美月

あっという間に5年が過ぎ、不安いっぱい入学式を迎えた入学式が懐かしいです。通っていた中学校からは一人だけの高専進学、当然友達もおらず、入学式が始まる前には体育館の前ですでに輪になっている同級生たちに驚き、「これから5年間うまくやっっていけかな？入る学校間違えたのかも」と早くも後悔しました。しかし、幸運なことに周りの人や環境に恵まれ楽しい思い出が残る学校生活を送れ、今では高専へ来てよかったと心から思います。

特に思い出に残っているのは部活動です。私は1年生の時から環境創造物理研究部（以下、物理部）と天文気象同好会（現：物理部天文気象チーム）を兼部していました。天文気象同好会は、1年時に友人と活動を再開させた部活で思い出がたくさんあります。最初の頃は部員が1年生4人のみ、活動も晴れた日に屋上を開けてもらい望遠鏡で月を見るくらいでした。しかし、今では部員も20人近くに増え、プラネタリウムの制作と高専祭で上映、夏休みの輝北の天球館での合宿、天体に関する勉強会など活動の幅も広がり感慨深いです。プラネタリウム制作は、ドームや投影機的设计から行い、モノづくりの楽しさと大変さを学びました。制作過程では、周りの人たちにアイデアをもらい、情報の友人は投影機に使うアルミ板やドームの加工を行ってくれ、物理部の先輩には部室にある3DプリンターやCADの使い方を教えて頂き、本当に周りの人の助けをもらいました。このように、周りの人に声をかけ積極的に動いて何かをするなど、入学前にはできるような人ではなかったのも、成長できてよかったと思います。

高専生活で、少し後悔していることはクラスメイトとあまり関わってこなかった事です。顔と名前が一致するまで3年もかかり、気づけば5人いた女子も2人となり何人ものクラスメイトが留年したり他の道へ進んでいました。もしかしたら、もう会うことがないのかもしれないと思うとクラスメイトの人柄がなんとなくわかるくらいは話せていればよかったなと思います。

また、もっと基礎が身につくように勉強できていればと思いました。確かに、授業でやった演習などを何度も何度も繰り返し解いていけばテストでの成績は良くなりました。しかし、これは「留年しないため」の勉強で自分の身につく勉強ではなかったのだと学年が上がるにつれて感じました。それは、応用が求められる科目が増えたからです。授業で習った時点で原理をしっかりと理解できなかったものは、復習するときに苦勞しました。大学では、高専に入ったときの「勉強したい」という気持ちを忘れずに励みたいです。

最後に、お世話になった先生方、先輩、部活の後輩、同級生、本当にありがとうございました。

卒業にあたって

電子制御工学科5年 村元 優太

私が高専に入学してから5年間の高専生活を経て卒業の日を迎えようとしている。高専に入学した当時は「これから5年間もこの学校で過ごすのかあ」と思っていました。しかし、そんな5年間の高専生活に幕を下ろし、卒業を迎えようとしている今では「5年間じゃ物足りなかった」と感じています。高専では寮生活や部活動、応援団等を通しての多くの思い出を作り、そして多くの経験を積むことができました。

寮生活では、入学して半年は先輩と同室で初めての家族以外との同居生活でわからないことが多くあり、緊張していたことを覚えています。しかし、同室だった先輩が生活面でわからないことや勉強面でのアドバイスをしてくださったおかげで自分は問題なく寮生活に馴染むことができましたことを覚えています。また、夜遅くまで友達と語り合ったり、テスト前になると一緒に勉強したりしたことをとても懐かしく感じます。

部活動では、1年生の時に入部してから5年生まで弓道部に所属していました。1年生と2年生は先輩が怖く、成績に伸び悩んでいました。3年生になり副部長に任命され全国高専弓道通信大会で3位入賞し、練習に手応えを感じ始め、4年生では部長に任命され地区高専弓道大会で個人と団体の優勝をし、諦めず練習をしてきたことが報われ安心したことを覚えています。

また、2年生時から体育祭のメインイベントである応援団に参加しました。練習は辛かったですが、先輩方のかっこいい背中を追い、4年生の時に優勝した感動を仲間と分かち合ったことを鮮明に覚えています。応援団で心身ともに成長でき、かけがえのない経験をすることができました。

そして学生の本分である学業面では、勉強と部活動や学校行事等との両立が非常に大変でした。特に部活終了後に実験のレポートやテスト勉強があるとは体力的にも精神的にも辛かったです。こうした苦難も今では私の生活の糧になっています。

こうして5年間を振り返ると多くの方々に支えられ過ぎてきたと改めて感じます。今後、社会人として生活していく中で、大学進学後就職してからも高専で学んだことを生かし、自信をもって何事にも前向きに頑張っていこうと思います。

最後にこの場を借りて、5年間を共に過ごしたクラスの皆と、今までお世話になった先輩方、先生方、後輩達との一期一会の出会いに感謝の気持ちを込めて「ありがとうございました」と伝えさせていただきます。

自由

情報工学科5年 松元 亨樹

この5年間の高専生活が信じられないほどの速さで終わりを迎えようとしています。つい最近入学したかのような感覚で、それはこの高専生活がとても充実していたことの何よりの証拠だと思います。素晴らしい高専生活を送ることができたのは、先生方や保護者の方々、友人などの支えあつてのものです。そして題名にもあるように「自由」な環境によって様々な経験を積むことができました。

私は友人や先生方に「学科間違えたんじゃないの?」と言われることが多々あります。しかし、その背景には自由な高専だからこそできた多くの経験がありました。例えば、部活動でのプラネタリウム制作や、かごしま国体のカウントダウンボードの製作など、とても達成感のあるものばかりでした。高専では自分の得意分野を応用したり、知らない分野について仲間や先生方から活動を通して学んだりすることもできます。そこで私は専攻分野とは別に、機械分野の知識も少しではありますが身につけることができました。

課外活動の他には趣味の自転車に熱中することができました。高専はすべきことさえすれば自由であるため、時間があればサイクリングをして充実した時間を過ごすことができます。そんな私ですが、実は高専に入るまで自転車に乗ることができませんでした。その当時の先輩に勧められ、いざ乗ってみるととても心地よくて、楽しいという感情で溢れかえていたのは今でも覚えています。

このような充実した学校生活をおくり、就職に関しても興味のある機械と私の好きな自転車があるところに内定を頂くことができました。これからも学び続けていきたいと思います。高専は学ぶところではありませんが、それは単位の取得だけを指しているのではないと考えています。興味があることについて深めること、新たなことに挑戦してみることも学ぶことの1つだ思うのです。意欲さえあれば無限大に学べるのが高専です。そんな高専に入ってとても良かったと感じています。

最後になりましたが、今まで支えてくださった皆様、ありがとうございました。これからも私は何事にも貪欲に取り組み、成長を続けていきます。

ターニングポイント

都市環境デザイン工学科 5年 富田凱貴

歴代の高専だよりを読ませていただき、高専生活は出きってしまったのではないかと思う今日この頃。今年度の担当となりました、富田凱貴です。同学科の後輩においても認知度は低く、バドミントン部員ほどにしか知られていないとは思いますが、こんな人もいたんだ程度に読んでいただけると幸いです。

私の高専生活の大半は、部活動と共にありました。小学生から始めたバドミントンを引きずり、高専で楽しくするつもりでしたが、先輩・同期・後輩に恵まれすぎました。ありがとうございました。日々の練習がきつすぎて、もはや楽しかったです。そこまで振り切れたのはやはり顧問の存在が大きかったからです。鹿児島高専バドミントン部の、歴史と記憶に残る5年間を私に下さり、ありがとうございました。

学業のことをお話すると、私は数学が嫌いが高専に入りました。理工学部系の高専は、私にとってはどちらかという苦しかったです。学業の転機としては一年の頃に、ある先生が講義の小話で、「どんな馬鹿でも同じことを繰り返せば、それは出来るようになって当たり前だ」とおっしゃったことです。それはなぜか今でも私の中で生きていて、効率は悪いですが、能力は確かにあとから少しずつついてきました。高専に来てよかったと考える講師の方々に感謝しています。お世話になりました。

行事などでは熱意溢れる仲間をよそに、どこか面倒だと感じたり、任されたらやろう程度にしか思っていないでした。私以外でこんなことを考えている輩は、今すぐチャレンジをするべきです。後悔します。リスクは大きいです。しかし、たかが五年間です。私の場合は、4年次に初めて文化祭の露店を経験しました。友人からの誘いで、なぜかやる気が湧きました。露店のチーフをやったよかった。苦楽併せて、今、思うことはそれだけです。私に機会をくれた友人に感謝します。

最後になりますが、高専生活を振り返ることは楽しかったです。一年のころと比べ、顔ぶれもだいぶ変わりましたが、今ではいい思い出です。また、高校と違った五年制・五学科というのが、幅の広い刺激を与えてくれたと思います。そして改めまして、お世話になった方々へ感謝の気持ちを述べるとともに、今後とも技術者らしく研鑽を積むことを誓い、終わりの挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

7年間の高専生活を経て

機械・電子システム工学専攻 浅江 奎伍

私は平成26年に入学して本科で5年、専攻科で2年、計7年間この鹿児島高専で学んできました。高専では工学的な知識と技術を身に付けました。

本科5年間はバレーボール部に所属しており、部活をすることで勉強が疎かにならないよう文武両道を掲げ、日々の生活を送りました。このような5年間を経て私は専攻科へ入学しました。専門的知識は本科の際におおむね学修しているため、専攻科の講義では、主に学修した専門分野の復習や少し発展したもの、または働く上で関わってくる法律や技術倫理等について学びました。更には本科5年間に学んだ専門的知識を用いて研究を深めたり、環境創造プロジェクトと呼ばれる他学科の学生と協力してあるテーマの元の一つのものを創ったりします。多学科と交流するのは新鮮で、完成させるまでは苦労しましたが、達成感はとても大きいものでした。

また、私の出身が離島ということもあり、実家から通学することが難しかったため寮生として生活を送りました。今でも私は入寮した日を鮮明に覚えています。初めは親元を離れ全く知らない土地、高専というあまり馴染みのない場所、周りには知り合いがいないという環境に置かれていたため、今後の寮生活に不安しかありませんでした。しかし、同室の先輩は優しく、同級生とも学校生活を通して仲良くなれたため、寮生活での不安も徐々に解消されていきました。

寮生活には12時には消灯してしまう、朝と夜に点呼が存在する、門限や食事・入浴の時間が設定されている等々の規則があり、自由は少ないです。しかし、寮生活を通して多くの友人と仲を深めることができ、寮生活にある完全自習時間というものを通して勉強する習慣を身に着けることができる等のメリットもあります。私自身、寮生活を始めて7年になりますが、慣れれば苦になることはまったく無く、むしろこの生活を楽しんでます。それに、一度親元を離れて生活することは良い経験になると思います。

私はこれまで生活してきたこの鹿児島の地を旅立ち、新たな場所での生活を始めます。この7年間で成長し、培った経験と知識、そしてたくさんの思い出を胸に自分らしく生きていきたいと思っています。

最後になりますが、これまで支えてくれた両親はもちろんですが、一緒に勉学に励んだ友人、教鞭をとってくださった先生方、担任を務めてくださった先生方、これまでお世話になった全ての方々に心から感謝します。

7年間を経て

2AEI 6番 長崎 玲

私が鹿児島工業高等専門学校に入学してから7年の月日が流れ、専攻科を修了するときを迎えることになりました。この文章を書きながら驚きましたが、人生の約3分の1を鹿児島高専で過ごしてきたことになります。

この7年間を振り返り、大事だと思うことを2つここに書きたいと思います。

1つ目ですが、“締め切りを守る”ことです。鹿児島高専ではレポートなどの課題は単位を取得するうえで行わなければなりません。それらには必ず締め切りが存在します。(私が現在書いている高専だよりの原稿も含まれます) 例え、課題の内容がとても素晴らしかったものであっても締め切りを守らなければそれは評価されることはありません。そのため、私は課題等において一番の重要視する点は締め切りだと思います。また、締め切りに対して余裕を持っている人の課題内容は良いものであることが多いです(私を除いてですが)。これは事前に課題を行えている精神的な余裕から起因するものだと考えられます。私自身の経験則ですが 最低でも提出日の2日前には課題を終わらせておくと安心できます。

2つ目ですが、“今日行えることは今日中に行う”ということです。これは1つ目のことにもつながりますが、書類や課題の締め切りが立て込んでいると書類や課題を終えるのが締め切り間近になりがちです。計画を立て、物事に取り組んでいる人はあまりこの状況にはなりません。私のように趣味やゲームの誘惑に負けて、課題等を後回しにすると高い頻度でこの状況で追い込まれます。

そこで、私は先に述べた“今日行えることは今日中に行う”ことを重要視するようにしています。課題等が多くあった場合、一度に行おうとすると作業量が多いですが、数回に分割すると意外と少なくなります。その少なくなった作業量を絶対に1日に行う作業とすることにして計画を立てます。その計画を達成すると小さいですが、達成感があります。これを得ることで、次の日へのやる気があります(ゲームというデイリーミッション的な感覚です)。これを繰り返します。私は意外と単純なのでその達成感を得るために、作業を行うことができました(たぶん…)。

最後に、お世話になった教職員の方々、そして、いつも研究などに協力してくれる友人・クラスメイトにお礼申し上げます。7年間ありがとうございました。

7年間の高専生活

建設工学専攻2年 外菌 侑樹

卒業シーズンになると、「入学してから卒業するまであっという間だった」という声をよく聞きますが、私にとっての7年間の高専生活は長く感じました。長く思えるほど充実していた高専生活を振り返りたいと思います。

まず、学校生活です。製図や測量実習、実験などは楽しく、90分の授業があっという間でした。座学では、退屈で眠ってしまうことがよくありました。今思い返すと、授業はしっかりと起きておくべきだったと後悔しています。本科4,5年次の文化祭では、友達と露店をだしました。ソースを入れすぎて辛くなってしまった焼きそば、塩をかけすぎて辛くなってしまった焼き鳥を美味しいと言いながら食べてくださった方々ありがとうございました。

次に部活生活です。部活動はサッカー部に所属していました。入部して5か月で手術が必要な怪我をしてしまったり、後輩にレギュラーを取られてしまったりと、苦しいことの多かった部活は何度も辞めたいと思いました。それでも、仲間と一緒にいることが楽しく、続けることができました。そして、全国高専大会2連覇に貢献することができ、笑顔で引退することができました。高専サッカーを通して、苦しいことはいつまでも続くわけではない、自分なら乗り越えることができるという自信を持つことができました。

寮生活では、いつでも友達に会えることができました。部活が休みの日は、1日中映画鑑賞したり、パンケーキを作った思い出があります。ロシアW杯は、自習室で応援しました。自習時間、夜中関係なく盛り上がりすぎてしまい、何度か寮務の方に怒られましたが、4年に1度だからと許してくださいました。迷惑をおかけしてすみません。

本科5年次の冬には、研究室の仲間とデザコン(銅線で作製した橋の強度などを競う大会)に参加するため、釧路に行きました。デザコンの結果は、57チーム中5位で、審査員特別賞を受賞しました。また、釧路の海鮮丼は口の中でとろけて絶品でした。街並みもきれいで、まるでロンドンにいるようでした。部活動が忙しく、旅行に行く暇がなかったので、デザコンを名目に旅行に行けてよかったです。

他にも書ききれないほど多くの思い出がありますが、文字数制限がありますので、書ききれないことは良い思い出として心の中に留めておきます。

最後に、私の楽しい高専生活を支えてくださった先生方、両親、友人達、他にもたくさんの方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

卒業生の就職・進学一覧及び修了生の就職・進学一覧

《機械工学科》

株式会社 IHI プラント
富士電機株式会社
宇部興産株式会社
株式会社 Misumi
旭化成株式会社
陸上自衛隊国分駐屯地
中部電力株式会社
AGC 株式会社
ハイウェイ・トール・システム株式会社
九州電力株式会社
第一精工株式会社
メタウォーター株式会社
株式会社アルファシステムズ
株式会社クレオ (2名)
エクセン株式会社
三菱ビルテクノサービス株式会社
第一三共プロファーマ株式会社
ANA ベースメンテナンステクニクス株式会社
株式会社オートテックジャパン
株式会社日産オートモティブテクノロジー
株式会社テイ・アイ・シイ
日本精工九州株式会社
ニシオティーアンドエム株式会社
東京ガス株式会社
株式会社 JAL エンジニアリング
竹田設計工業株式会社
富士ゼロックス鹿児島株式会社
エクセン株式会社
(進学) 鹿児島高専専攻科 (5名)
(進学) 九州工業大学情報工学部 (2名)
(進学) 鹿児島大学工学部 (4名)

《電気電子工学科》

富士電機株式会社
株式会社 SCREEN PE ソリューションズ
株式会社ユピテル (2名)
西日本旅客鉄道株式会社
キヤノンメディカルシステムズ株式会社
土工電気
株式会社 HYS エンジニアリングサービス
電源開発株式会社
関西電力株式会社
村田機械株式会社
株式会社鹿児島データ・アプリケーション
関西電力株式会社
株式会社ザイマックスアルファ
スタンレー電気株式会社
株式会社アルファシステムズ
株式会社安川電機 (2名)
パナソニック システムソリューションズ ジャパン株式会社
ダイキン工業株式会社
九州電力株式会社
株式会社アジル・ラボ
株式会社 FIXER
JFE プラントエンジ株式会社
東京ガス株式会社
(進学) 鹿児島高専専攻科 (2名)
(進学) 長岡技術科学大学電気電子情報工学課程 (3名)
(進学) 九州工業大学工学部
(進学) 九州工業大学情報工学部
(進学) 豊橋技術科学大学電気・電子情報工学課程
(進学) 鹿児島大学工学部

《電子制御工学科》

サントリースピリッツ株式会社
株式会社メンバーズ
ソフトマックス株式会社
サントリープロダクツ株式会社
コニカミノルタ株式会社
村田機械株式会社
株式会社安川電機 (2名)
ローム・アポロ株式会社
株式会社ディック
三菱電機プラントエンジニアリング株式会社
スタンレー電気株式会社
株式会社NHKテクノロジーズ
株式会社ファインディックス
富士電機株式会社
独立行政法人国立印刷局
株式会社モビテック
ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ株式会社
株式会社福井村田製作所
本田技研工業株式会社
株式会社タマディック
三菱電機株式会社
株式会社シーテック
JFE プラントエンジ株式会社
株式会社マイスターエンジニアリング
東海旅客鉄道株式会社
(進学) 鹿児島高専専攻科 (6名)
(進学) 豊橋技術科学大学情報・知能工学課程 (2名)
(進学) 豊橋技術科学大学電気・電子情報工学課程
(進学) 熊本大学工学部
(進学) 九州工業大学工学部
(進学) 九州工業大学情報工学部
(進学) 電気通信大学情報理工学部

《情報工学科》

株式会社 FIXER
株式会社 NSF エンゲージメント
リコージャパン株式会社
ジョンソンコントロールズ株式会社
メタウォーター株式会社
ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ株式会社
富士通株式会社
株式会社メンバーズ
株式会社 SUBARU
株式会社アドバンテスト (2名)
エスアイエス・テクノサービス株式会社
ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング株式会社
株式会社 GA technologies
株式会社富士通ソフトウェアテクノロジーズ
岩崎産業株式会社
株式会社クリエイティブキャスト
株式会社シマノ
富士電通株式会社
ハイテクシステム株式会社
九州リオン株式会社
関西電力株式会社
(進学) 鹿児島高専専攻科 (5名)
(進学) 九州工業大学情報工学部 (2名)
(進学) 熊本大学工学部 (2名)
(進学) 大阪大学基礎工学部
(進学) 静岡大学情報学部
(進学) 鹿児島大学工学部

《都市環境デザイン工学科》

九州電力株式会社
日本都市技術株式会社
五洋建設株式会社
東海旅客鉄道株式会社
あおみ建設株式会社
MEC Industry 株式会社
東洋建設株式会社
パソコン技術管理株式会社 (2名)
オリエンタル白石株式会社
株式会社大阪防水建設社
株式会社大翔
コーアツ工業株式会社
鹿児島県職員 (3名)
鹿児島市役所 (3名)
国土交通省九州整備局
薩摩川内市役所
(進学)長岡技術科学大学環境社会基盤工学課程(5名)
(進学)鹿児島高専専攻科(5名)
(進学)鹿児島大学工学部(3名)
(進学)豊橋技術科学大学建築・都市システム学系

《機械・電子システム工学専攻》

株式会社牧野フライス製作所
株式会社大気社 (2名)
チームラボ株式会社
ファナック株式会社
東海旅客鉄道株式会社
株式会社デンソーテクノ
凸版印刷株式会社
(進学)九州工業大学大学院生命体工学研究科
(進学)九州大学大学院システム生命科学府

《電気・情報システム工学専攻》

株式会社ファインディックス (2名)
E N E O S株式会社(旧 JXTG エネルギー株式会社)(2名)
株式会社 IHI プラント
マツダ株式会社
株式会社富士通ソーシャルサイエンスラボラトリ
株式会社安川電機
パナソニック株式会社 アプライアンス社
富士ソフト株式会社
東京電力ホールディングス株式会社

《建設工学専攻》

南国殖産株式会社
西日本高速道路株式会社
(進学)長岡技術科学大学環境社会基盤工学専攻

高専教育は如何にあるべきか — 38年の教育活動を振り返って —

電気電子工学科 須田 隆夫

1. 高専教育が評価されている？

高校でも大学でもない「高専という学校形態」において、どのような教育をなすべきか、高専教員にとって常に大きな課題である。近年、日経新聞の「高専に任せろ」に見られるように高専教育への期待が高いように見える。しかし2006年OECDの高等教育機関視察において高専が高く評価された時でさえ、国の中央では逆風で「いつ、つぶされてもおかしくない」と言われていたことを知るものにとって、常に危機感があり、現状が「追い風」とはとても楽観できない。

幸い、統合や消滅など経験することなく定年を迎えることができるが、この38年間の高専での教育を振り返り、高専教育の在り方を考察してみたい。

2. 「育てるべき技術者像」の変遷

私の赴任当時は設立から20年が経ち、高度経済成長期は過ぎたものの、日本経済はジャパンアズナンバーワンに象徴されるモノづくりで世界を席巻する存在であった。言うまでもなく、製造業における高専需要は大きかった。その後の1990年代からの「失われた20年」においても、高専への製造業の求人は多く、我々は「製造業での開発や設計に携われる技術者」育成を使命と考え教育を続けてきた。今から思えば、「産業構造の転換の遅れ」であった。科学技術教育の方も先を見据えた改革を進めたとは言い難い。これが今日の日本の衰退につながっている、は言い過ぎだろうか。とはいえ、高専では以下のような変化があった。

「即戦力のある中級技術者の育成」から「創造性のある実践的技術者の育成」へ、1990年代に入って「時代の変化に合わせ」育成すべき技術者像が「上向き」に変化した。「ものづくり」が前面に出され、「問題解決型」がキーワードとなった。この時は創造性とはいってもイノベーション的なものは意識されなかった。今では高専の代名詞であるロボコンも1988年から小規模に始まったが、全高専参加の規模になったのは1990年からである。

その後、**専攻科設置とJABEEの流れ**にすべての高専は動いていく。1992年に高専専攻科が初めて設置され、本校においても設置に向けた努力（学位取得者確保のための葛藤）がなされ、2000年に設置の運びとなる。一方JABEE（日本技術者教育認定機構）は1999年に設立され、2001年度から認定が開始された。専攻科を設置した高専が大学と同等性を認めさせる手段として認定取得を押し進めた。多くの高専が「複合・融合」分野で認定を目指し、本校も同様に3専攻体制でありながら、複合・融合認定を得るために2003年受審時に「起死回生」でひねり出したカリキュラム構成が現在まで続くことになっ

た。同時にJABEEと関連してPBLが新たな教育方法として検討され、ものづくりの教育改善も取り組まれた。筆者はこのときから創造実習で組込系マイコン（その頃はPIC）応用ものづくりの導入に取り組んだ。

2004年（H16）に全国立高専は1独立行政法人となった。独法化により予算は厳しくなり、教育改善すらGPや各種プロジェクト予算を獲得しないと困難になった。この流れはグローバル高専やKOSEN4.0へと続いている。しかし統一化による大きな波はむしろ2009年（H21）第2期からの、**教育の質保証を目指したモデルコアカリキュラム（MCC）とWebシラバス導入**であろう。これはJABEEと同様に一種の「評価作業」であり、作業そのものは教育改善ではないが多大な労力が注入された。

以上のように高専教育は、当然ながら文科省、国専教、高専機構の方針によって変遷してきたのである。

3. 高専教育のあり方とは

多くの教員は、目の前の学生を「如何に分かりやすく教えるか」「留年しないよう面倒をみる」是即ち教育、となり勝ちである。しかし少し視点を上げると、教育が支えるものはその国の将来の科学・文化である。「高専」は、これまでわが国の文化に小さいながら存在感を残してきたが、これからはどうだろうか。デジタル化、サイバー空間の発達によって、既存のテクノロジーの多くは誰でも容易に知り得、また利用できるようになった。その中で真に必要とされる技術者教育とは何か、を改めて議論する必要があるだろう。

大きなことを述べたが、私自身の38年の教育活動として最も力を注いだのは様々な実験実習の導入である。その中でも、目に見えない半導体素子を実際に作る実験と、そのための実験室の構築に大きなエネルギーを使った。しかしこの実験施設も時代の流れにより、私と共に消えてゆくことになる。最後に実験室の写真を掲げてこの稿を閉じる。



写真1：

立ち上げ当初の電子デバイス実験室。手作りのクリーンブースに中古の装置、配管も手作り。



写真2：

現在の電子デバイス実験室。良く整備されたが、この分野を引き継ぐ教員がないので消滅する。

定年退職にあたり思うこと

機械工学科 三角利之

私は、昭和48年4月に本校機械工学科に入学し、昭和53年3月に11期生として卒業しました。その後、豊橋技術科学大学に1期生として3年次に編入学し、大学院の修士課程を修了し、昭和57年4月に本校に赴任しました。そして、本校機械工学科の教員として39年間勤務し、令和3年3月に定年退職することになりました。鹿児島高専での在籍年数は、学生時代も含めると44年で、これまでの人生の約2/3を鹿児島高専で過ごしたことになります。定年退職が間近となった今、これまでに教職員、卒業生、学生、保護者の皆さんなど、様々な人に色々な場面で出会い、多大なご支援をいただいたお陰で、現在の自分があることに大変感謝しています。

まず、私の高専時代の担任であった山口重光先生は、どんな学生でも卒業までしっかりと面倒を見る先生で、多くの卒業生から大変親しまれていました。私に本校に来ないかと、最初に声をかけてくれたのも山口先生であり、先生との出会いがなければ、この場にいなかったものと思います。

また、本校に赴任してから、公私ともに最もお世話になった先生は前教務主事（本校の1期生）の河野弘先生と前サッカー部顧問の山崎亨先生です。河野先生からは、学生指導、進路指導、校務など、教員としてのほぼすべてのノウハウを懇切に教えていただきました。また、山崎亨先生の学生指導は、超一流で気迫がこもり、教員や学校としてのあり方など、色々とお教示いただきました。また、私は平成19年度から20年度に学生主事を担当し、特に体育科の北菌裕一先生をはじめとする主事補の先生方から献身的なサポートをいただきました。そのおかげで、学生主事の任務を無事遂行することができました。また、研究面では、豊橋技術科学大学機械工学系前教授の北村健三先生に、学生時代から現在に至るまで、研究の進め方や方向性について、さまざまなアドバイスをいただきました。さらに、機械工学科の先生方には、退職された先生方を含めて、校務や教育研究面、学生指導面等大変お世話になりました。このほかにも、書き尽くせないほど、皆さんにお世話になりました。心から御礼申し上げます。

このように、私は様々な人との出会いにより、良い運に遭遇し、大変充実した日々を過ごすことができた実感しています。良い運は人が運んでくるもので、有意な人材を得ることができれば、自分の力以上の大きな成果を上げることができます。人との出会いを大切に、誠実にかつ積極的に行動し、これからの人生も楽しめるように心がけていきたいと思っています。

最後に、鹿児島高専の益々のご発展と皆様方のご健勝をお祈りして、定年退職の挨拶とさせていただきます。

定年退職を迎えて

総務課長 安楽 四郎

2020年、本来であれば7月24日の東京オリンピック開幕で世界中がスポーツの祭典に歓喜し、10月には「燃ゆる感動かごしま国体」が開催され、スポーツ大好き人間の私にとって、感慨深い最後の年度になるはずでしたが、まさかまさかの新型コロナウイルス（COVID-19）とは・・・。真逆の意味で忘れることのできない定年の年となりました。

昭和61年12月、軟式庭球部（現ソフトテニス部）の学外コーチが縁で、鹿児島鉄道管理局（旧日本国有鉄道）から転職して参りました。以後34年4か月という長い間、歴代の校長先生はじめ教職員の皆様、保護者の皆様、時には学生の皆さんから多くの支援をいただき、無事に定年退職を迎えることとなりました。

この間、庶務・会計・学生系のそれぞれの業務において、係員から課長までの幅広い職務で様々な事業に携わることができ、大変貴重な経験を積ませていただいたと同時に、“人を知る”大切さを学ばせていただきました。

特に印象に残る事業としては、平成15年度に学生課専門職員として担当した第38回全国高専体育大会があります。本校は主管校として、全14競技16種目の統括をしつつ、サッカー、水泳、バスケットボール、ソフトテニスの4競技を開催。メイン競技のサッカー会場では開会式でヘリコプターからのボール投下、自衛隊音楽隊の演奏とファンファーレ、初午際さながらの鈴かけ馬と踊り連まで。国立高専の最後の大会として、記憶に残る大会となりました。

また、自分自身が指導するソフトテニス競技においては、大会初となる開催校による団体・個人優勝という偉業も成し遂げることができ、大会会場の吹上の地で胴上げされた時には、2年掛かりで準備してきた苦労が一瞬にして吹き飛んだことを、昨日のように思い出します。

こうして学外コーチからの37年間を振り返ってみますと、プライベートも含めてソフトテニス中心の毎日だったように思います。多くの方々にご迷惑をお掛けしましたが、皆様方のお力添えで何とかやってこられたものと、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

今なお世界では、長引くCOVID-19の影響で不自由な生活を強いられています。いつになればあたり前の日常を取り戻せるのか、まだまだ不安なものばかりですが、このような社会であればこそ、明確な目標や夢を掲げ、それぞれの立場でモチベーションアップに繋げていけると強く感じています。これからも、鹿児島高専のサポーターとしてエールを送り続けたいと思います。長い間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

出会い巡りあい

学生課 畠 俊洋

20代の半ばから購読を続けている雑誌があります。書評を中心に本と活字にまつわる話題を扱っている『本の雑誌』という月刊誌です。エンタテインメントとして本を購入する際に参考にしていますが、雑誌自体が面白いので30年を超える付き合いとなっています。ほかに参考にしているのは全国紙や地方紙の週末の読書欄です。毎週ひととおり目を通します。朝刊の書評を読んで、そのまま書店に出かけ『横道世之介』や『みかづき』を買い求めて読んだといったこともありました。

書評がきっかけということもありますが、実は、旅先でたまたま入った書店やお目当てを探しに出かけた書店で、偶然目にした本がきっかけになるということが多いように思います。今は自宅に居ながらにして希望の本が届けられる時代ですが、街なかの書店は広さも配置も異なるので、予期せぬ出会いが生まれる空間でもあります。自分の目に本が飛び込んでくる偶然是案外だいじかもしれません。ネットは絶版になった本を探すときに便利ですが、心と時間と懐に余裕がある日に書店内をパトロールするのは楽しく、思いがけない本と出会った日には幸せな気持ちで過ごし、読み終えるのが惜しくなるほどです。

ある本をきっかけにその作家の作品を読み漁るといったことは多くあります。たとえば、井上ひさしの『青葉繁れる』や『國語元年』、新田次郎の『銀嶺の人』、有吉佐和子の『複合汚染』、椎名誠（『本の雑誌』の元編集長です。）の『哀愁の町に霧が降るのだ』（この本は県立図書館で中・下・上の順に借りて読み後日、書店で改めて購入した。）、清水義範の『蕎麦ときしめん』、本多勝一の『日本語の作文技術』、城山三郎の『官僚たちの夏』、立花隆の『宇宙からの帰還』、茨木のり子『言の葉さやげ』などがそうでした。

さて、本校の図書館（グローバル・アクティブラーニングセンター）は改修工事を終えました。初めて本校の図書館に入り、新書が並んだツリー型の書棚を見た日のことを思い出します。様々な事柄を分かりやすく解説した本が多くの学生の皆さんの目に触れてほしいと願っています。寮生は、部活動の休みの日に帰寮途中に立ち寄ってみては。自宅通学生は、通学の車内での時間を読書に充ててみては。毎日少しの時間でも5年間で相当量の読書ができるのではないのでしょうか。本との出会いを契機に、新たな発見や巡りあいで世界が広がるものと思います。



With コロナ時代の国際交流

国際交流担当副校長（機械工学科） 徳永仁夫

[グローバルエンジニア育成事業]

遡ること2年前、令和元年度に高専機構は“グローバルに活躍するエンジニアを育成する”ことを目標とした“グローバルエンジニア育成事業（5年計画、公募型、以下GE育成事業）”をスタートさせました。鹿児島高専はこの事業に採択されており、本年度は事業2年目にあたります。いよいよ計画・準備段階（Plan & Preparation）から本格的な実施（Do）段階に移行する時期です。

鹿児島高専GE育成事業の第一目標は、未知の領域に最初の一步を踏み出す勇気と意欲、グローバルマインドを育むことです。本科低学年から様々な形で世界に触れ、挑戦する機会を提供していきます。

[令和2年度の活動計画（コロナ前）]

さて、2020年の鹿児島高専の国際交流活動はスウェーデンのNTI-Stockholm校（教員3名生徒4名）受入れからスタートしました。授業・実習見学や高専生も交えてのフィールドワーク&異文化交流、公開講座、ホームステイなどなど、ハードスケジュールをこなすスウェーデンの皆さんは帰国の途につきました。この時期、2月にはアカデミックインターシップ派遣（専攻科学生、フランス、1か月）、3月には台湾研修（本科3年生、1週間）、トビタテ留学JAPAN申請などを控えており、あわただしく2020年度の活動準備をしておりました。“中国武漢で原因不明のウイルス性肺炎が確認されている”、“ヒトからヒトへの感染拡大も起きている”というニュースが入っており、不気味さは感じていましたが、まさか2020年世界がこのような状況に陥るとは。

令和2年度に実施を予定していた主な海外研修（学生の海外派遣）と海外からの招へいプログラムの主要なものをいかに挙げます。これら人の往来を伴う活動は、すべて中止しなければなりませんでした。

（海外派遣プログラム）

- NTI-Stockholm校（ストックホルム）、2020年9月
 - 台北科学技術大学（台湾）、2020年3月、9月、2021年3月
 - ARA工科大（ニュージーランド）、2020年9月
 - ECCセブ校（フィリピン）、2020年9月
 - Toulouse、Montpellier IUT（フランス）、2021年2月
- （海外からの受け入れ）
- NIT-Stockholm校、2020年6月、2021年1月

- さくらサイエンスによる招へい（ペトロナス工科大、マレーシア工科大など）

[with コロナ時代を生きる]

「New Normal」というキーワードをよく目にするようになりました。このような時代だからこそ、新時代を創造するマインド、勇気、スキルを持った若人を育成しなければなりません。教育における“グローバル”の重要性は益々高まるでしょう。

様々な制約がある中で、本年度は何をすべきなのか、今何ができるのか、手探りで国際交流室メンバーを中心に活動を行ってきました。代表的なものを4つ紹介します。

1つは、“第5ブロック（九州地区）の9つの高専とペトロナス工科大（UTP）との合同シンポジウム（4th International Symposium on Innovative Engineering、ISIE2020）”の開催です。本年度は、世界の状況を考慮してオンライン開催という新しい形に挑戦します。

次は、“e-learningによるTOEIC講座”の実施です。「stay home」が求められた5月、学生に対して新しい学びの場を提供するために、この取り組みを始めました。前期、夏休み、後期と少しずつ修正を加えながら講座を進めてきました。参加学生も徐々に増加してきました。学生たちは2021年1月に実施されるTOEIC Bridge試験に向けて頑張っているところです。

3つ目に“Global Club（GC）”の設立です。GCは、学生の学生による学生のための国際交流を目指す学生組織です。鹿児島高専を元気にしたい、鹿児島高専のグローバル化に貢献したい、という学生有志によって組織されました。現在10名の学生が所属しています（この活動に参加したい学生や興味がある学生は、いつでもウェルカムです。国際交流室まで来てください）。不定期ですが、活動報告を“Global Club 通信”として発信しています。

4つ目は“オンライン異文化交流”です。こちらはGCの活動であり、GCメンバーを主体として進めています。交流のあるスウェーデン、ストックホルムにあるNTI-Stockholm校とZoomやTeamsを活用してグループディスカッション、テーマトークなどを行っております。なかなか定期的に開催することができないのですが、2020年12月の実施では、25名の学生が参加しました。テーマ選定やネットワーク不具合など、改善しなければならない点も多々ありますが、今後も続けていきたいと考えています。

以上、4つの取り組みを紹介しました。ところで、“Well”という単語は、日本語と英語では意味が異なるようです。あえて日本語で、困難な状況を乗り越えすべての若人の未来に栄冠が輝くよう、心からのエールを送らせていただきます。

Our Future in Globalized Society

般教科科・・アニス・ウル・レーマン

人間は、様々な形で世界と関わり、自分の属する世界をよりよく理解するために新たな課題を受け入れていかねばなりません。私自身について言えば、若い学生たちが日々の活動の中でどれだけ社会と関わっているのか、教育水準が向上しているのか、グローバル社会における競争力を高められているのか、常に関心を抱いています。

高専生の未来は、目に見えて明るいと確信しています。教員は、学生を家族の一員のように考えるべきでしょう。なぜなら、もし教員自身はその学生の保護者であるならば、学生に最高の教育環境を与え、準学士号や専門学士号を取得させ、より良い技術者になる道を歩ませたいと考えるはずだからです。

今までにない時代状況においても、私たちは将来世代のためのグローバル社会を創り続けていけるでしょう。教育の分野では、グローバル化が急速に進展しており、人々の考え方やつながり方、コミュニケーションに様々な方法が生まれています。他方で、市井の人々のあいだでもグローバル化は進展し、地域社会の中で様々な形での協力が可能になってきています。

学生たちがグローバルに活躍できる技術者となり、国際的なネットワークを構築していくためには、私たち大人が学生たちを信頼し、自由を与えることが大切だと考えています。こうした経験を通じて、誰もが大切にされるグローバル化社会が実現していくことを願っています。

Humans must interact with the world in various ways and accept new challenges to better understand their surroundings. I am always concerned about how well young learners are interacting with the environment in day-to-day activities, whether they are facilitated with better educational standards and whether they are becoming more competitive in global race.

I am convinced that future of KOSEN' s students is visibly bright. Teachers must consider students as members of their own family. This is because parents believe that young students are in the best educational environment and destined to earn associate or specialized degrees to become better engineers.

In the unprecedented time of all times, I think we create a globalized society which will benefit

future generations. Globalization in the field of education which is developing rapidly, creating various methods for the way people think and connect, as well as communicate. On the other hand, people are going globalized and are able to cooperate in various ways within their communities. We must believe in giving our students the freedom to become globalized engineers and to build an international network. I hope that through this experience, we can create a globalized society where everyone can be valued.

International Symposium on Innovative Engineering (ISIE 2020) 報告

2020年12月19日(土)、4th International Symposium on Innovative Engineering (ISIE 2020)を開催しました。このシンポジウムは、九州地区の9高専とペトロナス工科大(UTP、マレーシア)との連携で開催されています。第1回はUTP、第2回は鹿児島高専、第3回はUTP主催で開催されました。2020年は第4回を鹿児島高専主催で開催する予定だったのですが、コロナウイルスの世界的な感染のため人の移動ができない状況になってしまいました。シンポジウムの開催も危ぶまれたのですが、ニューノーマルの構築を目指し、オンライン形式でのシンポジウムを鹿児島高専が中心となって開催することとなりました。

すべてが初めての試みで、試行錯誤の連続だったのですが、九州地区の高専からは15件、UTPからは20件の参加申し込みがありました。また、高専を代表して鹿児島高専、松田教授から“Employing Multivariate Analysis in Japanese Literary Research”、UTPのDr. Ku Zilati Ku Shaari先生から“The Challenges and Opportunities for Internationalization during the Pandemic Crisis”と題した基調講演を頂きました。さらに、シンポジウムのパラレルセッション座長を鹿児島高専の本科生4名が務めました。

いくつかのトラブルはありましたが、ICTツールを活用した新しい形の国際交流について、大いなる可能性を再認識することができました。今回の挑戦が今後の鹿児島高専のグローバル化に貢献できると確信しています。

TOEIC 講座 「だから」の先を変えていく

緊急事態宣言で‘Stay home’を余儀なくされた5月、e-learningを使ったTOEIC講座は始まりました。e-learningはネット環境とスマホ1つで自宅に居ながらも、TOEIC対策ができる。まさにピンチをチャンスに変える1手として、学生の参加を呼びかけました。’Stay home’中で、募集活動が制限される中、前期は56名の学生が参加してくれました。その中で1～3年の学生を対象にパソコン室で、週1回の自習時間を設ける学習サポートを行いました。

以下、自習に参加をした1～3年生のアンケート結果です。

<受講者アンケート感想抜粋>

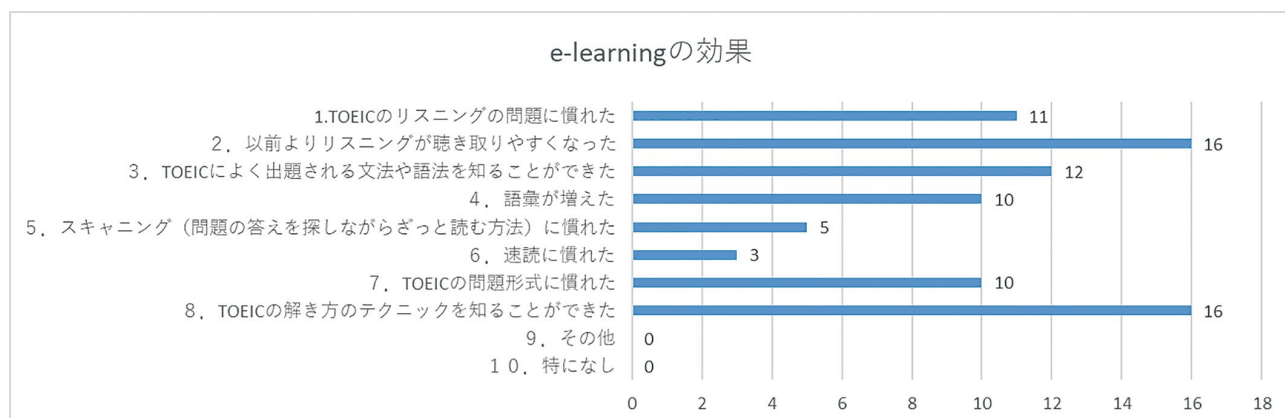
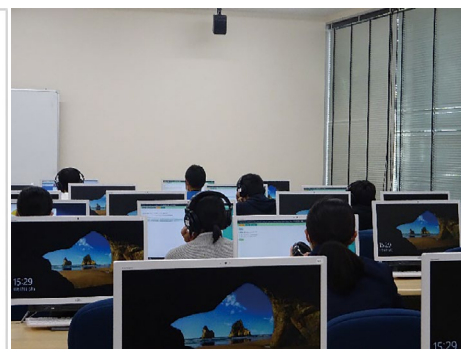
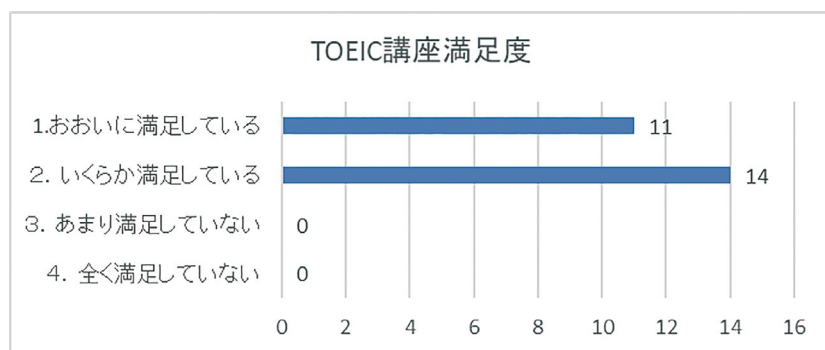
“自分のペースで進めることができたので学習しやすかったです。TOEICの問題形式になれることもできたので、よかったです”

“TOEIC講座に参加したことで、自分が苦手としていた問題形式の解き方のポイントを知ることができたので、これからの英語の勉強に活かしていきたいです。また、毎週放課後に自習時間があつたことで、講座に最後まで集中して取り組むことができたので良かったです。”

“英語の単語を知らなさすぎるので、英単語を覚えたら、かなり点数が上がるなと思いました。”

感想の中にはネガティブな反応も予想していたのですが、信じられないことに全てポジティブな感想ばかりでした。これらから参加者のTOEIC学習に対する満足感と真摯に取り組んだからこそ気づく自らの課題に真摯に向き合う様子がうかがえます。

特に低学年の学生にとってTOEICの学習は今、その努力や成果が評価されるものではありません。それでも自ら手を挙げてTOEICの学習を始めた学生たちの視線は未来に向けられています。高専生だから英語は苦手である。この「だから」の先を変える取り組みに、多くの学生が賛同し、行動し始めています。鹿児島高専生だから、将来使える英語を身につけられる。そんな目標を胸に、募集した後期のTOEIC講座の参加者は100名を超えました。使える英語の習得は容易なことではありません。多くの時間と努力が必要です。「だから」やらないのではなく、「だから」始める。「だから」の先を変える第1歩として、鹿児島高専の学生は動き出しています。



Global Club のミッション

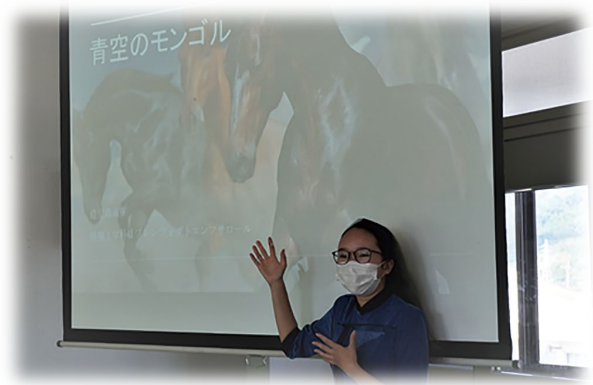
Global Club 代表 4M 下井倉 諄施

日本人の英語って変ですか？下手くそですか？大多数の人はYesと答えるでしょう。確かに、世界的に見ても日本人の英語は一般的に上手であるとは言われていないと思います。でもそれは、ネイティブと比べて、または、ペラペラの英語を喋れないと英語が喋れるとは言わないというような固定観念があるからではないのでしょうか。

僕たちGlobal Clubは、鹿児島高専のグローバル化を推進する学生団体です。僕たちは現在、スウェーデンのストックホルムNTI高校とオンラインで英会話を月に一回程度開催し、その他に、留学生にTA(ティーチングアシスタント)となってもらい英会話を練習する機会を作っています。また、英語に限らず、異文化理解力を伸ばすプログラムも計画しています。この中で、僕たちが目指しているところは、ペラペラな英語ではありません。いかに、サムライ English (日本人の英語のことです)で自分の思ったことを伝えられるか。コミュニケーションツールのひとつとして英語が使えるか。ここを目指しています。だから、英語が話せるようになりたい、何かやってみたいという思いさえあれば下手くそでいいんです。というか、下手くそじゃなかったら、英語部でペラペラな英語を目指すべきだと思います。偉そうなことを書いている僕も英語は全然しゃべれません。でも、英語が好きだし、将来は世界で活躍したいという夢があるから英語の勉強を続けています。また、実際に3年時の夏休みにフィリピンのセブ島に語学留学に行き、最初は全くコミュニケーションが図れなかったものの、最終日には現地の先生と2人でご飯に行くぐらい喋れるようになりました。自分の英語が伝わったときの嬉しさと感動は今でも忘れることができません。しかし、いざ英会話をやってみようとする、英語が伝わらないかもしれないし、聞き取れないかもしれません。でもそこで湧き出る悔しさは必ず今後の英語を勉強するうえでのモチベーションになると思います。そして、英語が話せない、聞き取れないと身をもって体感することが本当のスタートだと思います。そして、継続すれば必ず英語は喋れるようになるし、TOEICも同じだと思います。これらの活動はお金がかかりません。だから、本当にこのチャンスを使い倒してほしいと思います。特に低学年の学生は早い段階から一步を踏み出してほしいと思います。僕たちと真のグローバル人材を目指しませんか。



GCメンバー (高専祭にて)



高専祭でのプレゼンテーション



オンライン異文化交流 with NTI-Stockholm



Global Club 通信



私の同期は COVID-19

2020年3月電気情報システム工学専攻修了 塚本耕助

皆さん、こんにちは。2020年春に専攻科を卒業した塚本という者です。きっと今年の高専だよりは某ウイルスの話題ばかりではないかと推察します。そんな中で恐縮ですが私も、このタイミングでなにか感染の中心たる首都圏に就職した人間の体験談と、そこから感じたことを書かせていただこうと思います。思い返せば、地元を離れる直前の3月、先生方や家族と「入社即在宅勤務とかになるかもしれませんね」などと冗談を交わしていました。それから約半月後、入社5日前に会社より「入社中止のお知らせ」を受け取ってから事態は急転していきました。本当に在宅の日々が始まり、出社は隔週に一回程度、それもグループごとに時差出勤という形でした。在宅期間中もWebミーティング等で顔を合わせてはいましたが、結局、同期五十数名が一堂に会したのは入社から二か月以上後のことでした。以降、多少出社の頻度は増えたとはいえ定められた新人研修期間の三か月のほとんどを自宅にて過ごしました。

さて、このように書くと苦労話のようですが、実は私は研修期間を含め今日まで、自分の置かれた環境を苦だと思ったことはありません。入試直前に会社から連絡が来た時点で、むしろ楽しんでやろうという気持ちになっていたからです。今思えば、そういった気構えで研修を受けていたことはかなりプラスに働き、積極的に自分の成長の機会を探すことができたように思います。

きっとどんな困難な状況でも、それに吞まれてしまうか、それとも逆に力に変えて己の糧にしていけるかは、気持ち一つで決まってくるのではないかと思います。もちろん追い詰められると物事の悪いとこばかり目になってしまうのは人の性分ではありますが、だからこそ一歩引いて違った視点から考えたり捉えたりしてみることをおすすめします。自分にとってプラスに変えていけるヒントやチャンスに気が付きやすくなるのではないのでしょうか。

以上が、with コロナ新社会人を経験した私が皆さんに今お話しできることです。ここからは完全に余談なのですが、お仕事ならぬ「押し事」を抄らせにこちらに来たのに軒並みイベントが中止になって、非常にフラストレーションが溜まっています。こればかりは気の持ちようでどうにかなりそうもないので、自己主張の強すぎる私の同期たるコロナ君が終息という名の早期退職をしてくれることを願って、結びとさせていただきます。

皆さん、くれぐれも健康には十分留意して、それぞれの目標に向かって頑張ってください。応援しております。それでは。

高専を卒業・修了して思うこと

平成29年度 機械・電子システム専攻修了 前田裕一朗

私は平成27年度に電子制御工学科を卒業、平成29年度に機械・電子システム専攻を修了しました。(株)NHKメディアテクノロジー(現:NHKテクノロジーズ)に就職し、NHK鹿児島放送局内で勤務しています。業務内容としては、毎日のニュース送出や局内の放送システム管理、中継番組でのVE(ビデオエンジニア)業務などです。地方を生活拠点とした雇用形態もあるので、もし地元で働きたいという方がいましたらHPなどを確認してみてください。もちろん東京など都市部で働ける応募もあると思います。

さて、今回高専だよりの執筆依頼が来て正直何を書けば良いのか悩んだのですが、就職活動についてと学生時代やっとならば良かったことを書こうと思います。皆さんが就職活動や進学するにあたって一番重視していることは何でしょうか。重視する点は人それぞれ(勤務地、待遇、企業規模 etc...) だと思います。私の場合は九州で働けることを第一に考えて企業を探していました。その中で放送業界に興味を持ち、今の会社に就職しました。学生時代、将来どういった仕事をしたいのか・興味があるのか自分自身イメージできませんでした。毎日企業の募集要項を探す中、一番働いているイメージがしっくり来たのが今の会社でした。昔の私みたいに今にも興味がわからない人もいるかもしれませんが、根気よく企業の募集要項や大学の研究室を調べてみてください、きっと運命の出会いがあるはずです。まだ先が見えないコロナ禍ですが、皆さんの就職活動・進学が上手くいくことを願っています。

高専を修了して約3年経とうとしていますが、学生時代にやっておけば良かったと後悔していることは「自分のコミュニティを広げる」ことです。就職して思ったことは、大学生・院生はとてコミュニケーション能力が高く、アグレッシブです。高専は5年間、専攻科に進学すれば7年間同じ学校に通うこととなります。良く言えば同じ環境でじっくり専門的な勉強に励めますが、悪く言えば長い時間閉じた環境に居るということです。ぜひ学生時代に様々な事に挑戦して色々な所でコミュニティ・人脈・知見を広げてみてください。大人になって新しいコミュニティに属するのは意外と難しいものです。

最後に、高専に7年間在学していましたが思い返して見れば7年というのは意外と短いものです。社会人になるとより1年が短く感じるようになりました。社会人になると金銭的に余裕は出てきますが、時間がありません。時間に余裕がある学生時代に色々なことに挑戦してみてください。

宝

令和元年度 情報工学科卒業 瀬戸口 稔典

最近、迷子になりました。今年の夏に友人らと駅で待ち合わせをしたときのことです。遅刻をした私は、近場で時間を潰しているらしい友人らに連絡を取ってどこに向かえばいいかを聞きました。友人の一人から順番にどの道を通るかを伝えられ、なんとなくそれらしき道を進みましたが中々合流できず、最終的には駅まで友人が迎えに来てくれました。ありがたくも申し訳なく、情けないばかりです。

なぜ迷子になったのか、根本的な原因は遅刻にあります。40分の遅れは致命的でした。しかし、もう一つ理由があります。友人への確認を怠ったことです。遅刻という最初の失敗に引け目を感じてしまった私には、道順を送ってもらった挙句、事細かに確認をとるのは憚られることでした。これが二つ目の失敗となりました。

皆さんこんにちは。昨年度、情報工学科を卒業し、サイバートラスト株式会社に入社しました、瀬戸口です。皆さんにはミス挽回しようとしてミスを重ねる、そんな経験はあるでしょうか。失敗は成功の母ともいいますが、避けられるならば失敗せずに成功したほうがいいかもしれません。そこで、このたびは失敗を減らす方法を書きたいと思います。

一つは油断をしないことです。多くの場合、人が過ちを犯すのは油断しているときです。油断大敵という言葉がそれを示しています。最初は油断しないと決めていても、いつかまた気が緩んでしまうのはなぜでしょうか。皆さんもご存じの通り、それは慣れるからです。人間は成長する生き物、何度も繰り返したことは多少できるようになります。それでいつの間にか自信がついて、できると高をくくって、できないことをして失敗をします。いま自分に何ができるか、とても大変なことです、それを認識しておくのはきっと強みになるでしょう。

もう一つは失敗から学ぶことです。失敗は宝、そうかもしれませんが、その宝物を放置してはもったいないでしょう。避けられない失敗、挑戦したが故の失敗、安易な失敗、どれも大切な経験です。しかし、人間は学ばなければ成長はしません。過去を振り返って、失敗の理由を見つめなおすことこそが成功の母なのかもしれません。

最後に、頼るということです。きっといつか、自分一人ではどうしようもない時がやってきます。時間や場所など、色々な理由からどうしても失敗することというのは残念ながら存在します。それでも、幸いなことに頼れるなにかがどこかにあります。人でも動物でも物でも、なんでもいいです。躊躇せずに頼って生きていきましょう。頼れるもの、きっとそれが一番の宝です。

多くの人に支えられて

平成 29 年 3 月建設工学専攻修了 池田 匠児

私が鹿児島工業高等専門学校専攻科建設工学専攻を修了して、約4年が経過致しました。現在私は、長岡技術科学大学大学院技術科学イノベーション専攻に在籍し、日々研究や学内の委員会活動に打ち込んでいます。今回、本稿の執筆に際し、私のこれまでの経験から感じたことを皆様にお伝えできればと思います。私が感じたこと、それは「多くの人に支えられて今がある」ということです。ここからは、私の専攻科から大学院進学についてと、大学院進学後のお話をしていきたいと思います。

私は、専攻科卒業後は大学院へ進学し研究者への道を志望しておりました。しかし、両親にはこの選択は受け入れてもらえない状況でした。このときの私には、両親の反対を押し切ってまで進学の道を選ぶ勇氣はなく、悩んだ末進学を諦めておりました。そのようなとき、鹿児島高専在学時の研究室指導教員であった山内正仁先生が親身になってご対応くださいました。山内先生は私に大学院に進み、研究者としてさらなる高みを目指すべき人材だとおっしゃってください、また、入学金及び学費が全額免除となる長岡技術科学大学技術科学イノベーション専攻への入学を推薦していただきました、さらに、私の両親と直接お話をさせていただくなど、格別のご厚情とご指導をいただいたことは今でも私の胸に残っています。

大学院進学後は、これまで以上の高い研究能力を求められました。研究の中で実験や学会発表資料、論文作製、研究費の申請書作製を行うに際し、これまで携わった先生・先輩方に多くのご指導・ご鞭撻を賜り、ご尽力いただきました。その結果、日本学術振興会特別研究員への採択や日本学生支援機構の第一種奨学金業績優秀者全額返還免除に選ばれるなど、数多くの成果を得ることができました。これらの成果は、自分一人では絶対になし得ることのできなかったものであり、今の私があるのは、両親はもちろんのこと高専在学時から現在に至るまでに携わっていただいた、多くの人に支えられてもたらされたのであると強く感じております。

最後に在校生の皆様へメッセージを残して本稿を締めたいと思います。皆様は今後、進学や就職で悩むことや仕事や研究で困難に直面することがあります。そのようなとき、必ず支えてくれる人がいます。また、大きな成果をあげたとき、それは自分一人で得たものでなく多くの人に支えられて得たものであると常に周り人に感謝する心を持っていてください。そして、自分も他の誰かを支えることのできる人間になってください。鹿児島高専の益々のご発展と皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

大学院へ進学して

平成 31 年度機械・電子システム工学専攻修了 二渡 一昇

皆様こんにちは。私は専攻科修了後に大学院へ進学し、現在は東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻の修士 2 年に在籍しています。この度、大学院での日々について執筆依頼を頂きましたので、研究内容の簡単な紹介と進学して感じたことについて在校生の皆さんにお伝えできればと思います。

まず、私が在籍している人間環境学専攻は「人間」とそれを取りまく「環境」に注目した分野での工学全般を取り扱う専攻です。私が所属している研究室では特に高齢者を対象としたテーマが多く、生活の質を向上させるための支援機器に関する研究や、自動車や電動車いすのようなモビリティに関する研究などに取り組んでいます。このような分野では実際に「人間」を測る実験を行う機会があります。私自身も電動車いすに関する研究を行う中で、運転する人の行動や主観を評価するために Virtual Reality を用いた電動車いすシミュレータを開発し、生体情報の計測とその分析などを行っています。研究分野は高専で学んだ内容と少し離れていますが、根幹には高専で学ぶような工学的知識が詰まっています。様々な場面で役立ちました。

また私は、このような研究に取り組む中で、やはり東大には一流の教授陣と優秀な学生が集まっていることを実感しました。特に学生のレベルが高く、物事への着眼点や考え方、そして知識量には日々驚かされています。彼らは、私が高専でゆったり過ごしていた間に過酷な受験勉強を乗り越え、その後も高いレベルで学業を積み重ねて来たので、頭を使うような場面ではその差を感じてしまいます…。しかし、そのような学生が集まる環境では質の高い知識や経験を得る機会が非常に多くあり、大変な部分もある一方で自身の成長に繋がる本当に良い環境だと感じています。

私は高専在学中に成績がずっとトップにいるような優秀な学生ではなく、少し背伸びをして今の環境に飛び込みました。その結果、この 2 年間で自分の未熟な部分をいくつも痛感しましたし、挫折感を味わうこともありました。しかしながら、それ以上にとっても価値のある経験や知識を得ることができ、進学を選んで本当に良かったと感じています。私は大学院に進学することが必ずしもベストな選択であるかどうかはわかりません。ですが、成長意欲のある現役高専生の方には是非自分が成長できる環境を見つけてそこに飛び込んでみて欲しいと思います。皆さんの今後の進路選択が充実したものになることをお祈りします。

やりたいことを、探しに行こう

令和 2 年 3 月終了

電気情報システム工学専攻 亀澤 祥平

iPhone を生んだ Apple 社の共同設立者であるスティーブ・ジョブスをご存知でしょうか。彼は、1976 年にスティーブ・ウォズニアックと共に Apple I を完成させたときから、既に「コンピュータで世界を変える」というビジョンを持っていたそうです。事実、iPhone は私たちのライフスタイルを大きく変えました。ジョブスの死後、彼や Apple 社の功績を称えたビジネス本が登場しました。”彼が世界を変えることができたのは、ビジョンを持っていたからだ。だから、読者の皆もそうしたビジョンを持とう”、と口を揃えて。

しかし、私たちはスティーブ・ジョブスではないのです。やりたい事が明確に決まっている人はそうそういないでしょう。中には、自分にやりたい事なんて全く無い、と思いついている人もいるかもしれません。かつて、私もその一人でした。

鹿児島高専に入学したばかりの頃、私は特にやりたい事や将来の夢がある訳ではない、強いて挙げるならゲームが好きだがプログラマーになりたい訳でもない、そんな人間でした。あるとき、友人からプログラミングコンテストに誘われ、人が足りないという理由で渋々参加しました。そこで初めて複数人によるプログラムの開発を経験し、失敗もありましたが最終的に完成したときの達成感は今でも覚えています。それが、私がシステムエンジニアを目指すきっかけでした。現在私は九州大学の大学院に進学し、高専では学べなかったチームによるシステム開発のマネジメントについて学んでいます。

やりたい事が分からない在学生のあなたへ、私からのアドバイスです。自分自身のやりたいことを知るには、何かを始めるのが一番です。その場で考えを巡らせても、やりたい事は見つけられません。高専は、友人たちと談笑し、レポートの締め切り追われ、テストで赤点を取らないように注意していれば卒業できてしまいます。しかし、高専は卒業するための場所ではありません。5 年の間に様々な体験をし、自分自身のやりたい事を見つける場所です。もしかしたら、技術者になることが自分のやりたい事ではないと気付く場合があるかもしれません。しかし、技術者にならずに別の道を選んだ先輩たちも過去に沢山いるので、それも一つの選択肢でしょう。

私たちはスティーブ・ジョブスのように世界を変えるビジョンと才能はありませんが、それでも自身の人生を豊かにするためにやりたい事を探すことはできます。高専生活を通して、それをゆっくりと探していけば良いのではないのでしょうか。

在校生の皆様へ

平成 28 年 3 月修了
土木工学専攻 有馬 斗茂哉

2016 年 3 月に鹿児島高専専攻科土木工学専攻を修了し、約 5 年が経過しようとしています。

私は専攻科修了後、建設会社に入社し 3 年間現場施工管理業務に従事した後、始良市役所に入庁し、現在は道路管理者として工事発注・道路維持管理業務を行っております。

今回は建設会社と地方公務員という二つの立場で経験し、感じたことを紹介させていただきます。

まず建設会社での施工管理業務とはどのような仕事か分からない人も多いと思いますので、簡単に説明しますと、目的物の完成に向けて道筋を決めて計画を進める仕事になります。工事には当然締め切りがありますので、完成から逆算して工事の過程を計画し、品質を確保する管理業務や、工事が安全に進められるように作業計画、構造計算、書類作成等の業務を行います。この一連の業務の流れは、どの職種や環境にも当てはまることだと思います。

例えば学生の卒業研究においても、研究発表（目的物の完成）に向けて、実験の予定（工事の過程）を計画し、内容の質（品質）を高め、発表がスムーズ（工事が安全）に進むよう計画・練習を行いますよね。このような流れを頭の中で意識してできるようになると、先を見据えた行動が習慣的に行えるようになり、社会人として働く際に大きく役に立つと思います。

次に地方公務員という立場で働き始めてからは、直接的に利用者に関わる機会が多くなり、道路管理者として住民からの要望や道路改良計画時における交渉等で接する機会が増え、感謝されることや指摘、要望を受けることがあります。直接利用者と接する機会が増えたことによりコミュニケーション能力の重要性や自分自身の能力の低さに改めて気付かされました。同じ内容を説明するにしても、伝え方や言葉遣いで仕事の進み具合も大きく異なりますので、学生の中に色々なコミュニティに参加し、目上の方とコミュニケーションを図ることや、自分の考えを他者に説明する場などを経験することはとても大事で、必ず自分の成長に繋がります。コミュニケーション能力は、社会人になってから先輩や上司に教えてもらうわけではありません。在学中に積極的に課外活動などに参加し、学科や学年、学校を越えてコミュニケーションを図り、身に付けられるようにした方が良いと思います。社会に出ると、より一層、必要とされる能力になりますので、学生の中に経験できることは積極的に行動に

移すことをお勧めします。

最後に、学生時代は勉強やスポーツ、友人と遊ぶことに時間を割くことは大事だと考えています。やりたいことやしなければならぬことが多く、忙しいと思いますが、そういった生活の中にも学べるがたくさんあります。何事も惰性的にするのではなく、今何をするべきなのか、なぜこのタイミングですべきなのか、今一度私生活から考え方や物のとらえ方を考えてみてはどうでしょうか。

卒業生、修了生、在校生の今後の活躍を祈念し、皆様へのメッセージとさせていただきます。

コロナ禍における学校PR

広報委員長 松田信彦

はじめに

ご存じのとおり、新型コロナウイルスの影響で、今年
は高専の広報活動、特に新入生の募集に関するPRに極
めて大きな影響がありました。そういう状況の中で、本
校が今年1年取り組んできた学校PRについて、簡単
にご報告いたします。

1) 中学生に対するPR

今年、新型コロナウイルスの感染拡大で一番大きな影
響を受けたのは、新入生募集に関する活動でした。これ
は本校だけではなく、おそらくすべての高校・高専・大
学に言えることでしょう。

中学校では例年、早い学校は5月のGW明けから上級
学校説明会として、様々な高校（高専）を招いて説明会
を実施しています。本校も、中学校からの招きにより、
毎年多くの中学校を訪問いたします。例年だいたい7月
まで続くこの説明会への参加が、やはり時期的にも緊急
事態宣言がでた頃と重なるため、多くの中学が見合わせ
たり延期したりしました。

しかし、特に6月になると県内でもだいぶ感染が落ち
着いたこともあり、例年よりは少なかったものの、多く
の中学校を訪問することができました。

本校では、昨年から入試広報プロジェクトチームを作
り、このメンバーを中心に、各中学校を訪問させていた
だき、学校のPRを行ってまいりました。

しかし、教務主事の報告にもありましたとおり、一番
の目玉でもある8月の一日体験入学を、県内の新型コロナ
ウイルス感染拡大に伴い、やむを得ず中止としたこと
は、非常に残念なことでした。

2) バーチャルオープンキャンパス

一日体験入学は毎年400人前後の中学生に参加してい
ただく一大イベントなのですが、それが中止となったこ
とから、その代替措置として、一つは毎年10月に実施
している、中学生と保護者のための学校説明会を充実さ
せました。また、それにも参加できない中学生もいらっ
しゃいますので、HP上に、バーチャルオープンキャン
パスを開きました。

内容は、学校説明会でを行った、学校の概要の説明を動
画に作り変えて、項目ごとに見てもらえるようにしまし
た。また、ドローンを使って上空から学校の様子を撮影
した動画や、Googleのストリートビューの機能を使って、
校内を散策しているような動画も載せ、家にいながら、

学校内を歩いているような体験ができるようにもいたし
ました。

他にも学科ごとに動画を作成しての学科紹介など、こ
のコロナ禍を逆にきっかけとして、一段上の学校PRを
展開することができたと思っております。

3) Google スクールビュー

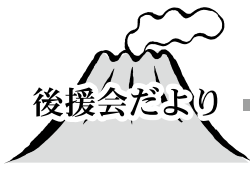
いま、上でも書きましたが、今年から、本校はgoogle
と連携して、いわゆるGoogleマップのストリートビュー
の機能を、学校内でも使えるようにいたしました。普通
のストリートビューは、道路上を移動することができま
すし、本校周辺の道路や、正門の前までは来る（見る）
ことができます。また、正門の外からであれば、学校の
中も（写真として）見ることができます。しかし、本校
に限らず、普通はどの学校も、正門から中に入ることは
できません。

しかし、本校は、九州内の高専では唯一、おそらく大
学や高校を合わせても数少ないと思いますが、校内もス
トリートビューの機能を使って移動することができ、ま
た360°ビューを見ていただけるようにいたしました。
詳しくは、本校のHPからバーチャルオープンキャン
パスに入り、学校紹介の中の「6. バーチャル校内見学」
をご覧ください。

4) Twitterの活用

もう一つ、今年から新たに導入したものがあります。
これは、本来はPR目的ではないのですが、学校からの
緊急連絡で、学生に対しては昨年からのmicrosoft365
のメールシステムであったり、LINE、moodleなどの様
々なツールで通知できるようになりました。しかし、保護
者に対しての連絡（周知）がHPしかありませんでした。
しかし、HPは自分から見にいかねば情報を得ること
ができません。また、本校は台風などの際、あらかじめ
停電に備えて、学内システムのサーバーをシャットダウ
ンさせるのですが、そうすると、HPの更新ができなくな
るという欠点もありました。それでは緊急時にHPに
書き込むことができなくなります。それを解消するため
にTwitterのアカウントを開設し、それを通して保護者
へも、もちろん学生にも、緊急連絡ができるようにいた
しました。

しかし、緊急連絡というのは、そう頻繁にあるもの
ではありません。そこで、ちょっとした学内情報を公開す
ることにしましたが、その結果、保護者だけでなく、広
く一般の方も、また中学生も見ることができるようにな
りました。今後はこのようなSNSのツールも積極的に活
用していきたいと考えております。



後援会卒業にあたり

後援会 会長 徳永健治

日頃より後援会活動にご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。

早いもので息子が鹿児島高専に入学してから7年の月日が流れ、今春同校の専攻科を修了し、卒業いたします。

卒業後は、さらなる専門性を身につけるために大学院へ進学します。

振り返りますと、息子は建築に興味を抱き、同校の環境デザイン工学科に入学いたしました。多くのことを学んでいくに従い、興味の幅は広がったようでした。探求心を持って、真剣に取り組む息子の姿を見ることができたことは親として、とても嬉しいことでした。同校での7年間は息子にとっても親にとっても、かけがえのないものになりました。この様に充実した学生生活を送るにあたり、様々な支援をしていただいた後援会活動に深く感謝いたします。

国立高専は全国に51校あり、社会が必要とする技術者を養成する専門的教育機関として5年間の本科一貫教育の後に、2年間の専門教育を行う専攻科が設けられています。同校の素晴らしいところは、学んだことを応用する能力を身につけるために、理論だけではなく実験・実習に重点が置かれていることと、研究等を通して、創造性をもった技術者の育成を目指しているところだと思います。

同校は高い専門性と即戦力として活躍できる能力を身につけた者を排出する工業高等専門学校であるために、学生にはしっかりと勉強することと、何より自己実現のための努力を惜しまないで欲しいと思います。

最近では、文部科学大臣も「大卒よりも即戦力である高専卒の給与水準を、大卒と同じ水準にするよう、いや、むしろ逆でもいいくらいだと産業界に働きかけていきたい」と語られているくらいなので、これから、ますます国際社会で活躍するエンジニアを育成する同校の役割は大きくなると思われます。

学生の皆さんがきっと同校の素晴らしい伝統を継承していってくれるものと確信しております。

最後になりますが、本年度は残念ながら新型コロナウイルス感染拡大防止のため、高専祭等の学校行事をはじめ、各部活動の対外試合や支部会等の後援会活動もすべて自粛する形となり、学生も保護者も不完全燃焼な1年となりました。来年は正常な形になることを切に願うとともに、今後とも同校学生が学ぶ環境をよりよくするための後援会活動に対しまして、温かいご理解ご協力ご鞭撻をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

校長先生をはじめ、先生方や三役及び後援会関係者の皆さん、7年間大変お世話になりました。ありがとうございました。同校の益々のご発展をお祈り申し上げます。

ありがとう

後援会 副会長 西川尚美

親子ともども緊張しながら高専の入学式に出席してから早いもので12年が経とうとしています。あっという間の時間でしたが、振り返るとたくさんの思い出がよみがえってきます。

高専には長男、次男とお世話になりました。ここでの生活は二人をととても成長させてくれました。控えめだった子が自発的に色々な事に挑戦するようになりました。

卒業するまで続けた部活動においてはよき指導者や友人に恵まれ、充実した時間を過ごしたようです。おかげさまで九州沖繩高専大会へ出場し、兄弟とも全国大会へ行くこともできました。高専大会があるたびに後援会には大変お世話になりました。

挑戦と言えば、体育祭の応援団もそうです。二人とも4年間やり通しました。夏休み中から練習が始まり放課後もほぼ毎日練習。よく続けられるものだと思います。しかし、当日の応援団の演舞の迫力と凛としたその姿を見たときは感動を覚えました。毎年、楽しみになり幸せを感じられる時間でした。

また、長男が在学中、兄弟で小学生の時からお世話になっているクラブで海外交流研修の話がありました。長男は自分も参加したいと言ってきました。旅費はアルバイトをして貯める。そして次男の分も出すから一緒に連れて行きたいと言ってきました。この時、次男はまだ中学生。早すぎると思いましたが、長男が4年生の時に行った海外の工場見学が刺激的で価値観の変わる出来事だったようで、機会があるなら弟にも早く海外の文化に触れてほしいというのが理由でした。二人で参加した海外交流研修はその後の生活にもよい影響を与えました。今は思うように出かけられませんが、新しい生活様式の中でも今後も異文化との交流が続けられることを願っています。

思いもかけず引き受けることになった理事。極度の人見知りの性格を知っている家族から驚きと心配の声があったのが5年前。途中からは副会長という役まで引き受ける事になりました。緊張しながら過ごしたそんな日々も終わりを迎えようとしています。家族の応援と理解、そして理事の方々の懐の広さがあったからこそ続けることができました。本当に感謝です。

最後になりましたが、保護者の皆さまにおかれましては日ごろから後援会の活動にご理解とご協力を賜りあつくお礼を申し上げます。理事として未熟な私を温かく受け入れて見守ってくださりありがとうございます。また、子供に携わりご指導いただいた諸先生方におかれましては感謝の念にたえません。これからの保護者の皆さまと高専の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

「あっ」という間の5年間

情報工学科5年 理事 地主園 義昭

息子が中学3年のときに私の母校である「高専を受験する」と決めたときには、うれしくもあり、大丈夫かなという不安もありました。なぜ不安であったかという、私が知っている高専は、高校というよりは大学に近い放任主義で、やる気が無い人、自分で考えてしっかり勉強しない人は、周りについて行けなくなり、落第や退学する人も出てしまうという古いイメージを持っていたからです（もちろんやる気のある人や助けを求める生徒には先生方は親身になって対応してくれます）。

そして、息子が無事合格し、入学、そして私は後援会の理事に。私なんかが理事をしても良いのかな？とも思いましたが、せっかく頂いたご縁だし、少しは息子の役にたてるのではと思ってお受けしたのを懐かしく思います。ただ、仕事の都合やらで理事会等を欠席してしまうことがあり、他の理事の方々にはご迷惑をおかけしてしまったと反省しております。

そして「息子はカリキュラムをこなしちゃんと卒業できるだろうか？」と不安に思いながらも、あっという間に5年が過ぎていました。高専祭で息子が応援団の演舞をしているのを見て、自分の頃は毎日遅い時間まで声出しや型の練習をしてヘトヘトになっていたのを思い出し、そして「きっとこの子らも一生懸命頑張ったんだろうな～後になればこれが良い思い出になるんだろうな」と自分と重ねていたのを懐かしく思います。社会人になったらあんなに死ぬ気で声出したりすることも無くなると思えば、とても貴重な体験だったのではないのでしょうか。

今でも息子が卒業して就職して社会人としてちゃんとやっつけていけるだろうかという不安はありますが、きっと高専での5年間で身に着けたものを生かして頑張ってくれると信じようと思います。卒業される方、まだ在学される方にアドバイスができるとすれば、「困ったときは高専の先輩を頼って」です。世の中には沢山の高専卒の先輩がいますが、後輩から頼られるのって結構うれしいものです。遠慮なく頼ってあげてください。

最後になりますが、先生方、後援会の方々、息子共々5年間たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

有意義な高専生活をありがとう

鹿児島高専後援会 元副会長
機械工学科 5年 理事

鹿児島高専サッカー部父母の会 元会長 芝 幸宏

思い起こせば、我が家の三男坊が鹿児島高専の門を潜り抜けて早5年。時の速さに驚愕している自分がいます。

息子は入学してすぐにサッカー部に入部し、5年間をほぼサッカーに打ち込みました。

同級生はもちろん、素晴らしい先輩・後輩・先生方との繋がりが、サッカー部・寮生活・応援団等で育まれたように思います。

ここで、鹿児島高専のシンボル『覇者の像』について少し話をしてみたいと思います。

今から50年以上前に、鹿児島高専初代校長の「サッカー部は強くなくてはならない」との思いで、学校の中心に建てられたものです。本校サッカー部は全国高等専門学校サッカー選手権大会27回優勝という輝かしい成績を誇っています。息子は5年生になり、そのサッカー部のキャプテンとして多くの部員をまとめてきました。本年度は残念ながら全国高等専門学校体育大会（兵庫県開催）は新型コロナウイルスの為出場が叶いませんでしたが、12月の全国高等専門学校サッカー選手権大会での4連覇を目指し、最後まで残った同級生と共に練習を続けました。

卒業後の進路についての三者面談では、「海外留学します！」と海外の大学受験に向けてカナダの語学学校への進学を目論んでおりましたが、これも新型コロナウイルスには太刀打ち出来ず、担任の先生のご助言を受け、推薦入試で県内大学への編入学する事になりました。

多くの先生や職員の皆様、後援会をはじめとする保護者の皆様、サッカー部監督をはじめ指導者の皆様、サッカー部父母の会・後援会の皆様のお陰様で、5年間息子と共に高専を楽しませていただきました。

感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

最後に鹿児島高専の後援会活動の話をしたと思います。

目的は学校の研究活動の助成や学生の課外活動の支援が主なものですが、本会計とは別に学生支援積立金としての国際交流支援金がございます。今年度は新型コロナウイルス感染が世界規模となり、学生の海外研修や国際交流、海外インターンシップなどが開催されませんでした。鹿児島高専には多くの国際交流プログラムが作成されており海外での授業参加や海外の大学生との交流事業が多くあります。

ぜひ在学生や今後鹿児島高専で学びたい若者の皆さん

はチャレンジしてみてください。

また保護者の皆様にお知らせいたします。毎年後援会主催で支部会が開催されます。日頃聞くことの出来ない学科ごとの先生のお話や卒業生の講話など、とても貴重な話が聞けますのでぜひ参加してみてください。

5年間の私の活動の思い出として、鹿児島市や鹿屋市での支部会への参加や後援会のホームページが完成した事、また多くの卒業生のご協力により学校敷地横に立派な同窓会館が完成した事など、鹿児島高専の保護者の一人としてとても嬉しく思います。多くの方に利用していただきたいです。

5年間を振り返って

電気電子工学科5年 理事 酒田 愛

平成28年2月合格内定者発表の日に、輝を抱きしめてから、早いもので5年が経ちました。学校まで2kmもない近隣ですが、なんとか理由づけをして2年次前期まで志学寮でお世話になりました。寮では、自分で洗濯も、鍋でラーメンを作ることもできるようになり、ペナルティでの奉仕作業も無難にこなし、規律ある集団生活のなかで、豊かな人間性や自制心を養うことができました。今後の社会生活できっと役に立つことでしょう。

小学からしていたハンドボールは「好きだけどガチではしたくない」と、1年で辞めてしまいました。ガチで頑張ってきた学生たちが、西日本大会や九州新人大会で優勝という快挙を成し遂げました。今後の活躍を楽しみにしています。

1年次に43人いたはずの電気の学生が、卒業者数29（現役）+7（先輩）=36名（予定）。「単位がどっかに落ちていないかな」「留年かも」と毎年言っていました。なんとか卒業の見込み。コロナ禍により就職難かと思いきや求人数は例年通り。4年次のインターンシップで訪れた関西の会社へ、リモート面接により初秋には内定をいただくことができました。最近では、新型コロナウイルス感染予防策を徹底したうえで、eスポーツ大会を企画するなど勢力的な活動も楽しんでいるようです。4月にはもう鹿児島にいないのだと考えるとじわっとくるものがあります。

先輩ママからの誘いで、大役とも知らずに仰せつかったクラス理事。理事会や懇親会では、先生・先輩方の話を直接聞くことができ、たいへん意義のあるものでした。平成から令和への新時代・コロナ禍による新生活様式へ移行するなかで、後援会メンバーとして学校と関わりを持つという貴重な体験をさせていただきました。一方で、クラスへの情報発信は全く足りておらず後悔ばかりです。申し訳ありませんでした。

5年間を無事に過ごせたのも、出会えた皆様のお力添えがあったからだと感謝の気持ちでいっぱいです。今後とも後援会へのご理解・ご協力をお願いいたします。本当にありがとうございました。

未来へ続く扉を開けながら

情報工学科1年 理事 藤田 洋子

平成から令和へ変わった年に中学3年生だった次男。自分の進路を決め、目標に向かう年となった。いや、もしかしたら、その前から兄の進んだ高専や生活ぶりを見ていて3年生になる前に決めていたのかもしれない。なぜなら進路調査票が届いた時に迷いがなかったから。夏から秋にかけ、体験入学や学校説明会を見聞きし、入学したい気持ちを高めていたようだった。

願書を書き、願書締め切り後、学校のHPで選抜志願者数を見て「やばい」と思ったのは私はもちろん、一番、次男本人だったのは間違いないと思う。

次男の名前は、聖良。出生届けを出した市役所でも間違って「せいら」と登録されたので、その場で「せらです。」と訂正したのがスタート。病院などでも「せいらちゃん」と呼ばれるたびに「せらです。」と。名前は、長男と同じ文字を一文字使おうと決めていて、そこから悩みました。最終的には、『けせらせら～なるようになる～』の一部。兄の『聖』、優良可:普通であり、元気であれば。ただ、『なるようになる』と流されるのではなく、『自分がなりたいようになる』ために自分で考え・行動する人になってほしい。そう思い、名前を付けた。

次男の入試当日まで親として何をしてあげるべきなのか考えたが、特にこれと言って何も出来ない。朝、「いってらっしゃい、ケガをしないようにね。」そして、「おかえり」と無事である姿を見る。そんなことぐらい。当日も、「いってらっしゃい。」「おかえり、どうだった？」後は結果を待つことのみ。結果は、合格。ホッとした瞬間。

4月の入学式。本当であれば私も同席し名前を呼ばれる姿を見るはずだったが、新型コロナウイルスのために、式典に入ることが出来ず、正門や体育館前で写真を撮るのが精一杯。もちろん、教室に入ることも出来ず、担任の先生にも保護者の方にもお会い出来ず。理事を引き受けたものの、何の役にも立ておらず申し訳なく思っている。

次男は、今、新型コロナウイルス流行の中、初めて出会ったクラスメイトと共に、日々、楽しいこと、苦しいことの扉を開き『自分がなりたいようになる』ために学生生活を送り続けているのであろう。未来へ続く扉を明けながら前進する次男に「いってらっしゃい。」

大きく翼広げ 翔け上がれ！！

機械工学科1年 理事 中野 里美

我が家の似ても似つかない兄弟。

性格も見た目も違う3つ違いの兄と弟。考え方も違うのに、何故だか兄の背中を追って「鹿児島高専へ行きたい！」と目標を立て、受験に挑みました。そして令和2年4月、晴れて高専生になりました。

今年は新型コロナウイルスの影響で、入学式も保護者入室禁止・臨時休校・遠隔授業の実施など、戸惑いと不安でスタートした高専生活となりました。我が家は、4年の兄の存在のおかげで、幾分か不安は軽減されました。数ヶ月経ち、今では高専生活にもすっかり慣れたようで安心しています。自由奔放な兄とは違う学校生活を、満喫できているようです。クラスの友達、サッカー部の仲間にも恵まれ、毎日元気に通学しています。

我が家でたまに目にする光景ですが、兄弟で学校内の話して盛り上がったり、兄が弟にちょっとしたアドバイスをしたりと、共通の話題が増えたようです。

3学年違いで中学校も入れ違いだった兄弟ですが、同じ学校に通う先輩後輩として仲良く会話している姿を、微笑ましく思います。

似ても似つかない兄弟ですが、共通して小さな頃から好きだった事は、「モノづくり」です。

小学生の頃、ドライバー片手に防犯ブザーやゲーム等を分解しては、別のケースに入れ替えるような事をしていたのを思い出します。高専企画の小学生向けのモノづくりイベントに参加した事も有りました。

「モノづくり」を好きな子にとって、高専は最高の環境だと思います。他では学べない専門教科・技術を5年間でしっかり習得して下さい。

今後、暮らしや産業 IOT 社会において大きな影響を与えるであろうAI。今後、様々な分野において人の生活や企業の発展にAIの技術が欠かせないものになっていく事は確実です。

高専生のみなさん、ぜひ技術者としての知識・スキルをしっかり身につけて下さい。そして21世紀の世界を支える技術者として「大きく翼を広げ、翔け上がれ！」

高専生、卒業生の益々の活躍を期待しています。

最後に、先生方・職員の皆さま、後援会の皆さまに心より感謝申し上げます。



2021年度行事予定表 (暫定版)

No.1

令和3年(2021)4月				令和3年(2021)5月				令和3年(2021)6月				令和3年(2021)7月			
日	曜日	本 科	専 攻 科	日	曜日	本 科	専 攻 科	日	曜日	本 科	専 攻 科	日	曜日	本 科	専 攻 科
1	木		解令交付式	10	土			10	火			10	木		
2	金		者任式	11	日			11	水			11	金		
3	土			12	月			12	木			12	土		
4	日		入学式(0時)/入寮式(10時) 開校60周年記念式典/入学式(15時)ウェルカムパーティ	13	火			13	水			13	金		
5	月		入学式(18時)(在校生:特学) 入学式(19時)(全学年) 入学式(20時)(専攻科)	14	水			14	木			14	土		
6	火		授業開始(特別) 入学式(21時)(専攻科)	15	木			15	土			15	日		
7	水		入学式(22時)(専攻科)	16	金			16	日			16	月		
8	木			17	月			17	火			17	水		
9	金			18	水			18	木			18	金		
10	土		学生会/グループ研修	19	木			19	金			19	土		
11	日			20	金			20	土			20	日		
12	月			21	日			21	月			21	火		
13	火			22	月			22	火			22	水		
14	水			23	火			23	水			23	木		
15	木			24	木			24	金			24	土		
16	金			25	金			25	土			25	日		
17	土			26	日			26	月			26	火		
18	日			27	月			27	火			27	水		
19	月			28	火			28	水			28	木		
20	火			29	水			29	木			29	金		
21	水			30	木			30	金			31	土		
22	木			7	日			7	月			14	土		
23	金			8	月			8	火			15	日		
24	土			9	火			9	水			16	月		
25	日			10	水			10	木			17	火		
26	月			11	木			11	金			18	水		
27	火			12	金			12	土			19	木		
28	水			13	土			13	日			20	金		
29	木			14	日			14	月			21	土		
30	金			15	月			15	火			22	日		
31	土			16	火			16	水			23	月		
				17	水			17	木			24	火		
				18	木			18	金			25	水		
				19	金			19	土			26	木		
				20	土			20	日			27	金		
				21	日			21	月			28	月		
				22	月			22	火			29	火		
				23	火			23	水			30	水		
				24	水			24	木			31	木		
				25	木			25	金						
				26	金			26	土						
				27	土			27	日						
				28	日			28	月						
				29	月			29	火						
				30	火			30	水						
				7	日			7	月						

本学教員及び職員のための学校説明会
 (本校・電気島市)
 春七ヶ丘ハーブデー
 九州沖縄地区高専方大会
 (熊本)
 二輪車免許講習会
 特別研究1ラウ→確定
 高校部会、後援会総会
 交通安全講習会、自転車意識向上講習会
 (12.30年)
 学友自転車登録、学生講話
 心臓病予防講演会(1~5年生)

令和3年(2021)12月				令和4年(2022)1月				令和4年(2022)2月				令和4年(2022)3月			
曜日	回数	行事	本学	曜日	回数	行事	本学	曜日	回数	行事	本学	曜日	回数	行事	本学
水	8	卒業式	1	火	131	特別研究員募集(学位審査会)	3	火	1	卒業式	160	火	1	卒業式	160
木	9	卒業式	2	水	132	卒業式	10	水	2	卒業式	161	水	2	卒業式	161
金	10	卒業式	3	木	133	卒業式	11	木	3	卒業式	162	木	3	卒業式	162
土	11	卒業式	4	金	134	卒業式	12	金	4	卒業式	163	金	4	卒業式	163
日	12	卒業式	5	土	135	卒業式	13	土	5	卒業式	164	土	5	卒業式	164
月	13	卒業式	6	日	136	卒業式	14	日	6	卒業式	165	日	6	卒業式	165
火	14	卒業式	7	月	137	卒業式	15	月	7	卒業式	166	月	7	卒業式	166
水	15	卒業式	8	火	138	卒業式	16	火	8	卒業式	167	火	8	卒業式	167
木	16	卒業式	9	水	139	卒業式	17	水	9	卒業式	168	水	9	卒業式	168
金	17	卒業式	10	木	140	卒業式	18	木	10	卒業式	169	木	10	卒業式	169
土	18	卒業式	11	金	141	卒業式	19	金	11	卒業式	170	金	11	卒業式	170
日	19	卒業式	12	土	142	卒業式	20	土	12	卒業式	171	土	12	卒業式	171
月	20	卒業式	13	日	143	卒業式	21	日	13	卒業式	172	日	13	卒業式	172
火	21	卒業式	14	月	144	卒業式	22	月	14	卒業式	173	月	14	卒業式	173
水	22	卒業式	15	火	145	卒業式	23	火	15	卒業式	174	火	15	卒業式	174
木	23	卒業式	16	水	146	卒業式	24	水	16	卒業式	175	水	16	卒業式	175
金	24	卒業式	17	木	147	卒業式	25	木	17	卒業式	176	木	17	卒業式	176
土	25	卒業式	18	金	148	卒業式	26	金	18	卒業式	177	金	18	卒業式	177
日	26	卒業式	19	土	149	卒業式	27	土	19	卒業式	178	土	19	卒業式	178
月	27	卒業式	20	日	150	卒業式	28	日	20	卒業式	179	日	20	卒業式	179
火	28	卒業式	21	月	151	卒業式	29	月	21	卒業式	180	月	21	卒業式	180
水	29	卒業式	22	火	152	卒業式	30	火	22	卒業式	181	火	22	卒業式	181
木	30	卒業式	23	水	153	卒業式	31	水	23	卒業式	182	水	23	卒業式	182
金	31	卒業式	24	木	154	卒業式		木	24	卒業式	183	木	24	卒業式	183
			25	金	155	卒業式		金	25	卒業式	184	金	25	卒業式	184
			26	土	156	卒業式		土	26	卒業式	185	土	26	卒業式	185
			27	日	157	卒業式		日	27	卒業式	186	日	27	卒業式	186
			28	月	158	卒業式		月	28	卒業式	187	月	28	卒業式	187
			29	火	159	卒業式		火	29	卒業式	188	火	29	卒業式	188
			30	水	160	卒業式		水	30	卒業式	189	水	30	卒業式	189
			31	木	161	卒業式		木	31	卒業式	190	木	31	卒業式	190

外国人留学生支援委員会
 教育プログラム点検会議
 回教團 本科生出席すべき日 174日(授業日 150日、 試験日 14日、 学校行事 10日) 休み189日、 予備日 2日
 ※ 専攻科特別指導日 19日

編 集 後 記

「鹿児島高専だより」第75号をお届けいたします。

今年度は新型コロナウイルスが猛威を振るい、その感染症の影響で世界中が危機的な状況となっています。日本も例外ではなく、この編集後記を執筆時点でも未だ終息の気配は感じられず、それどころか第3波の真ただ中にいます。ここ鹿児島県でも断続的に感染報告があり、そのような中でも学生の学びの機会を奪うことのないように、教育現場でも様々な対応が必要となりました。教職員の皆様におかれましても学生のために、創意工夫を凝らした遠隔授業用のコンテンツを作成していただくなど、あわただしい毎日を送られた（送られている）ことと思います。

そのような状況ですので、多くのイベントも中止や延期を余儀なくされました。特に、56年ぶりに日本での開催となるはずでした東京オリンピック・パラリンピック（当時の名称はパラリンピックではなく、国際ストーク・マンデビル競技大会だったそうです。）も延期となりました。高専関係の大会やコンテストでも中止となったものや、オンライン開催となったものもありました。本校の高専祭も学外からの観客をお断りすることとなり、体育祭に関しては動画サイトでの配信という形になりました。それでも学生は実行委員会を中心に今できることに精一杯取り組んでくれ、高専祭にかける思いを感じられるものとなりました。学生たちが、今できることは何かを考え実行してくれたことに感心するとともに、よく言われるように『困難な時こそ新しい発見のチャンス』という思いで、学校が一丸となって頑張らなければ、と感じた1年でした。

最後に、高専だよりの発行にあたり、ご寄稿していただきました執筆者の皆様に厚く御礼申し上げます。

情報工学科 新徳 健

「高専だより」専門委員会委員

委員長 新徳 健（情報工学科）
委員 北菌 裕一（一般教育科）
南金山裕弘（機械工学科）
井手 輝二（電気電子工学科）
室屋 光宏（電子制御工学科）
川添 敦也（都市環境デザイン工学科）

担当事務 学生課図書情報係

「鹿児島高専だより」第75号

編 集 鹿児島工業高等専門学校 広報委員会

発 行 鹿児島工業高等専門学校

〒899-5193

鹿児島県霧島市隼人町真孝1460-1

